

つか ばたけ い せき III
塚 畠 遺 跡 III
— E地点の調査 —

2008

本庄市遺跡調査会

序

本庄市が所在する埼玉県北部に位置する児玉地方は、県内でも有数の遺跡の宝庫として知られており、本庄市だけでも市内に500カ所以上もの埋蔵文化財の包蔵地が存在しています。これらの遺跡は、旧石器時代から中近世の長い時代に及ぶものですが、中でも古墳時代の遺跡の多さは、県内随一とも言われています。特に、県指定史跡の鷲山古墳、市指定史跡の金鑽神社古墳、八幡山古墳、庚申塚古墳、秋山古墳群、二本松古代住居跡、県選定重要遺跡の長沖古墳群、大久保山古墳群、旭・小島古墳群、西富田遺跡など、該期の著名な遺跡も多く所在し、古墳時代研究の好フィールドとして、県内外の多くの研究者からも注目されている地域の一つです。

本書は、平成15年にスゴー運送株式会社の本社屋と倉庫建設に伴う事前の記録保存を目的として実施した、本庄市児玉町共栄に所在する塚畠遺跡(E地点)の発掘調査の成果を記録したものです。発掘調査は、掘削によって地下に埋没している埋蔵文化財を破壊する可能性が高い建物や諸施設の基礎部分に限定された比較的小規模なものですが、調査区内からは本遺跡の特徴でもある古墳時代中期～後期の集落を構成していた竪穴式住居跡が多数検出され、その中から当時の人々が日常生活で使っていた土器などの多くの遺物が出土しました。また、今回のE地点の調査では、これまでの本遺跡の調査では未検出であった鎌倉時代後期の遺構と遺物が検出されており、武蔵七党の児玉党発祥の地として全国的に有名でありながら、中世の歴史資料にあまり恵まれなかった当地域にとって、貴重な資料を得たと言えるでしょう。

本書が、学術研究の基礎資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護や遺跡を理解するための一助として、多くの方々に広くご活用いただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで、文化財の保護に対する深いご理解とご尽力を賜りましたスゴー運送株式会社をはじめ、ご教示・ご協力いただきました皆様に、心から感謝申し上げます。

平成20年 7月 28日

本庄市遺跡調査会
会長 茂木 孝彦

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市児玉町共栄字南共和288-1、317-1、330-1に所在する、塚畠遺跡E地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、スゴー運送株式会社の本社屋と倉庫建設に伴う事前の記録保存を目的として、平成15年10月30日から12月26日の期間に実施した。
3. 発掘調査は、業務委託を受けた児玉町遺跡調査会が実施し、その調査担当には尾内俊彦と松澤浩一があたった。
4. 発掘調査から本書刊行に至る経費は、すべてスゴー運送株式会社が負担した。
5. 本書の執筆及び編集は、恋河内昭彦が行った。
6. 本書で使用した地図は、国土地理院発行の五万分の一（平成2年）・二万五千分の一（平成5年）と、参謀本部陸軍部測量局作成の二万分の一迅速測図（明治18年）である。
7. 第3図と第4図のXY座標値及び抄録中の北緯・東経の数値は、世界測地系による。
8. 本書に掲載した出土遺物の実測図は、新井嘉人と恋河内が作成した。
9. 本書で使用した写真は、遺構を調査担当者が、遺物を磯崎勝人が撮影した。
10. 報告書を作成するにあたり、遺構番号をA地点からの通し番号と整合させたため、以下のとおりE地点の遺構番号を一部変更した。

旧 番 号	新 番 号	旧 番 号	新 番 号
第54号住居跡	第61号住居跡	第40号土坑	第16号土坑
第61号住居跡	第37号住居跡	第41号土坑	第19号土坑
第68号住居跡	第4号住居跡	第42号土坑	第20号土坑
第76号住居跡	第64号住居跡	第6号溝跡	第5号溝跡
第77号住居跡	第68号住居跡	第9号溝跡	第6号溝跡

11. 本書中の遺物観察表に記した記号は、以下のとおりである。
A－法量、B－成形、C－整形・調整、D－胎土、E－色調、F－残存度、G－出土位置、
H－備考
12. 発掘調査から本書刊行にあたって、下記の方々や機関からご教示・ご協力を賜った。記して感謝します。
赤熊 浩一、大谷 徹、金子 彰男、駒宮 史朗、坂本 和俊、篠崎 潔、外尾 常人、
田中 広明、田村 誠、富田 和夫、鳥羽 政之、中沢 良一、長滝 歳康、中村 倉司、
丸山 修、矢内 勲
埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、埼玉県埋蔵文化財調査事業団

塚畠遺跡E地点発掘調査組織

旧児玉町遺跡調査会（平成15年度）

会 長	雉岡 茂	児玉町教育委員会教育長
理 事	田島 三郎	児玉町文化財保護審議会委員長
	清水 守雄	児玉町文化財保護審議会副委員長
	桜井 豊	児玉町文化財保護審議会委員
	荒井 一夫	〃
	間正 明彦	〃
	杉村 義昭	児玉町総務課長
	出牛 博	〃 総合政策課長
	前川 由雄	〃 農林商工課長
	鈴木幸比古	〃 土木課長
	立花 勲	〃 都市計画課長
	清水 満	児玉町教育委員会社会教育課長
幹 事	永尾 清一	児玉町教育委員会社会教育課長補佐
	鈴木 徳雄	〃 文化財係長
	恋河内昭彦	〃 文化財係主任
	徳山 寿樹	〃 文化財係主事
	大熊 季広	〃 文化財係主事
	松澤 浩一	〃 文化財係主事（調査担当）
調査員	尾内 俊彦	児玉町遺跡調査会職員（調査担当）

塚畠遺跡E地点整理・報告書刊行組織

本庄市遺跡調査会（平成20年度）

会 長	茂木 孝彦	本庄市教育委員会教育長
理 事	清水 守雄	本庄市文化財保護審議委員
	佐々木幹雄	〃
	丸山 茂	本庄市教育委員会事務局長（会長代理）
監 事	八木 茂	本庄市監査委員担当副参事
	小谷野 博	〃 参事兼会計課長
幹 事	儘田 英夫	本庄市教育委員会文化財保護課長（事務局長）
	鈴木 徳雄	〃 課長補佐兼文化財保護係長
	太田 博之	〃 埋蔵文化財係長
	恋河内昭彦	〃 埋蔵文化財係主査
	大熊 季広	〃 埋蔵文化財係主任
	松澤 浩一	〃 埋蔵文化財係主任
	松本 完	〃 埋蔵文化財係主事
	的野 善行	〃 臨時職員
調査員	尾内 俊彦	本庄市遺跡調査会 職員

目 次

序

例 言

目 次

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯 1

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境 3

第Ⅲ章 遺跡の概要 5

第Ⅳ章 検出された遺構と遺物 7

第1節 竪穴式住居跡 7

第2節 井戸跡 49

第3節 土坑 50

第4節 溝跡 58

第5節 その他の遺物 59

第Ⅴ章 ま と め 61

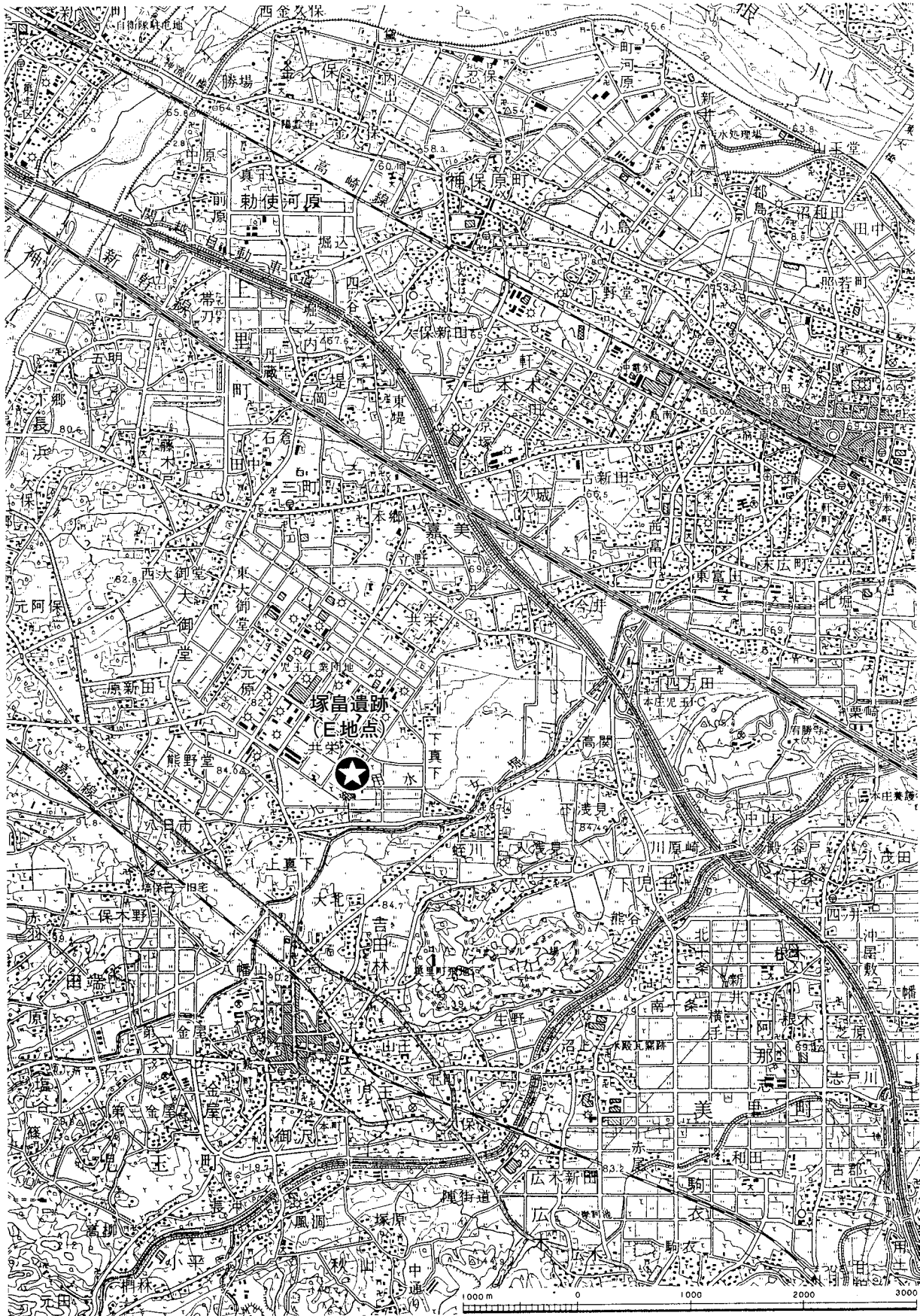
第1節 E地点出土の古墳時代土器の時期区分と様相 61

第2節 E地点出土の中世在地産土器の様相 65

<参考文献> 66

写 真 図 版

報 告 書 抄 録



第1図 遺跡の位置 (1)

第 I 章 発掘調査に至る経緯

平成15年2月13日、スゴー運送株式会社の本社屋と倉庫等の建設を予定している埼玉県児玉郡児玉町大字共栄(元本庄市児玉町共栄)字南共和288番地-1と317番地-1の土地所有者である岡田富貴夫と、同じく330番地-1の土地所有者である岡田一二三より、開発予定地内にかかる埋蔵文化財の所在とその取り扱いについて、児玉町教育委員会に照会があった。

照会のあった開発予定地は、『遺跡分布地図』に記載された周知の埋蔵文化財包蔵地であるNo54-029遺跡の範囲内に位置していることから、「埋蔵文化財の包蔵に注意を要する区域に相当することから、現状変更を実施する場合は、事前に町教育委員会と施工方法、施工時期等について連絡調整し、掘削部分を中心とする現地立会いによる確認調査を実施する必要がある」ことを、平成15年2月19日付け児教社第148号と第149号によりそれぞれ回答した。その後、開発予定地における文化財の埋蔵状況を把握するため試掘調査を実施したところ、開発予定地のほぼ全域から古墳時代後期の竪穴式住居跡を主体とする多くの遺構の所在が確認された。そのため、建物の配置や施工方法について協議したところ、設計上掘削により埋蔵文化財に影響が及ぶと考えられる倉庫建物の基礎部分(E2区～E6区・E9区・E10区)、合併浄化槽埋設部分(E7区)、防火水槽建設部分(E8区)、碎石空貯留浸透施設建設部分(E1区)については、事前に記録保存のための発掘調査を実施する必要があることを説明した。

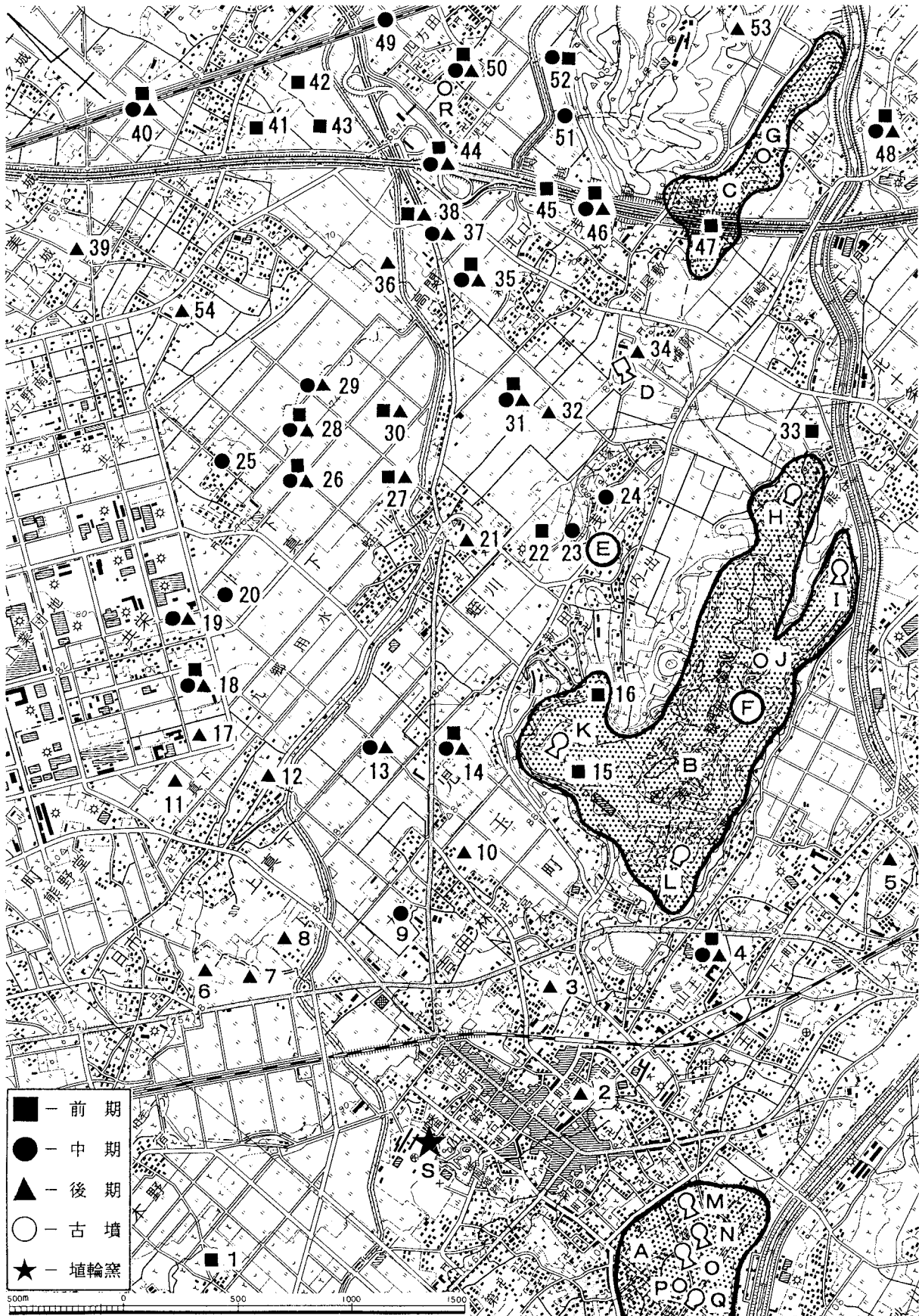
以上の協議を踏まえて、児玉町教育委員会の指導のもと、平成15年10月27日にスゴー運送株式会社代表取締役黒沢文雄と児玉町遺跡調査会会長雉岡茂の間で、埋蔵文化財保存事業の委託契約が締結され、開発予定地内における記録保存のための発掘調査を実施することになった。そして、隣接する塚島遺跡と関係する遺構群であるため、発掘調査地点を塚島遺跡E地点と命名した。

発掘を実施するにあたっては、平成15年10月1日にスゴー運送株式会社代表取締役黒沢文雄より、文化財保護法第57条の2第1項、同第99条第1項及び文化財保護法施行令第5条の規定による「埋蔵文化財発掘の届出について」が児玉町教育委員会に提出されたので、同日付けで埼玉県教育委員会に進達した。これに対して埼玉県教育委員会からは、平成16年3月25日付け教文第3-896号による「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」が、スゴー運送株式会社代表取締役黒沢文雄に対して通知され、土木工事等の着工前における発掘調査の実施が指示された。

発掘調査を実施するにあたっては、平成15年10月30日に児玉町遺跡調査会会長雉岡茂より、文化財保護法第57条第1項、同第99条第1項及び文化財保護法施行令第5条第1項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が児玉町教育委員会に提出されたので、同日付けで埼玉県教育委員会に進達した。これに対して埼玉県教育委員会からは、平成16年3月25日付け教文2-112号による「埋蔵文化財の発掘調査について」が児玉町遺跡調査会会長に対して通知され、発掘調査は文化財保護法の趣旨を尊重し、慎重に実施するように指示された。

なお、塚島遺跡E地点の発掘調査は、平成15年10月30日から同年12月26日の約2ヶ月の期間を要して実施された。

(本庄市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係)



第2図 女堀川中流域の古墳時代遺跡

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

本遺跡は、JR高崎線の本庄駅から南西側に約5km、関越自動車道の本庄児玉インターチェンジから南西側に約2.5km、JR八高線の児玉駅から北に約2kmの本庄市児玉町共栄地内に位置する。本遺跡の周辺は、埼玉県と群馬県の県境をなす神流川によって形成された神流川扇状地の扇中央部東端付近にあたり、標高80mを測る児玉丘陵下の低平で広大な本庄台地の東側縁辺部に立地している。本遺跡の東側には、南側の上武山地内に源を発し北東方向に流路をとる女堀川に沿って低地が帯状に開けており、当地域ではこの女堀川低地を中心にして、各時代にわたって多くの遺跡が所在している。

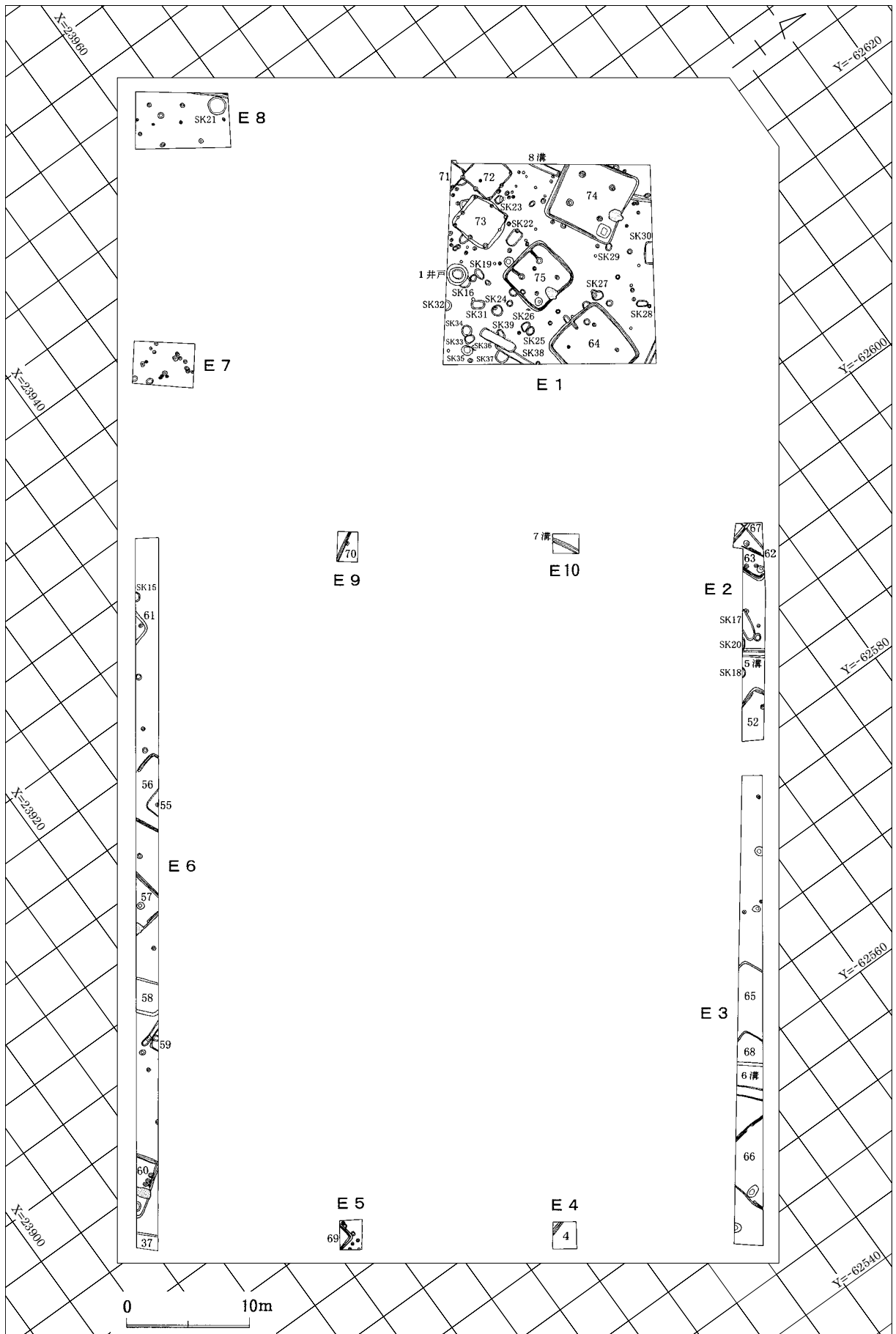
本遺跡周辺の女堀川中流域では、概して弥生時代までの遺跡は少なく、古墳時代前期以降になって遺跡数が急激に増加する特徴が見られる。低地内に集落が積極的に進出しはじめる古墳時代前期の遺跡は、低地内の大規模集落の後張遺跡を中心にして、その周辺に小規模集落が多く展開する様相が窺え、本庄台地東側縁辺部のやや奥に位置する諏訪遺跡や、残丘上の生野山遺跡と塚本山遺跡などでは、方形周溝墓(群)による墓域が形成され、当地域の前期の首長墓である全長60mの前方後方墳の鷲山古墳も、低地内の集落から良く見える小規模な残丘上に築造されている。

中期の遺跡は、前期から継続する集落も多いが、本庄台地や残丘下の低台地上にさらに集落が拡散する傾向が窺える。該期は、前期からの低地開発を基盤にして、さらに開発規模を拡大させていると考えられ、低地内の高縄田遺跡や蛭川坊田遺跡などで、低地内の微高地上を横断するようなやや規模の大きな葉研堀状の直線的な水路が検出されている。そして該期の生産性の向上と地域社会の繁栄や成熟を示すように、生野山残丘上には首長墓級の古墳として全長60mの類似した円墳の金鑽神社古墳と生野山將軍塚古墳が築造されている。

後期の遺跡は、集落がさらに中流域のほぼ全域に拡散し、本庄台地上や丘陵部内の開発が一層進行する。後期の首長墓は、生野山残丘上に全長60m級の生野山銚子塚古墳や生野山16号墳が築造されているが、これらは中期首長墓の円墳に変わって前方後円墳の墳形を採用している。そして、後期を通じて同じ残丘上には数百を数える小円墳が作られ、生野山古墳群や塚本山古墳群などの大規模群集墳が形成される。

7世紀中頃になると、当地域の低地内に立地する集落の大半は廃絶され、女堀川の低地を取り囲むように、西側の本庄台地縁辺部や東側の残丘斜面下の低台地上に集落が移動する現象が見られ、集落の大規模な地域的再編成が行われる。

1. 十二天遺跡 2. 仲町遺跡 3. 女池遺跡 4. 児玉清水遺跡 5. 大久保遺跡 6. 八荒神遺跡 7. 反り町遺跡 8. 金佐奈遺跡 9. 高縄田遺跡 10. 宮田遺跡 11. 辻ノ内遺跡 12. 上真下東遺跡 13. 辻堂遺跡 14. 南街道遺跡 15. 生野山遺跡(墓)
16. 生野山遺跡(集落) 17. 新宮遺跡 18. **塚島遺跡** 19. 古井戸南遺跡 20. 平塚遺跡 21. 共和小学校校庭遺跡 22. 日延遺跡
23. 城の内遺跡 24. 新屋敷遺跡 25. 将監塚東遺跡 26. 堀向遺跡 27. 左口遺跡 28. 藤塚遺跡 29. 前田甲遺跡 30. 柿島遺跡
31. 浅見境北遺跡 32. 浅見境遺跡 33. 宮ヶ谷戸遺跡 34. 鷲山南遺跡 35. 東牧西分遺跡 36. 今井川越田遺跡 37. 梅沢遺跡
38. 川越田遺跡 39. 往来北遺跡 40. 諏訪遺跡 41. 塔頭遺跡 42. 地神遺跡 43. 今井条里遺跡 44. 後張遺跡 45. 飯玉東遺跡
46. 雷電下遺跡 47. 塚本山遺跡 48. 村後遺跡 49. 九反田遺跡 50. 四方田遺跡 51. 根田遺跡 52. 山根遺跡 53. 大久保山遺跡
54. 今井原屋敷遺跡 A. 長沖古墳群 B. 生野山古墳群 C. 塚本山古墳群 D. 鷲山古墳 E. 金鑽神社古墳 F. 生野山將軍塚古墳
- G. W45号墳 H. 熊谷後1号墳 I. 生野山16号墳 J. 生野山9号墳 K. 生野山銚子塚古墳 L. 物見塚古墳
- M. 長沖31号古墳 N. 長沖32号墳 O. 長沖25号墳 P. 長沖14号墳 Q. 長沖8号墳 R. 四方田古墳 S. 八幡山墳輪窯跡

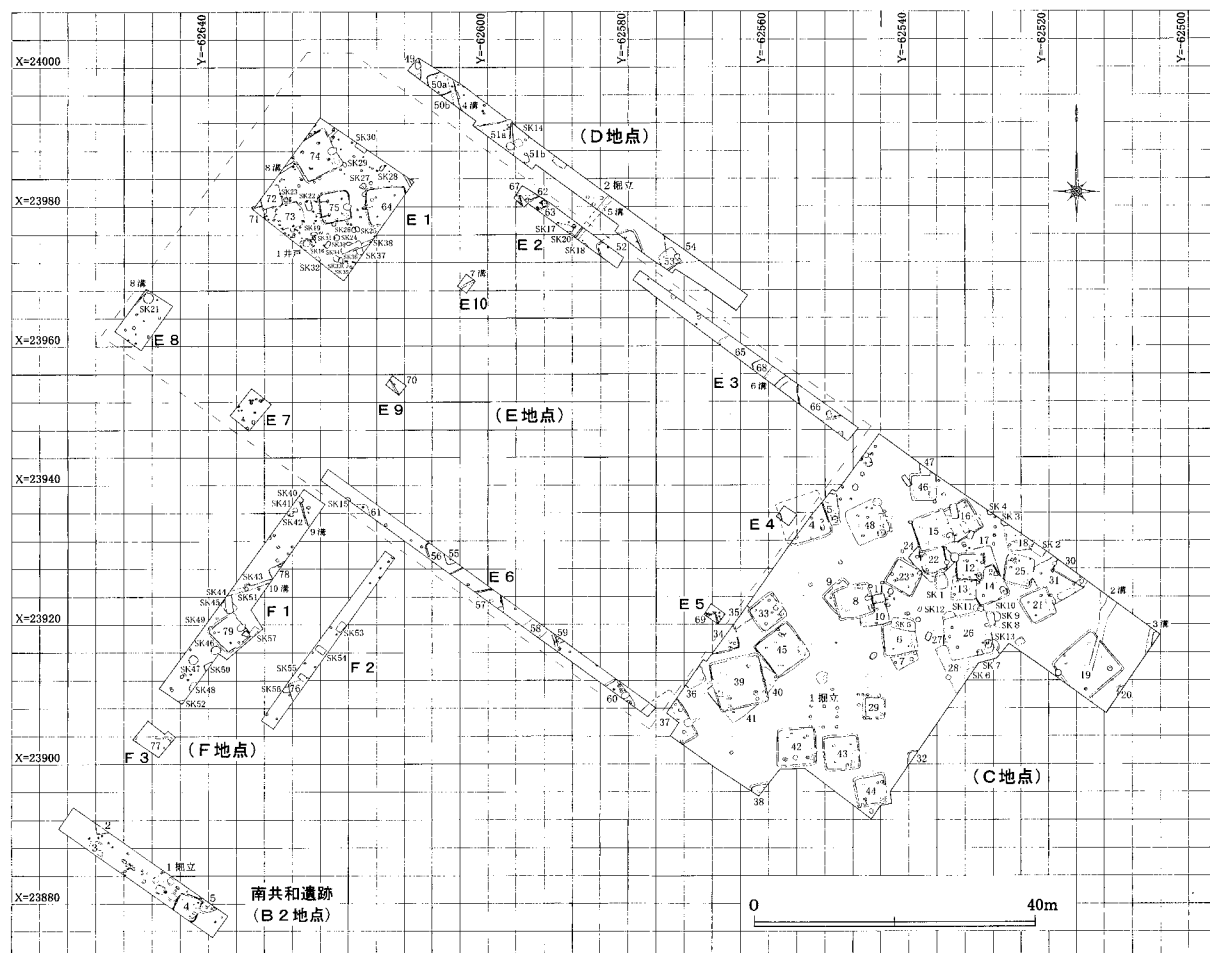


第3図 E地点全体図

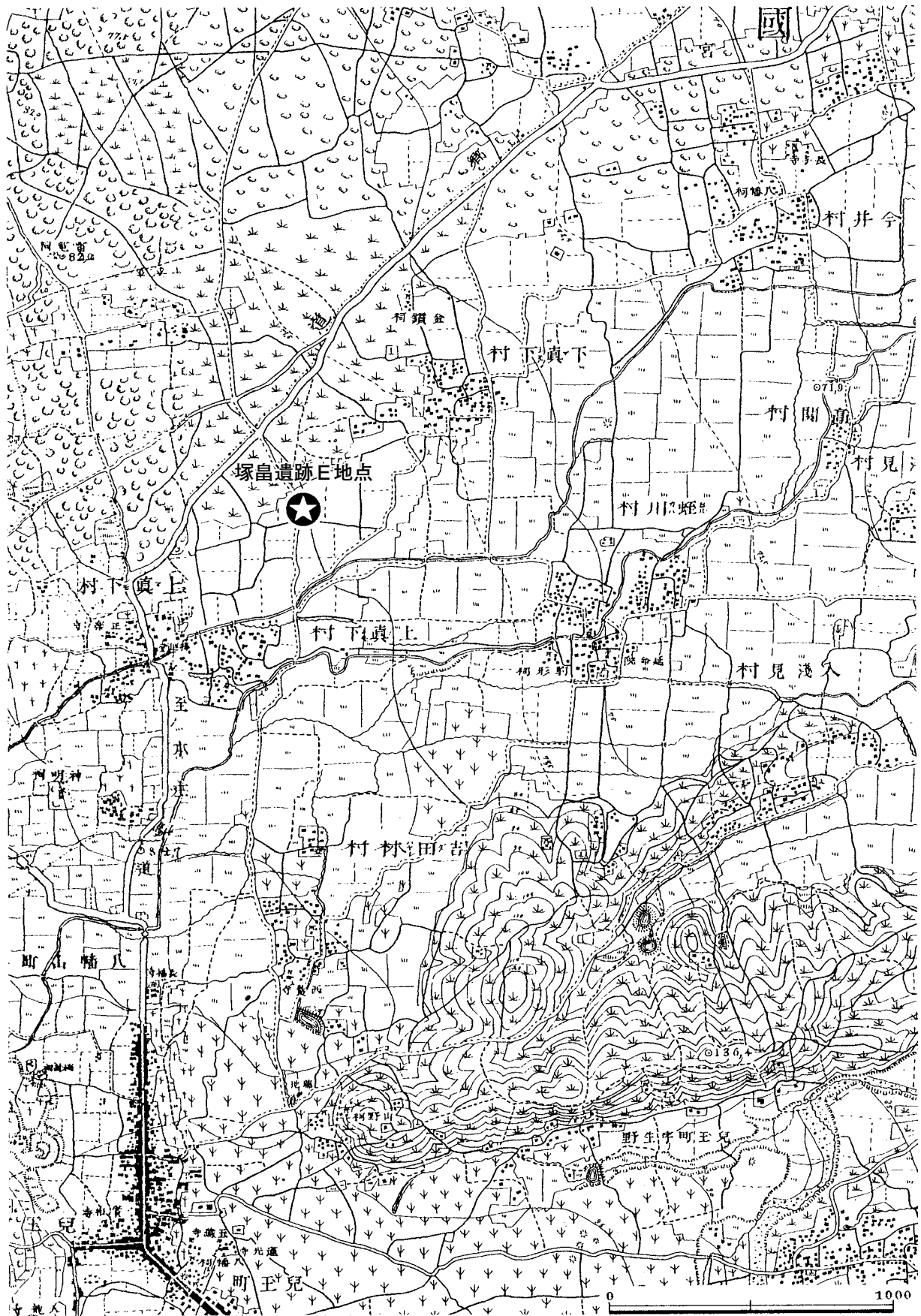
第三章 遺跡の概要

本遺跡は、女堀川中流域左岸の標高80mを測る本庄台地の東側縁辺部に立地する、古墳時代前期～後期を主体とする集落跡と中世の屋敷跡からなる複合遺跡である。すでに昭和62年に県営ほ場整備事業児玉北部地区の小排水路建設に伴ってA地点(鈴木他1991)が、同じく町道改良(外周道路)拡幅舗装工事に伴ってB地点が、平成元年に民間の工場と事務所建設に伴ってC地点が、平成2年に町道改良舗装工事に伴ってD地点が、平成16年に民間の倉庫建設に伴ってF地点(恋河内2008)が調査されており、今回のE地点の調査は、本遺跡の第5次調査にあたる。

E地点の調査で検出された遺構は、竪穴式住居跡21軒・方形竪穴状遺構3基、井戸跡1基・土坑25基・溝跡4条である。竪穴式住居跡は、古墳時代中期2軒と後期19軒である。調査区の関係から住居跡の全容がわかるものは少ないが、大半の住居跡は住居の向きを北東方向に向けている。方形竪穴状遺構と考えられるものは、E1区の西端部から3基密集して検出されている。いずれも壁際に等間隔の小規模な壁柱穴をもつもので、第73号住居跡としたものからは中世の火鉢と古銭が出土している。井戸跡は3基の方形竪穴状遺構の南側に近接して検出されており、おそらく方形竪穴状遺構とともに中世の屋敷を構成していたものと推測される。土坑や溝跡は、遺構に伴う遺物がほとんどないため、時期や性格が推測できるものはない。



第4図 塚島遺跡C～F地点全体図



第5図 遺跡の位置 (2)

—明治18年頃—

第IV章 検出された遺構と遺物

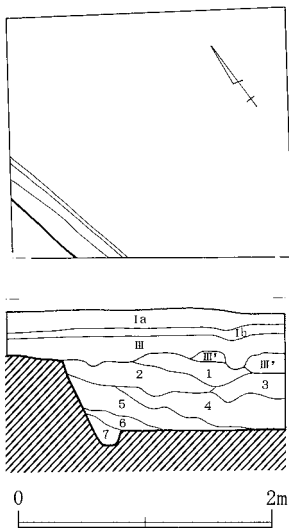
第1節 竪穴式住居跡

第4号住居跡(第6図、図版4)

E4区に位置する。本住居跡は、E地点の南東側に隣接するC地点でも同一の住居跡の一部が検出されており、それによるとE4区で検出された部分は本住居跡の西側壁の一部にあたる。

平面形は、C地点で検出された部分から推測すると、比較的整った方形か長方形を呈するものと思われる。規模は北西から南東方向が7m程度ある。住居の主軸方位は不明であるが、E4区で検出された住居の西側壁は、N-18°-Wの方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で55cmある。壁溝は、上幅22cmの均一な形態で、床面からの深さは最高で9cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、調査区内ではほぼ平坦に作られている。

出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。



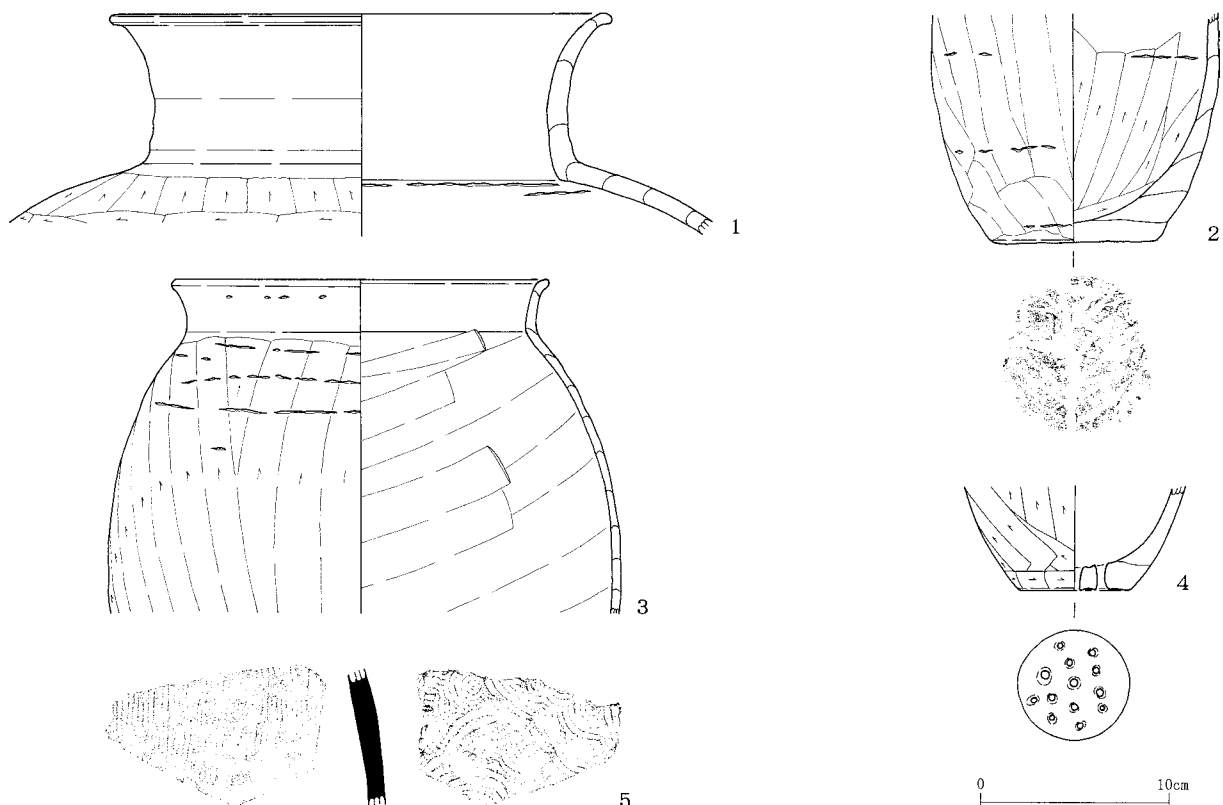
第6図 第4号住居跡

第4号住居跡土層説明

- 第Ia層：明灰褐色土層 (As-Aを多く含む。しまり、粘性を有する。)
- 第Ib層：明灰褐色土層 (第Ia層に類似するが、As-Aの量が更に多い。)
- 第III層：暗褐色土層 (径1～3mm程度の焼土粒子やマンガン粒子・As-Bを含む。しまり粘性非常に強い。)
- 第III'層：暗褐色土層 (第III層に類似するが、As-Bの含有量がやや多い。)
- 第1層：暗褐色土層 (径1mm以下の赤色・黄色・白色微粒子を若干含む。しまり、粘性強い。)
- 第2層：暗褐色土層 (径1～4mm程度の焼土粒子と径1～2mm程度の炭化粒子を含む。しまり、粘性強い。)
- 第3層：暗褐色土層 (第2層に類似するが、焼土・炭化粒子の含有量がやや少ない。)
- 第4層：褐色土層 (径1～30mm程度のローム粒子及びロームブロックを非常に多く含む。しまり、粘性強い。)
- 第5層：暗褐色土層 (径1～2mmの焼土粒子を多く含む。しまり、粘性強い。)
- 第6層：暗褐色土層 (径1mm以下の焼土微粒子をやや多く含む。しまり、粘性強い。)
- 第7層：暗褐色土層 (径1mm程度のローム微粒子を含む。しまり、粘性強い。)

第4号住居跡出土遺物観察表

1	壺	A. 口縁部径(26.8)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 外-暗橙褐色、内-暗茶褐色。F. 口縁部1/4破片。G. 外面は二次焼成を受けて荒れている。H. 覆土中。
2	甕	A. 底部径8.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ナデ、内面ナデの後ケズリ。底部外面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 1/2。G. 底部外面に木葉痕。H. 覆土中。
3	甕	A. 口縁部径20.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-淡茶褐色、内-淡褐色。F. 1/4。H. 覆土中。
4	小形甌	A. 底部径5.9。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 底部のみ。G. 多孔甌。底部外面に黒斑点あり。H. 覆土中。
5	須恵器甕	B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面平行叩き目、内面当道具痕(青海波文)。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外-淡灰色。F. 胴部破片。H. 覆土中。



第7図 第4号住居跡出土遺物

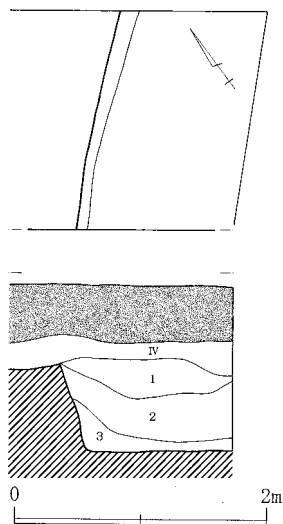
第37号住居跡（第8図、図版4）

E 6 区の南東端に位置し、北西側には第60号住居跡が近接している。住居跡は、E 地点の南東側に隣接するC 地点でも同一の住居跡が検出されており、それによると E 6 区で検出された部分は、本住居跡の北西側壁の一部にあたる。

平面形は、C 地点で検出された部分から推測すると、比較的整った方形か長方形を呈するものと思われる、規模は北西から南東方向が

8 m 程度ある。住居の主軸方位は不明であるが、E 6 区で検出された住居の北西側壁は、N—44°—W の方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは70cm である。調査区内で検出された部分では、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、調査区内ではほぼ平坦に作られている。

出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。



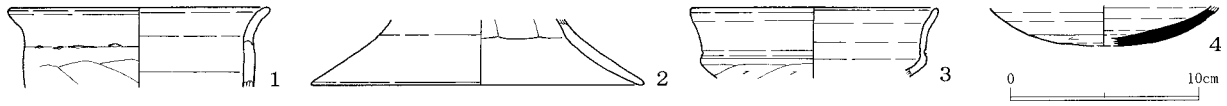
第8図 第37号住居跡

第37号住居跡土層説明

第1層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、ローム小ブロックをまばらに、礫片を含む。しまり・粘性とも強い。）

第2層：黒灰褐色土層（径1cmのロームブロックを均一に、径5mmのローム小ブロックを非常に多く、径5mm焼ブロック、灰褐色小ブロックを少量含む。しまり弱く、粘性強い。）

第3層：黒褐色土層（径2mmのローム小ブロックを均一に、径5mmのロームブロック、径3mmの炭化物小ブロックをやや多く含む。しまり・粘性ともに強い。）



第9図 第37号住居跡出土遺物

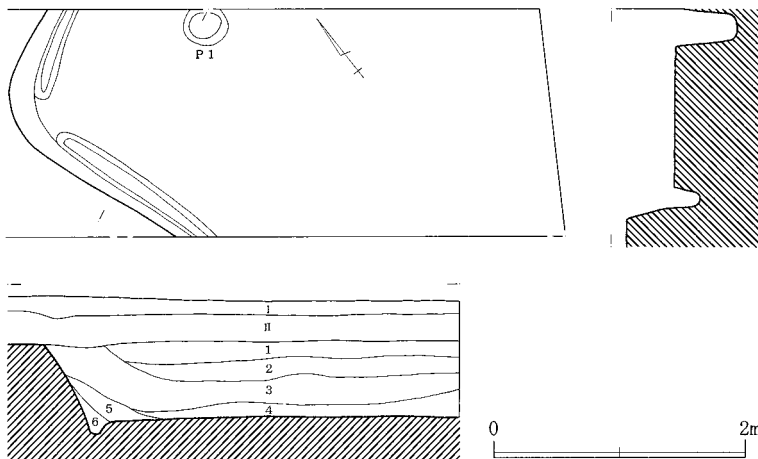
第37号住居跡出土遺物観察表

1	小形甕	A. 口縁部径 (13.8)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-暗橙褐色、内-暗茶褐色。F. 口縁部 1/6 破片。G. 外面は二次焼成を受けて荒れている。H. 覆土中。
2	高 坏	A. 脚端部径 (17.6)。B. 粘土紐積み上げ。C. 脚端部内外面ヨコナデ。脚柱部外面ナデ、内面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-明橙褐色。F. 脚端部 1/5 破片。H. 覆土中。
3	坏	A. 口縁部径 (13.1)、残存高 3.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗橙褐色。F. 口縁部 1/6 破片。H. 覆土中。
4	須 恵 器 坏	B. ロクロ成形。C. 体部外面回転ナデの後下半回転筒ケズリ、内面回転ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外-暗灰色。F. 体部 1/4 破片。H. 覆土中。

第52号住居跡（第10図、図版4）

E 2 区の南東端に位置する。本住居跡は、E 地点の北東側に隣接する D 地点でも同一の住居跡の一部が検出されており、それによると E 2 区で検出された部分は本住居跡の西側壁の一部にあたる。

平面形は、D 地点で検出された部分から推測すると、比較的整った方形か長方形を呈するものと思われる。規模は北西から南東方向が 6 m 程度ある。住居の主軸方位は不明であるが、E 2 区で検出された住居の北西側壁は、N-104°-W の方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは 60cm ある。壁溝は、調査区内で検出された各壁の壁下に見られ、上幅 16cm 前後の均一な形態で、床面からの深さは最高で 21cm ある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、調査区内ではほぼ平坦に作られている。ピットは、P 1 の 1 箇所だけ検出されている。P 1 は、住居の西側コーナー部に寄った位置にある。36cm×30cm の楕円形ぎみの形態で、床



第10図 第52号住居跡

第52号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（As-Aを微量、ローム粒子をまばら、径1cmの焼土ブロックを少量、焼土粒子をごく少量含む。しまり、粘性とも弱い。）
- 第2層：暗灰褐色土層（ローム粒子を均一、径1cmの褐色ブロックをまばらに、径3mmのローム小ブロックを多く、小石を少量、炭化粒子をごく微量含む。しまりはやや弱く、粘性はやや強い。）
- 第3層：明灰褐色土層（径3mmのローム小ブロックを均一、径1cmのロームブロックをまばらに、径1.5cmのロームブロックを少量、径5mmの灰褐色ブロックをやや多く含む。しまりは

弱い、粘性は強い。）

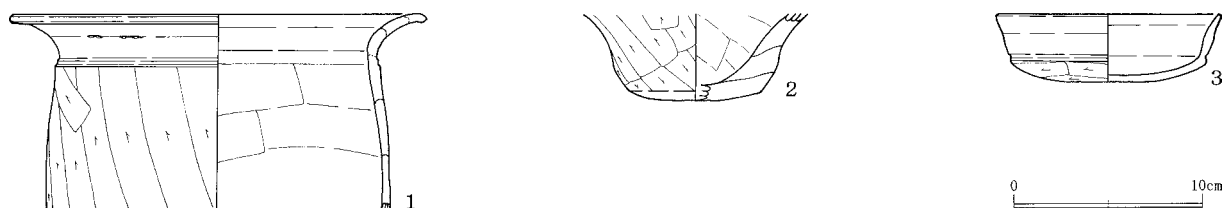
第4層：褐色土層（径3mmのローム小ブロックを均一、焼土粒子と炭化粒子を少量含む。しまりは弱い、粘性を有する。）

第5層：灰褐色土層（ローム粒子をまばら、径1.5cmのロームブロックをごく少量、炭化粒子を微量含む。しまりは弱い、粘性を有する。）

第6層：褐色土層（ローム粒子を均一、径1cmのロームブロックをまばらに含む。しまり、粘性とも強い。）

面からの深さは50cmある。

出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。



第11図 第52号住居跡出土遺物

第52号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径 (22.0)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外一茶褐色。F. 1/5 破片。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
2	小形甕	A. 底部径 (7.0)。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 外一茶褐色、内一暗褐色。F. 底部 1/2 破片。H. 覆土中。
3	坏	A. 口縁部径 (11.8)、器高 3.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明橙褐色。F. 1/3 破片。H. 覆土中。

第55号住居跡 (第13図、図版 4)

E 6 区の中央付近に位置し、重複する第56号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは住居跡のごく一部であるため、本住居跡の全容は不明である。

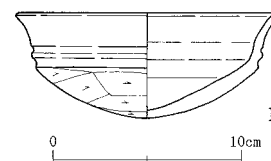
平面形は不明であるが、規模は南西～北東方向が1.14mまで、南東から北西方向が1.48mまで測れる。住居の南東側壁は、N-75° - E の方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で58cmある。調査区内で検出された各壁下には壁溝の痕跡は見られなかった。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、調査区内ではほぼ平坦に作られている。ピットは、P 1 の 1 箇所だけ検出されている。P 1 は、26cm×20cmの楕円形ぎみの形態で、床面からの深さは25cmある。

出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。

第56号住居跡 (第13図、図版 4)

E 6 区の中央付近に位置し、重複する第55号住居跡に切られている。調査区内で検出されたのは住居跡のごく一部であるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ方形か長方形を呈すると思われる。規模は、北西～南東方向が5.20mまで、南西～北東方向が4mまで測れる。住居の主軸方位は不明であるが、南東側壁はN-80° - E を向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは50cmある。壁溝は、調査区内で検出された各壁の壁下に見られる。上幅18cm前後の均一な形態で、床面からの深さは6cm程度である。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色



第12図 第56号住居跡
出土遺物

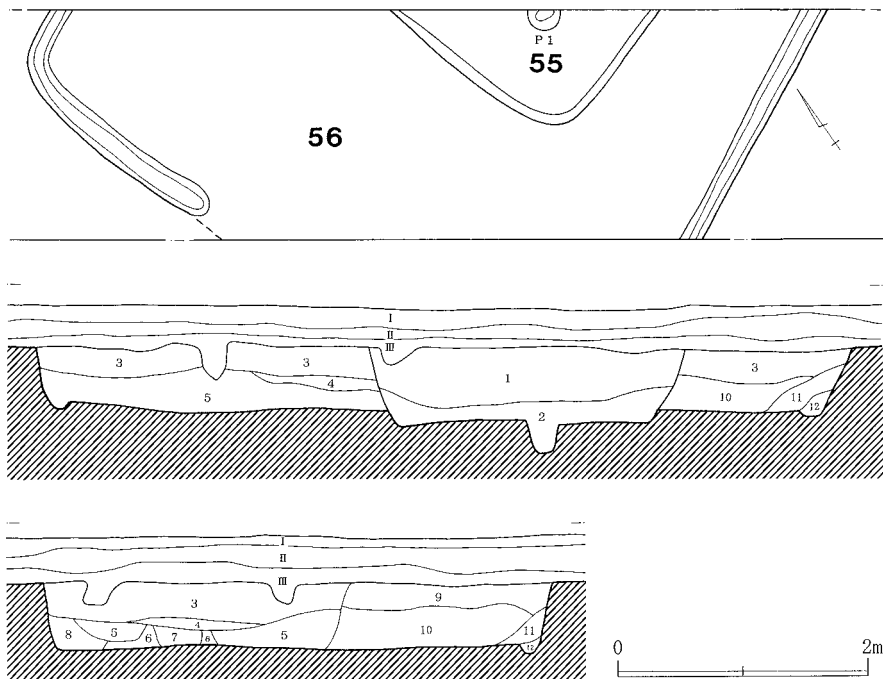
土を埋め戻した貼床式で、調査区内では比較的平坦に作られている。

カマドは、調査区内では確認されていないが、住居南西側の土層断面で焼土ブロックを多量に含む層(第6層)が見られることから、あるいは住居の南西側壁に付設してあった可能性もある。

出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。

第56号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A. 口縁部径(13.8)、器高5.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-暗茶褐色、内-淡茶褐色。F. 1/4破片。H. 覆土中。
---	---	--



第13図 第55・56号住居跡

第55・56号住居跡土層説明

〈第55号住居跡〉

第1層：暗褐色土層（白色粒子を非常に多く、ローム粒子を均一、径3mmのローム小ブロックをまばらに、径5mmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量、小石、礫片を含む。しまり、粘性ともやや弱い。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一、径3mmのローム小ブロック、径5mmのロームブロックを少量含む。しまり、粘性ともやや弱い。）

〈第56号住居跡〉

第3層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第4層：明黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第5層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を少量含む、ローム風化土を若干混入する。しまり、粘性ともに有する。）

第6層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量に、炭化粒子を少量含む。しまり強く、粘性を有する。右側はつぶれて流れたような感がある。）

第7層：明黒褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を微量含む、少々灰分が混入したような感がある。しまり、粘性ともに有する。）

第8層：明黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第9層：暗茶褐色土層（ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第10層：暗茶褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロック・炭化粒子を微量含む、ローム風化土を斑点状に混入する。しまり、粘性ともに有する。）

第11層：明黒褐色土層（ローム粒子を少量、炭化粒子を極微量含む。しまり強く、粘性を有する。）

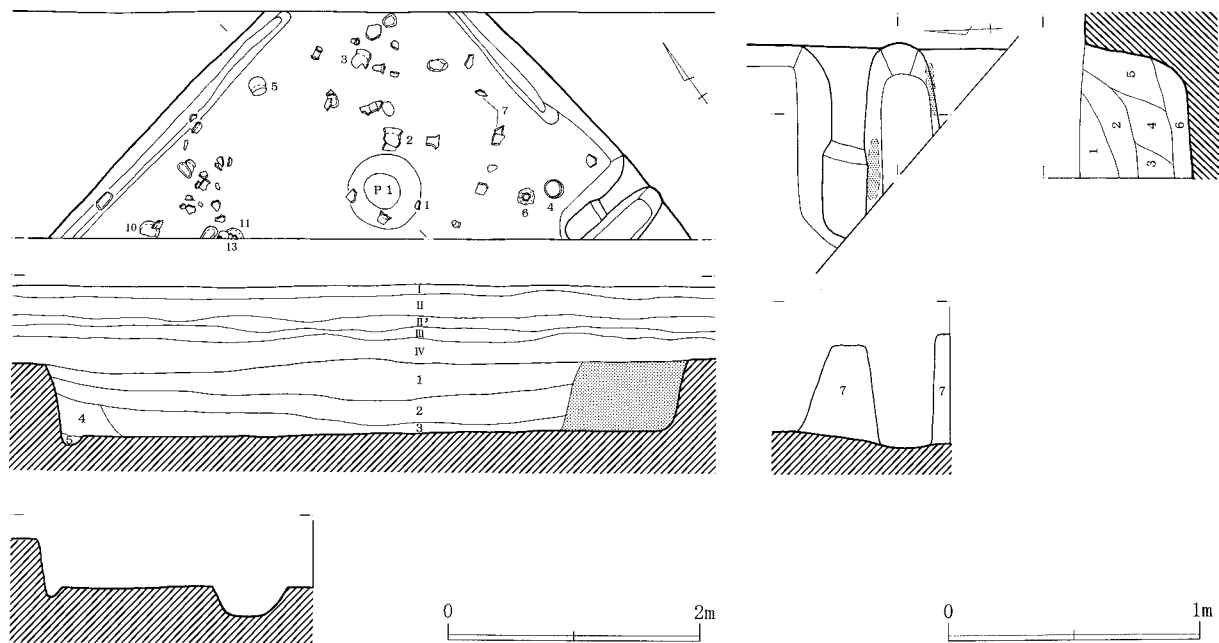
第12層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。しまり強く、粘性を有する。）

第57号住居跡（第14図、図版4）

E 6 区の中央付近に位置し、北西側には第55・56号住居跡が、南東側には第58号住居跡がある。調査区内で検出されたのは住居跡の一部であるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、比較的整った方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、南北方向が3.65mまで、東西方向が3.70mまで測れる。住居の主軸方位は、N—85°—Eをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で56cmある。壁溝は、調査区内で検出された各壁の壁下に見られる。上幅14cm程度の比較的整った形態で、床面からの深さは8cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、調査区内ではほぼ平坦に作られている。ピットは、P 1 の1箇所だけ検出されている。P 1 は、直径60cmの円形を呈し、床面からの深さは24cmある。位置的には、4本支柱を構成する支柱穴の一部の可能性もある。

カマドは、住居の東側壁に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、残存長が80cm、幅は78cmまで測れる。燃烧部は、住居の壁をほとんど掘り込まず、ほぼ住居内に位置している。燃烧



第14図 第57号住居跡

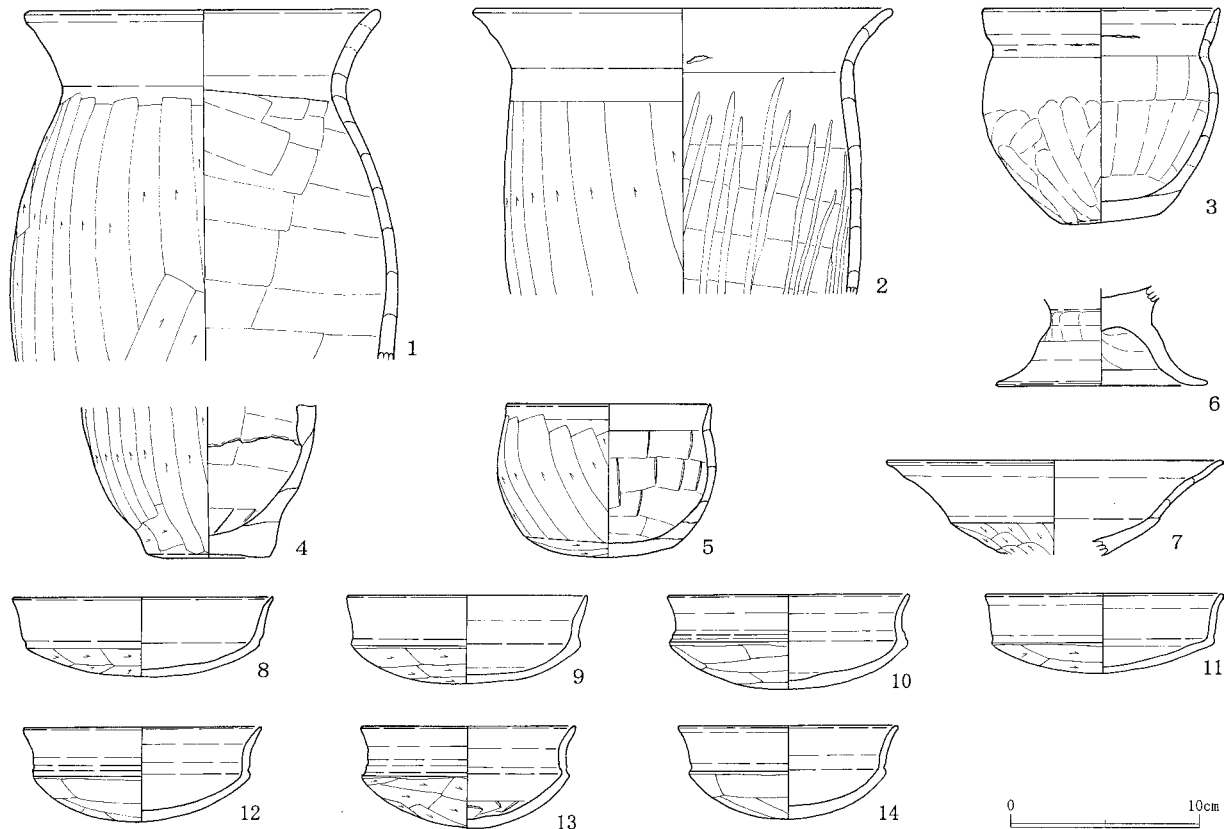
第57号住居跡土層説明

- 第1層：暗茶褐色土層（白色粒子を均一、焼土粒子・径3～5mmの焼土小ブロックをまばらに、ローム粒子・小石を少量含む。しまり、粘性ともに強い。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一、径3mmのローム小ブロックを極少量、径3mmの焼土小ブロックをまばらに、土器片・小石を少量含む。しまり、粘性ともに強い。）
- 第3層：黒褐色土層（ローム粒子・径3mmのロームブロックを均一、焼土粒子・径3mmの焼土小ブロックをまばらに含む。しまりはやや弱い、粘性は強い。）
- 第4層：黒褐色土層（ローム粒子を均一、白色粒子をまばらに、径3mmの焼土粒子小ブロックを微量含む。しまりやや弱く、粘性やや強い。）
- 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を均一、小石・白色粒子を少量含む。しまりやや弱く、粘性は強い。）

第57号住居跡カマド土層説明なし。

面(火床)は、おそらく住居の床面と同じ高さぐらいの第8層上面あたりと思われる。燃焼部内からは、支脚の痕跡は見られなかった。袖は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色粘土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されており、その痕跡は見られない。

出土遺物は、住居の覆土中を主体に比較的多くの土器片が出土している。



第15図 第57号住居跡出土遺物

第57号住居跡出土遺物観察表

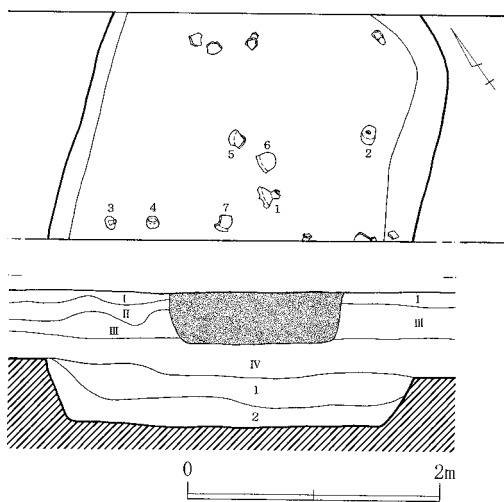
1	甕	A. 口縁部径 (18.8)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 外-茶褐色、内-暗褐色。F. 1/3 破片。H. 床面直上。
2	大形甕	A. 口縁部径 (22.5)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデの後雑なミガキ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-明茶褐色。F. 口縁部 1/4 破片。H. 床面直上。
3	小形甕	A. 口縁部径 (12.6)、器高 11.5、底部径 (5.3)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半指ナデ、内面篋ナデ。D. 白色粒。E. 内外-黒褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
4	小形甕	A. 底部径 6.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 外-明茶褐色、内-淡褐色。F. 底部のみ。G. 底部外面に黒斑あり。H. 床面直上。
5	小形鉢	A. 口縁部径 11.0、器高 8.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-淡茶褐色、内-淡褐色。F. ほぼ完形。G. 外面に黒斑あり。H. 覆土中。
6	高坏	A. 脚端部径 (11.2)。B. 粘土紐積み上げ。C. 脚部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 脚部のみ。H. 床面直上。
7	高坏	A. 口縁部径 (17.8)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 坏部 1/3。H. 覆土中。
8	坏	A. 口縁部径 13.8、器高 4.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-明橙褐色。F. 3/4。H. 覆土中。
9	坏	A. 口縁部径 12.7、器高 4.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-明茶褐色。F. 3/4。H. 覆土中。

10	坏	A. 口縁部径 12.8、器高 5.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明橙褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
11	坏	A. 口縁部径 12.6、器高 4.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一橙褐色。F. 2/3。H. 床面直上。
12	坏	A. 口縁部径 11.7、器高 5.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡茶褐色、内一淡褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
13	坏	A. 口縁部径 11.4、器高 5.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面篔ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 3/4。H. 床面付近。
14	坏	A. 口縁部径 12.5、器高 5.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明橙褐色。F. 2/3。H. 覆土中。

第58号住居跡（第16図、図版4）

E 6 区の中央やや南東側寄りに位置し、北西側には第57号住居跡があり、南東側には第59号住居跡が近接している。調査区内で検出されたのは、住居の北東側の一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

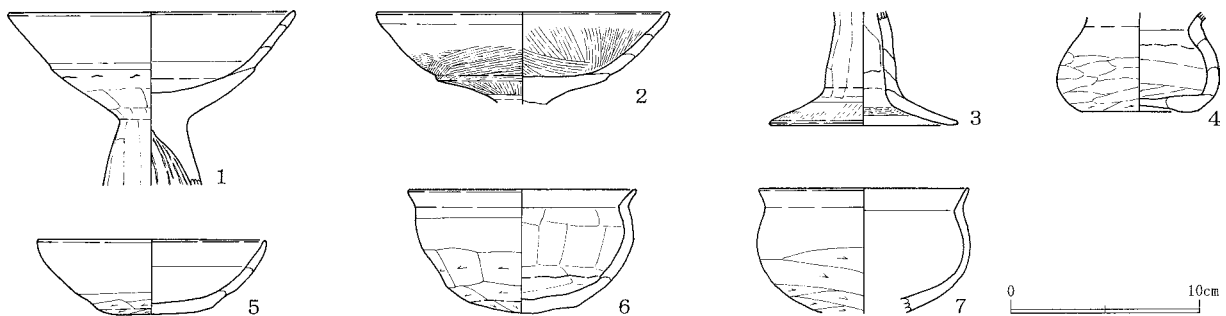
平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い長方形ぎみの形態を呈すると思われる。規模は、北西～南東方向が2.86m、北東～南西方向は1.82mまで測れる。住居の主軸方位は不明であるが、北西側壁はN-46°-Eの方向を向いている。壁は、緩やかに立ち上が



第58号住居跡土層説明

- 第1層：灰褐色土層（ローム粒子を斑状に多く、炭化粒子を微量、小石・礫片・焼土小ブロック・径5mmのロームブロックを少量、白色粒子を均一に含む。しまりやや強く、粘性は強い。）
- 第2層：茶褐色土層（ローム粒子を均一、炭化粒子・径2mmのローム小ブロックを少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。）

第16図 第58号住居跡



第17図 第58号住居跡出土遺物

り、確認面からの深さは最高で50cmある。床面は、ほぼ平坦に作られており、全体的にやや軟弱である。調査区内で検出された部分からは、住居内施設は何も検出されなかった。

出土遺物は、覆土の上層付近を主体に、古墳時代中期後半頃の土器片が比較的多く出土している。

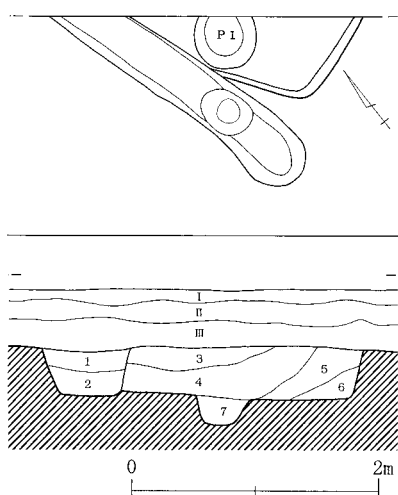
第58号住居跡出土遺物観察表

1	高 坏	A. 口縁部径 (15.0)。残存高 9.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。坏部内外面ナデ。脚部外面ナデ、内面絞り目。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
2	高 坏	A. 口縁部径 (15.5)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデの後下半ハケ、内面ヨコナデの後木口状工具によるナデ。坏部内外面木口状工具によるナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 坏部 1/3 破片。H. 覆土中。
3	高 坏	A. 脚端部径 10.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 脚部内外面ナデ。脚端部内外面気口状工具によるナデの後ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 脚部のみ。H. 覆土中。
4	小形丸底壺	A. 残存高 6.3、底部径 5.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 胴部のみ。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
5	坏	A. 口縁部径 (12.0)、器高 3.9、底部径 6.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部～体部内外面ヨコナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
6	坏	A. 口縁部径 (12.0)、器高 6.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡茶褐色、内一茶褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
7	坏	A. 口縁部径 (11.1)、残存高 6.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/4。G. 外面に黒斑あり。H. 覆土中。

第59号住居跡 (第18図、図版5)

E 6 区の中央やや南東側寄りに位置し、北西側には第58号住居跡が近接している。調査区内で検出されたのは、住居の南側コーナー部付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

規模は、北西～南東方向が1.26mまで、南西～北東方向が78cmまで測れる。住居の主軸方位は不明



第18図 第59号住居跡

第59号住居跡土層説明

- 第1層：暗黒灰褐色土層（白色粒子を多く、ローム粒子を均一に含む。径1cmのロームブロック及び、径3mmのローム小ブロックを少量、褐色粒子をやや多く、焼土粒子を少量含む。しまり、粘性ともやや強い。）
- 第2層：黒灰褐色土層（白色粒子を非常に多く、径3mmのローム小ブロック、径5mmのロームブロックを微量、炭化粒子を均一、ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック・径3mmの炭化物小ブロックを少量含む。しまり、粘性ともにやや強い。）
- 第3層：暗褐色土層（白色粒子を非常に多く、ローム粒子を均一に含む。径3mmのローム小ブロックを少量、焼土粒子を斑状に、径3mmの焼土小ブロック、礫を少量含む。しまり、粘性ともに弱い。）
- 第4層：暗褐色土層（ローム粒子を非常に多く、白色粒子を均一に含む。3mmのローム小ブロックをやや多く、径5mmのロームブロック・径5mmの小石を少量、焼土粒子と炭化物粒子をごく微量含む。しまりはやや弱い、粘性は強い。）
- 第5層：明灰褐色土層（ローム粒子を非常に多く、白色粒子を均一、径3mmのローム小ブロックを少量、焼土粒子を微量含む。しまりはやや弱い、粘性は強い。）

第6層：明褐色土層（径5mmのローム小ブロックを均一、炭化粒子及び焼土粒子を微量含む。しまり、粘性ともに強い。）

第7層：褐色土層（ローム粒子を均一、白色粒子を多量、径1cmのロームブロックをやや多く、径3mmのローム小ブロック・焼土粒子を微量含む。しまりは弱い、粘性は強い。）

であるが、住居の南東側壁はN-70°-Eの方向を向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で40cmある。調査区内で検出された各壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、壁際のためかやや軟弱である。ピットは、1箇所検出されている。P1は、直径52cmの円形ぎみの形態で、床面からの深さは24cmある。

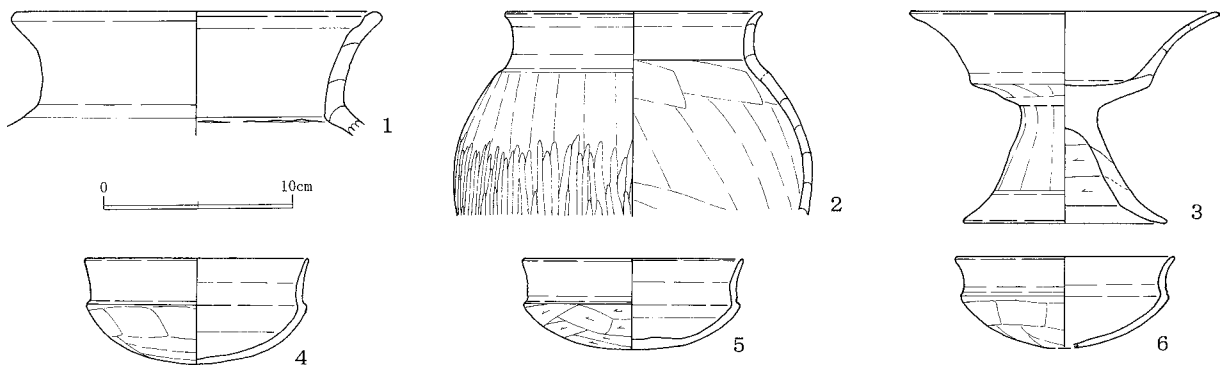
出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。

第60号住居跡（第20図、図版5）

E6区の南東端付近に位置し、南東側には第37号住居跡が近接している。調査区内で検出されたのは、住居の北東側だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、北西から南東方向が4.72m、北東～南西方向は1.88mまで測れる。住居の主軸方位は、N-59°-Eをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で72cmある。壁溝は、住居の北西側壁と北東側壁の壁下に見られる。上幅が20cm強の比較的均一な形態で、床面からの深さは10cm前後ある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、調査区内ではほぼ平坦に作られている。ピットは、住居跡内から5箇所検出されているが、本住居跡に伴うと考えられるものは、P1とP2の2箇所だけである。P1は、住居の北西側に位置する。直径35cmの円形を呈し、床面からの深さは28cmある。その位置からすると、4本支柱を構成する支柱穴の可能性が高い。P2は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居東側コーナー部に位置する。南西側半分は調査区外に位置するためその全容は不明であるが、幅81cmの楕円形か隅丸長方形ぎみの形態を呈するものと思われる。断面は2段に深くなっており、床面からの深さは34cmある。中からは広口壺の口縁部が外から落ち込んだような状態で出土している。

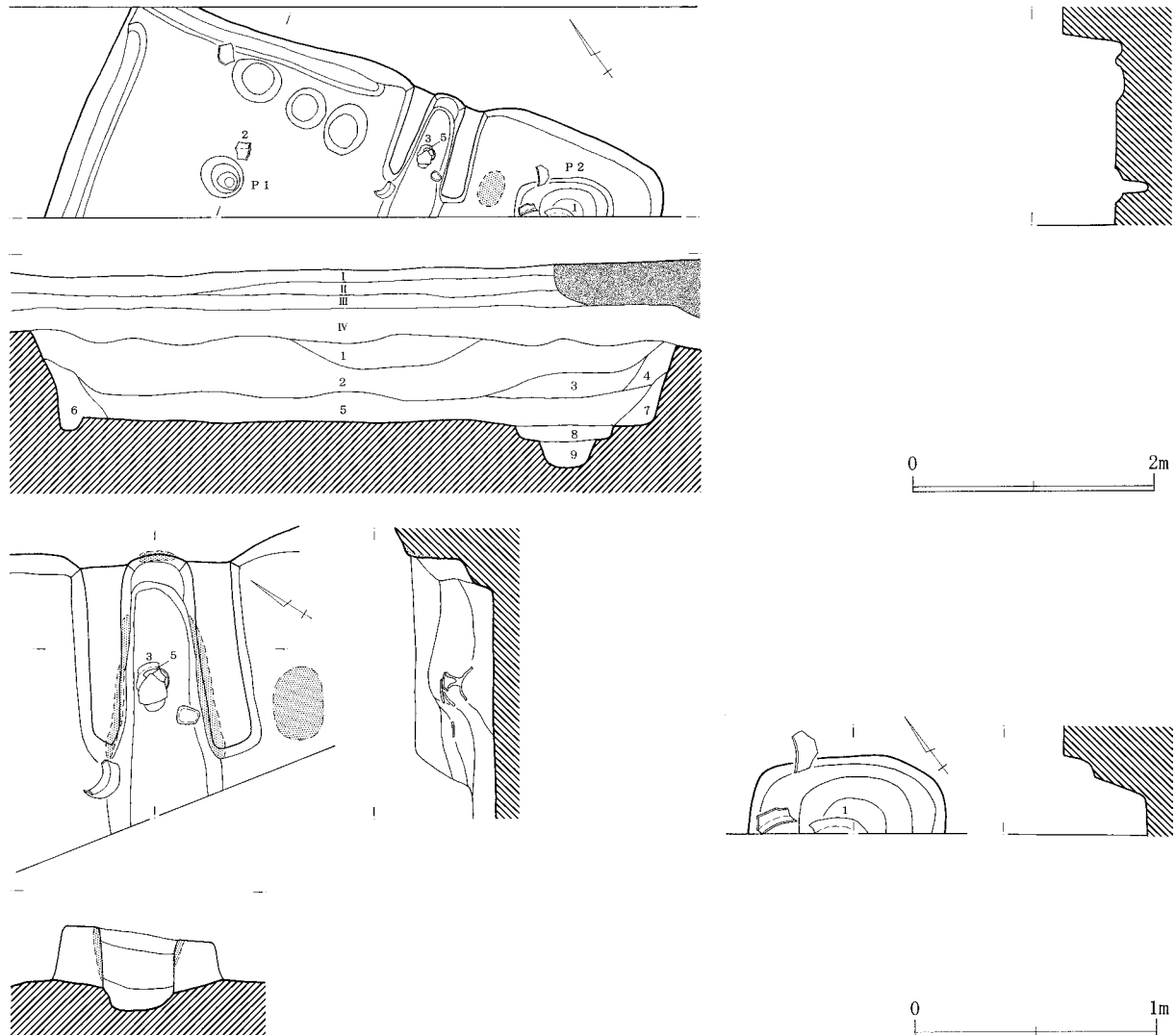
カマドは、住居の北東側壁の中央やや南東側寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、長さが110cmまで、最大幅は80cmを測る。燃烧部は、住居の壁をほとんど掘り込まず、ほぼ住居内に位置し、内面は比較的良く焼けている。燃烧面(火床)は、住居の床面と同じ高さぐらいで、中央付近からは高坏を伏せて代用した転用支脚が出土している。袖は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色粘土を、住居の壁に直接貼り付けて構築しており、左側袖の先端には甕を伏せて補強にして



第19図 第60号住居跡出土遺物

いる。煙道部は、すでに削平されており、その痕跡は見られない。

出土遺物は、カマドやP 2の貯蔵穴内及び覆土中から、古墳時代後期の土器が少量出土しただけである。



第20図 第60号住居跡

第60号住居跡土層説明

- 第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロックを少量、焼土粒子を極微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
 - 第2層：茶褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量、炭化粒子を微量含む、ローム風化土をブロック状に少量混入する。しまり、粘性ともに有する。）
 - 第3層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロックをやや多量に含む、ローム風化土を若干混入する。しまり、粘性ともに有する。）
 - 第4層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
 - 第5層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロックを少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。しまり強く、粘性を有する。）
 - 第6層：明黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
 - 第7層：明黒褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子を微量含む。しまり強く、粘性を有する。）
 - 第8層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量、焼土粒子を極微量含む。しまり、粘性ともに強い。）
 - 第9層：明黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子・小礫を微量含む。しまりを有し、粘性は強い。）
- 第60号住居跡カマド土層説明なし。

第60号住居跡出土遺物観察表

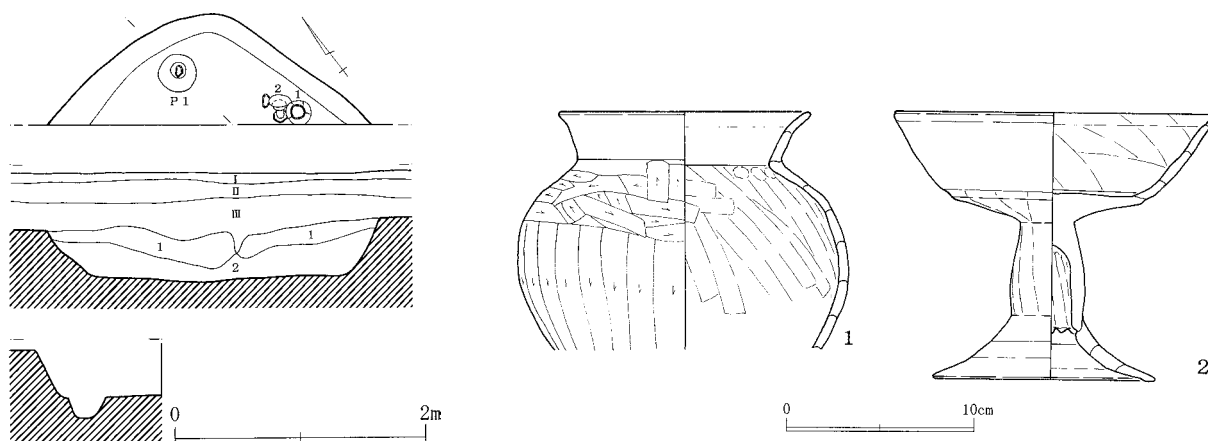
1	壺	A. 口縁部径 19.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—明茶褐色。F. 口縁部 3/4。H. P2(貯蔵穴)内。
2	甕	A. 口縁部径 (13.6)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ミガキ様のナデ付け、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—暗茶褐色。F. 1/4。H. 覆土中。
3	高 坏	A. 口縁部径 16.4、器高 11.2、脚端部径 10.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。坏部～脚部外面ケズリの後ナデ、脚部内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—明茶褐色。F. ほぼ完形。G. 坏部内外面に黒斑あり。H. カマド内支脚。
4	坏	A. 口縁部径 (11.8)、器高 5.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡橙褐色。F. 1/3。H. カマド内。
5	坏	A. 口縁部径 11.7、器高 4.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡茶褐色。F. 4/5。H. カマド内。
6	坏	A. 口縁部径 (11.6)、器高 4.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—橙褐色。F. 1/4。H. 覆土中。

第61号住居跡（第21図、図版5）

E 6 区の北西側に位置し、北西側には第15号土坑が近接している。調査区内で検出されたのは、住居の北東側コーナー部付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

規模は、東西方向は1.40mまで、南北方向は1.38mまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で36cmある。壁溝は、調査区内で検出された各壁の壁下には見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、調査区内ではほぼ平坦に作られている。ピットは、1箇所検出されている。P 1 は、北東側コーナー部に位置する。直径30cmの円形を呈し、床面からの深さは16cmある。

出土遺物は、住居東側壁の壁際から、古墳時代中期頃の胴下半を欠いた甕と完形の高坏が、床面上に並んだ状態で出土している。



第21図 第61号住居跡及び出土遺物

第61号住居跡土層説明

第1層：黒灰褐色土層（白色粒子をやや多く、褐色粒子を均一、ローム粒子・径5mmのローム小ブロックをまばらに、小石・焼土粒子を少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。）

第2層：黒褐色土層（白色粒子を均一、小石・径5mmのロームブロックをまばらに、焼土粒子を多く含む。しまりはやや弱く、粘性は弱い。）

第61号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径 13.5、残存高 12.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデの後ケズリ、内面ナデの後篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 上半のみ。G. 外面に黒斑あり。H. 床面直上。
2	高 坏	A. 口縁部径 17.0、器高 14.2、脚端部径 11.9。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。坏部～脚部外面ケズリの後ナデ、脚部内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. ほぼ完形。H. 床面直上。

第62号住居跡（第22図、図版5）

E 2 区の北西端に位置し、重複する第62号住居跡と第63号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは、住居の南側の一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

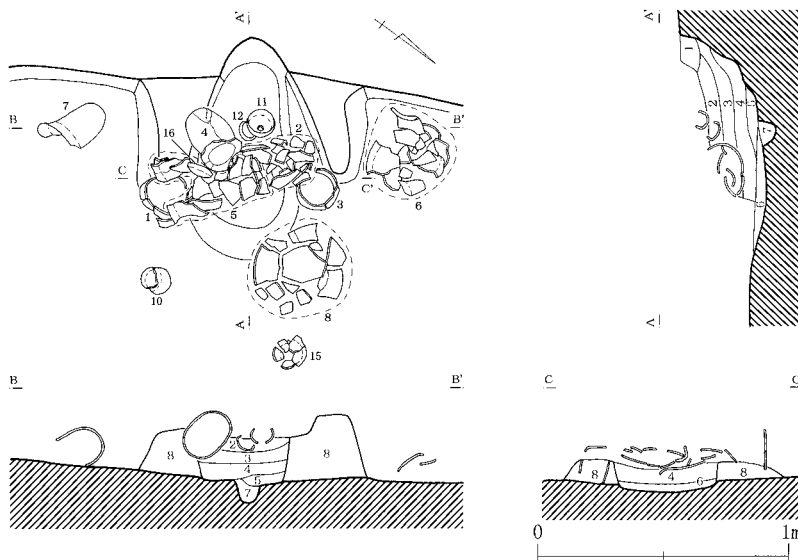
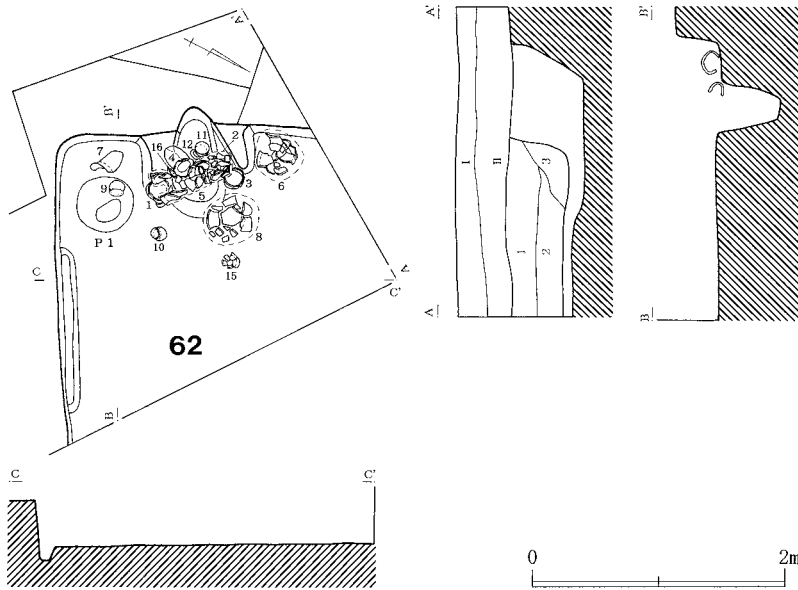
平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、南西～北東方向は2.40mまで、北西～南東方向は2.70mまで測れる。住居の主軸方位は、N-160°-Wをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で36cmある。壁溝は、南東側壁の一部に見られる。上幅13cm程度の比較的均一な形態で、床面からの深さは11cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、調査区内では比較的平坦に作られている。ピットは、住居跡内から1箇所検出されている。P 1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド左側の住居南側コーナー部に位置する。直径45cm程度の円形を呈し、床面からの深さは50cmある。

カマドは、住居の南西側壁の南側コーナー部寄りに位置し、壁にたいしてほぼ直角に付設されている。規模は、残存長89cm、最大幅93cmを測る。燃焼部は、住居の壁を若干掘り込んでいるが、大部分は住居内に位置する。燃焼面(火床)は、住居の床面とほぼ同じ高さで、中央には支脚の据え穴と考えられる小ピットが見られる。袖は、淡灰色粘土を住居の壁に直接貼り付けて構築している。両袖の先端は甕を伏せて補強にしており、その上には甕を入れ子状に連結させて焚口部上面の補強にしていたようである。煙道部は、すでに削平されており、その痕跡は見られない。

出土遺物は、カマド内やその周辺の床面上から、古墳時代後期の土器が比較的多く出土している。

第62号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径 19.2、器高 34.0、底部径 6.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面下半ナデ・上半篋ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、小石。E. 内外一淡茶褐色。F. 4/5。G. カマド左側袖先端の補強に再利用。H. カマド内。
2	甕	A. 口縁部径 17.7、器高 32.9、底部径 5.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面下半ナデ・上半篋ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. ほぼ完形。G. 外面に黒斑あり。H. カマド内。
3	甕	A. 口縁部径 18.6、残存高 33.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面下半ナデ・上半篋ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 外一暗茶褐色、内一茶褐色。F. 4/5。G. カマド右側袖先端の補強に再利用。H. カマド内。
4	甕	A. 口縁部径 18.1、器高 27.3、底部径 6.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面下半ナデ・上半篋ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、小石。E. 外一淡橙褐色、内一淡茶褐色。F. ほぼ完形。G. 外面に黒斑あり。H. カマド内。
5	甕	A. 口縁部径 19.8、器高 36.4、底部径 5.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. ほぼ完形。G. 底部外面に木葉痕あり。H. カマド内。
6	甕	A. 口縁部径 20.2、器高 27.2、底部径 7.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面篋ナデの後雑なミガキ、内面篋ナデ。底部外面ナデ。D. 白色粒、小石。E. 外一暗茶褐色、内一暗橙褐色。F. ほぼ完形。G. 底部外面に木葉痕あり。外面に黒斑あり。H. カマド内。



第22図 第62号住居跡

- 少量、炭化粒子を微量含み、灰分を混入する。しまりはなく、粘性も弱い。)
- 第7層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。しまり、粘性ともに有するが弱い。)
- 第8層：淡灰色土層（淡灰色粘土ブロックを多量含む。しまり、粘性とも有する。)

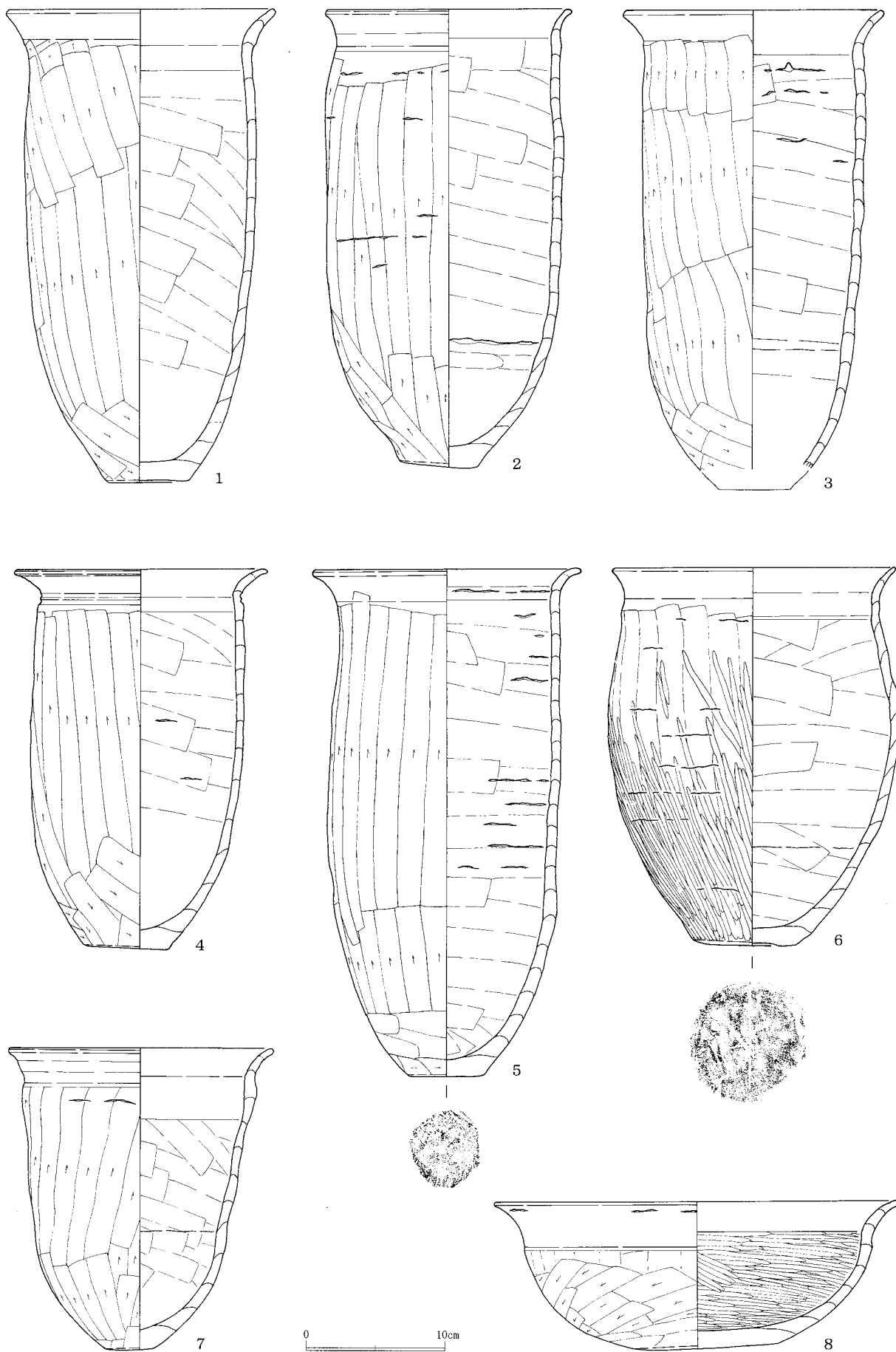
第62号住居跡土層説明

- 第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。)
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を少量均一に、ローム小ブロック・炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。)
- 第3層：明黒褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・炭化粒子・焼土粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。)

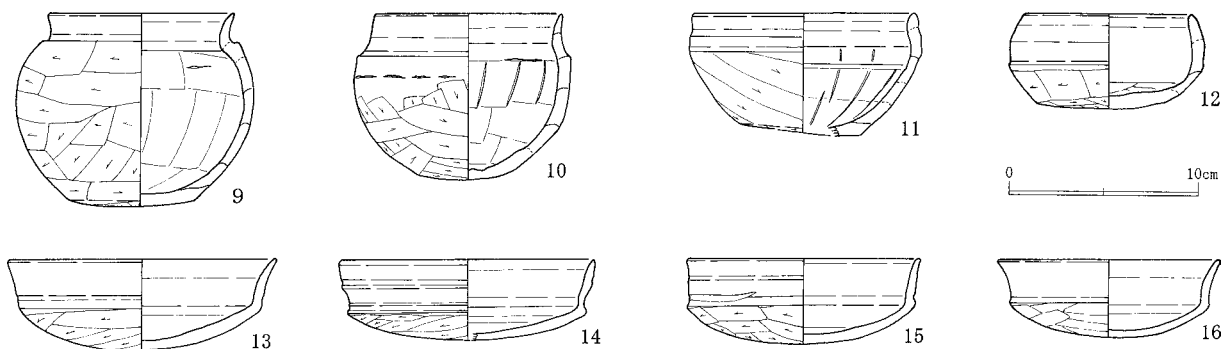
第62号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（焼土粒子を微量含み、粒状の灰色粘質土を若干混入する。しまり、粘性ともに有する。)
- 第2層：暗赤褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを均一に、炭化粒子・ローム粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。)
- 第3層：暗茶褐色土層（ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を微量含む。しまりはやや弱く、粘性を有する。煙道の光に土竜の掘った様な軟らかな部分がある。)
- 第4層：明黒褐色土層（炭化粒子を少量、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有するが弱い。)
- 第5層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含み、灰分を少量混入する。しまり、粘性ともに有するが弱い。)
- 第6層：明黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・焼土ブロックを

7	甕	A. 口縁部径 18.9、器高 21.7、底部径 3.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面下半ナデ・上半篋ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-暗褐色、内-暗茶褐色。F. ほぼ完形。G. 外面は二次焼成を受けて荒れている。H. 床面直上。
8	大形鉢	A. 口縁部径 29.1、器高 10.7、底部径 10.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面ミガキ。底部外面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外-淡橙褐色、内-黒褐色。F. 4/5。H. 床面直上。
9	鉢	A. 口縁部径 9.8、器高 10.2、底部径 6.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. ほぼ完形。H. P1(貯蔵穴)内。
10	鉢	A. 口縁部径 10.0、器高 8.8、底部径 4.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D. 白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
11	鉢	A. 口縁部径 11.9、器高 6.5、底部径 6.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-淡茶褐色、内-明茶褐色。F. ほぼ完形(底部の一部を欠損)。H. カマド内。



第23图 第62号住居跡出土遺物 (1)



第24図 第62号住居跡出土遺物（2）

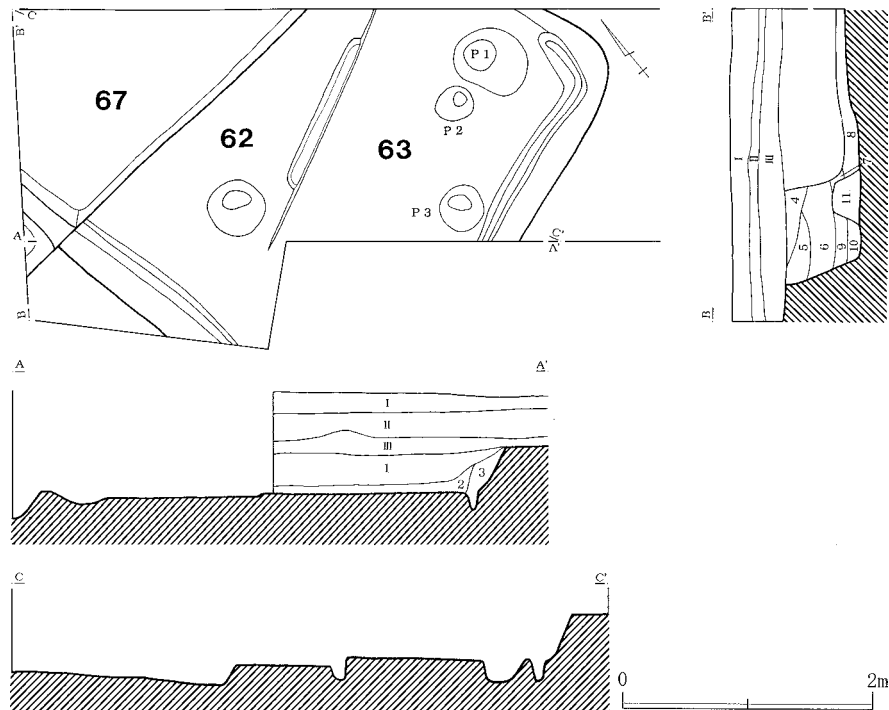
12	坏	A. 口縁部径 8.8、器高 5.1、底部径 6.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 完形。H. カマド内。
13	坏	A. 口縁部径 14.1、器高 4.9。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 2/3。H. カマド内。
14	坏	A. 口縁部径 13.4、器高 4.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
15	坏	A. 口縁部径 12.3、器高 4.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明橙褐色。F. ほぼ完形。H. 床面直上。
16	坏	A. 口縁部径 11.7、器高 4.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明橙褐色。F. 完形。H. カマド内。

第63号住居跡（第25図、図版5）

E 2 区の北西端に位置し、重複する第62号住居跡と第67号住居跡に切られている。調査区内で検出されたのは住居跡の一部であるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、東西方向が4.00m、南北方向は1.88mまで測れる。住居の主軸方位は不明であるが、住居の南側壁はN-70°-Eの方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で36cmある。壁溝は、調査区内で検出された各壁下に見られるが、東側壁下は途切れている。上幅11cmの比較的均一な形態で、床面からの深さは18cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、調査区内で残存する範囲では、比較的平坦に作られている。ピットは、P1~P3の3箇所が検出されている。P1は、住居の南東側コーナー部に位置し、その位置や形態からすると、貯蔵穴の可能性が高い。形態は、60cm×47cmの楕円形ぎみの不整形を呈し、床面からの深さは64cmある。P2は、住居の南東側に位置し、その位置からすると4本支柱を構成する支柱穴の一部と推測される。P3は、住居南側の壁際に位置する。直径44cmの円形ぎみの形態を呈し、床面からの深さは17cmある。

出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。



第25図 第63・67号住居跡

第63・67号住居跡土層説明

〈第63号住居跡〉

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一、径3mmのローム小ブロックをまばらに、径5mmのロームブロック及び焼土粒子を微量、炭化粒子をごく少量含む。黒灰色土が少量混入する。しまり、粘性とも弱い。）
- 第2層：灰褐色土層（ローム粒子を非常に多く、径3～5mmのローム小ブロックを均一、径5mm～1cmのロームブロックをまばらに、炭化粒子と焼土粒子を少量、白色粒子をやや少量含む。しまり、粘性は強い。）
- 第3層：茶褐色土層（ローム粒子を非常に多く、焼土粒子を微量、炭化粒子・径5mmのロームブロックを少量含む。しまり、粘性とも強い。）

〈第67号住居跡〉

- 第4層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を極微量含む。しまり、粘性とも有する。）
- 第5層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を極微量含む。しまり、粘性とも有する。）
- 第6層：茶褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを均一に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。しまり、粘性とも有する。）
- 第7層：明黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。しまり、粘性とも有するが弱い。）
- 第8層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に、ローム粒子・炭化粒子を微量含み、黒色土を混入する。しまり強く、粘性を有する。）
- 第9層：暗灰褐色土層（焼土ブロック・炭化粒子を少量、ローム粒子を微量含み、灰褐色粘質土を少量混入する。しまり、粘性とも有する。）
- 第10層：暗灰褐色土層（組成は第9層に類似するが、粘質土の割合が多く、色調は少々暗い。）
- 第11層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第64号住居跡（第26図、図版6）

E1区の東端に位置し、西側には第75号住居跡が近接している。住居の南東側は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ方形を呈するものと思われる。規模は、南北方向5.62m、東西方向5.94mを測る。住居の主軸方位は、おそらくN—85°—Eをとるとと思われる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で54cmある。壁溝は、調査区内で検出された各壁下に見られ、途切れずに全周している。規模は上幅

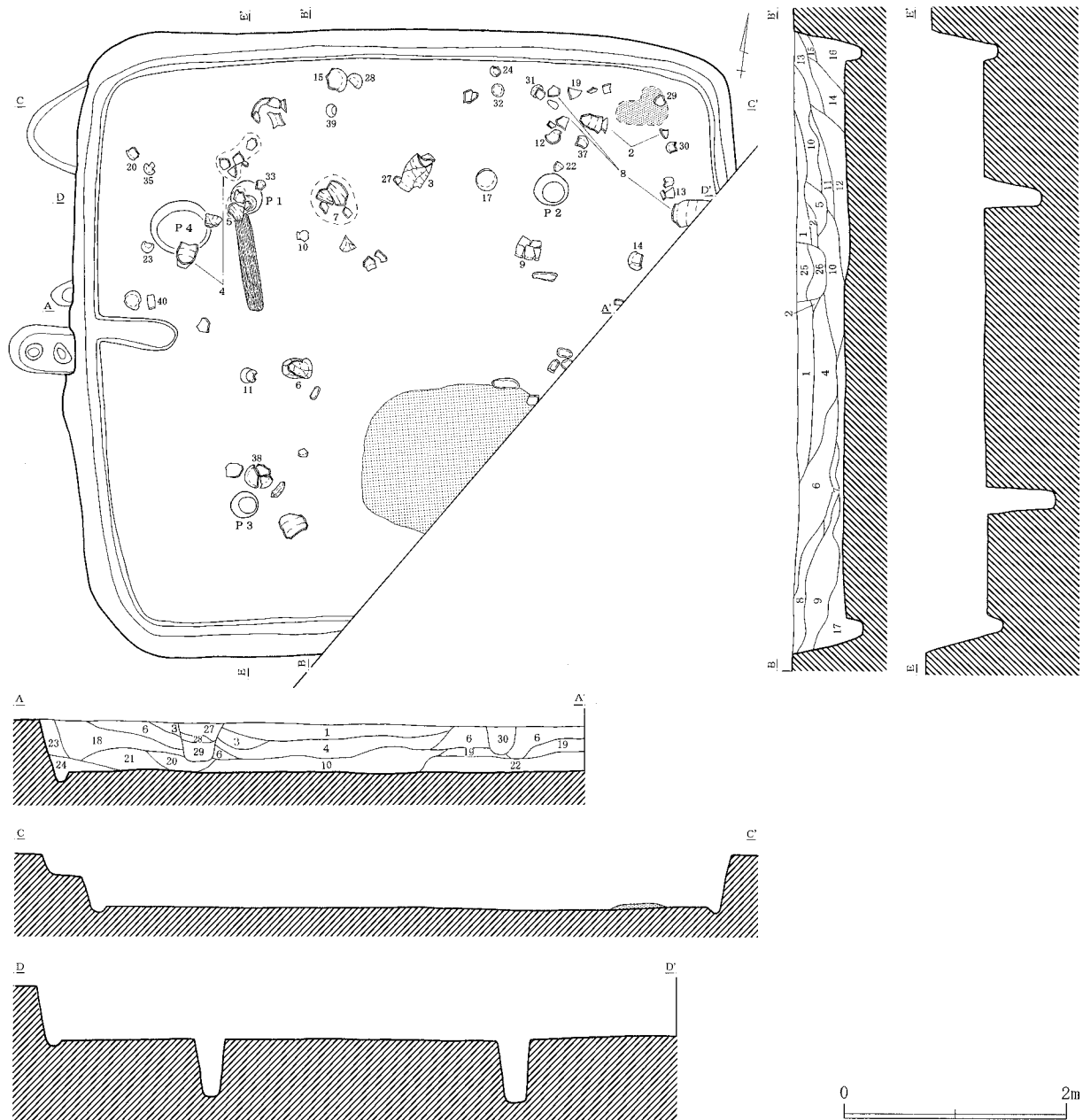
18cmの比較的均一な形態で、床面からの深さは15cmある。西側壁下の中央付近には、長さ75cm程度の直線的な間仕切り状の溝が住居中央に向かって延びている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、ほぼ平坦に作られている。住居中央部の南側寄りや北東側コーナ部の床面上には、白色粘土ブロックが比較的広範囲に分布している。ピットは、住居跡内から4箇所検出されている。P1～P3は、住居のほぼ対角線上に位置し、その配置から4本主柱を構成する主柱穴と考えられる。いずれも直径24cm～30cm程度の円形を呈し、床面からの深さは52cm～62cmある。P4は、住居の西側に位置し、54cm×47cmの楕円形を呈している。床面からの深さは17cmある。

出土遺物は、住居の床面上や覆土中から、比較的多くの土器が出土しているが、特に口縁部径が10cm程度の類似した形態の小形甕が18個体も出土している点は注目される。土器以外では、手捏ね成形によるAⅠ型1類(恋河内2008)の完形の土製支脚が1点、磨石3点と凹石1点が出土しており(図版20)、P1南側の床面上には、比較的大きな柱状の炭化材が出土している。

本住居跡は、床面上から炭化材が出土しており、覆土中にも炭化粒子や焼土粒子を顕著に含むことから、おそらく火災によって焼失した可能性が考えられる。

第64号住居跡出土遺物観察表

1	壺	A. 口縁部径18.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
2	甕	A. 残存高17.9、底部径7.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 1/3。G. H. 覆土中。
3	甕	A. 口縁部径16.0、器高31.9、底部径5.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. ほぼ完形。G. 外面に黒斑あり。H. 床面付近。
4	甕	A. 口縁部径17.0、器高29.2、底部径5.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-淡茶褐色、内-黒褐色。F. 4/5。H. 床面付近。
5	小形甕	A. 口縁部径(15.3)、残存高13.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面指ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-暗橙褐色、内-暗茶褐色。F. 1/3。G. 胴部外面は二次焼成を受けて赤色化している。H. 床面付近。
6	小形甕	A. 口縁部径14.4、器高17.0、底部径5.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外-淡橙褐色、内-明茶褐色。F. 4/5。G. 外面に黒斑あり。H. 床面付近。
7	小形甕	A. 口縁部径15.8、器高17.9、底部径6.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-暗褐色、内-暗茶褐色。F. 1/3。H. 床面付近。
8	大形甕	A. 口縁部径22.2、器高27.4、底部径10.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデの後雑なミガキ。底部穿孔部内面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-明茶褐色。F. 2/3。H. 床面直上。床面付近。
9	小形甕	A. 口縁部径17.4、器高16.5、底部径4.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデの後雑なミガキ。底部穿孔部内面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-暗橙褐色、内-明茶褐色。F. ほぼ完形。H. 床面付近。
10	小形甕	A. 口縁部径(15.1)、器高12.0、底部径4.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面上半篋ナデ・下半ケズリの後雑なミガキ。底部外面及び穿孔部内面ケズリ。D. 片岩粒、白色粒。E. 外-淡茶褐色、内-茶褐色。F. 1/3。H. 床面付近。
11	小形鉢	A. 口縁部径12.3、器高10.6、底部径5.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-淡橙褐色、内-橙褐色。F. ほぼ完形。G. 外面黒斑あり。H. 床面付近。
12	小形鉢	A. 口縁部径10.7、器高11.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後雑なミガキ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 白色粒。E. 外-淡茶褐色、内-淡黄褐色。F. 1/2。H. 覆土中。



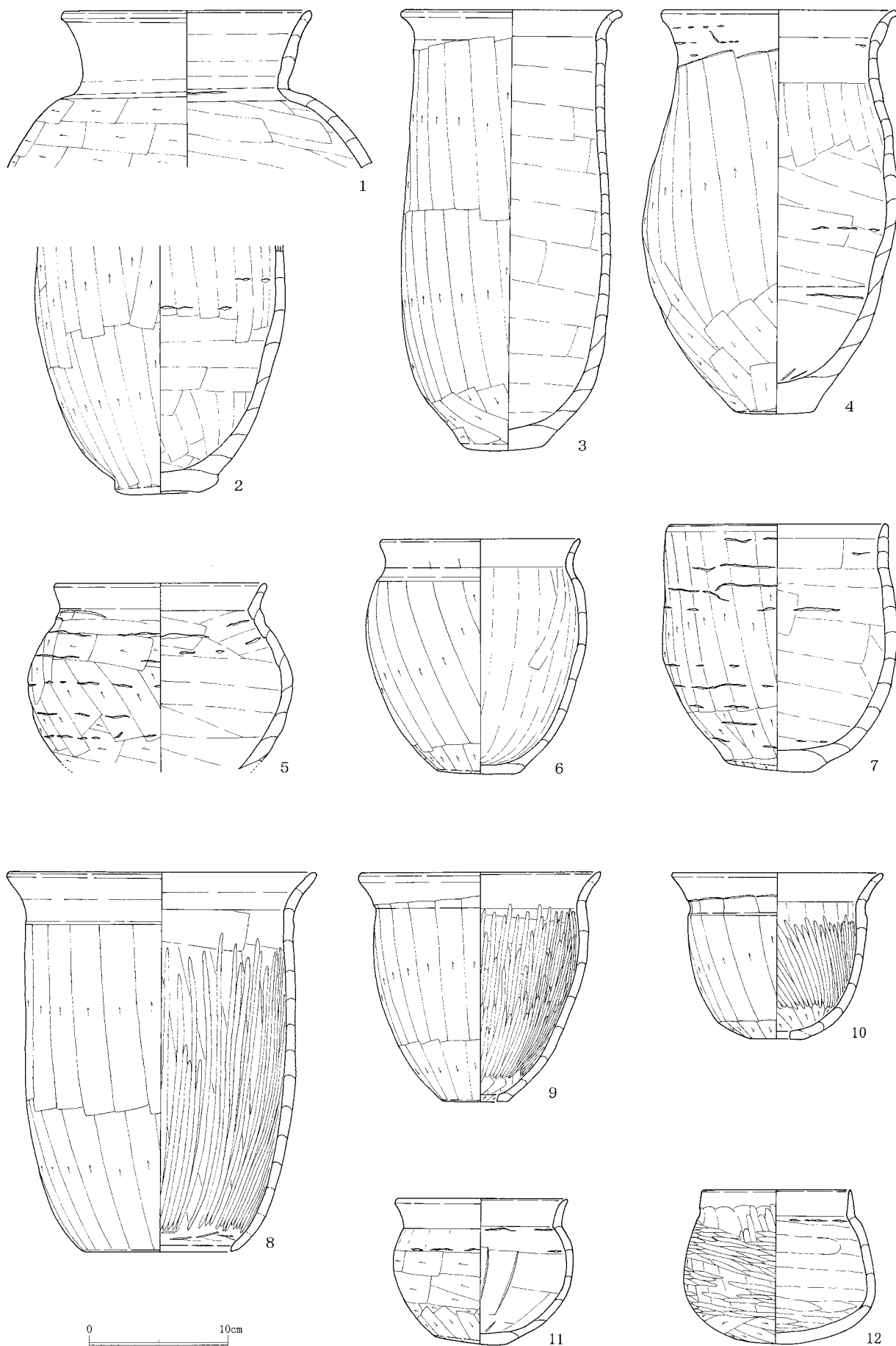
第26図 第64号住居跡

第64号住居跡土層説明

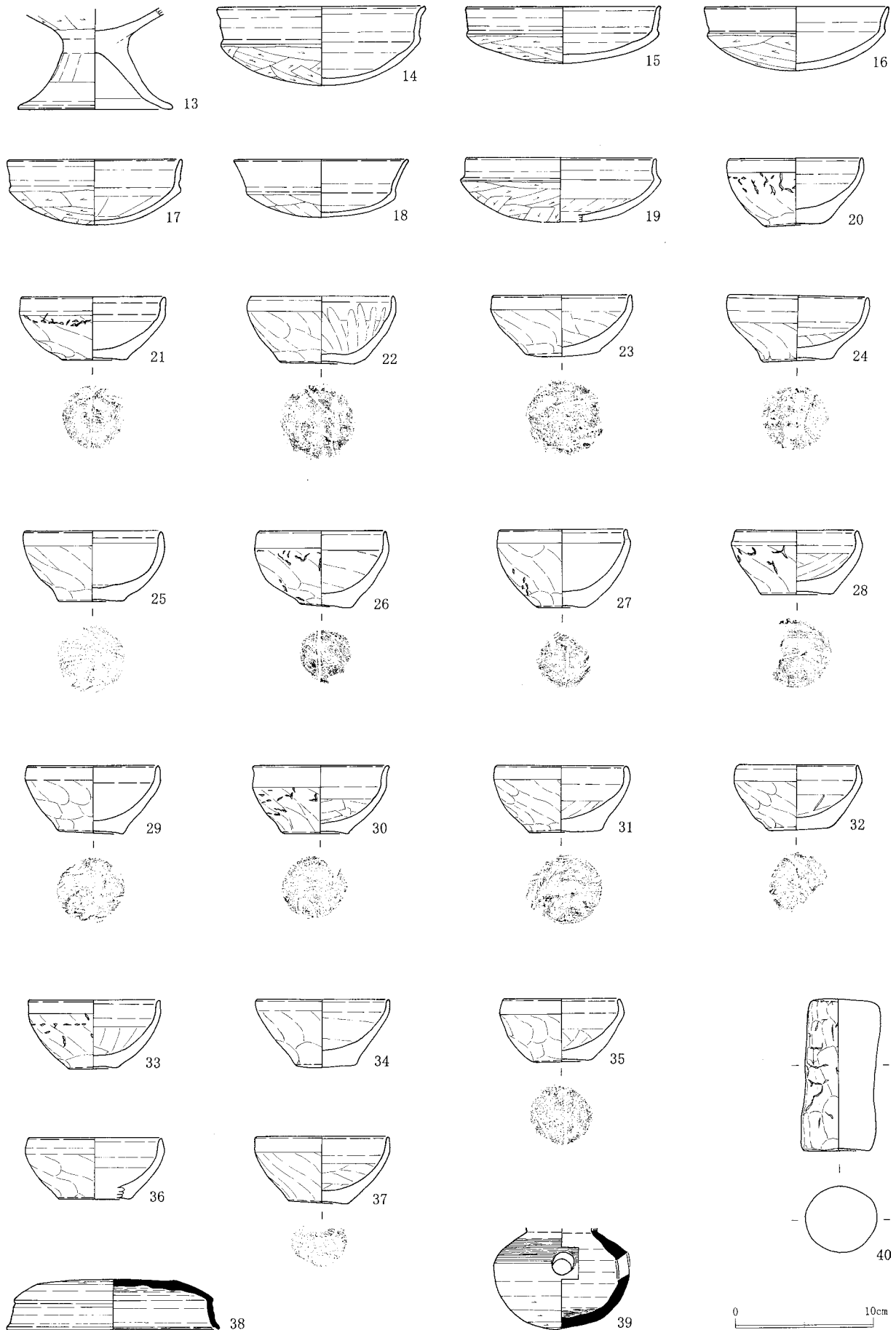
- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第2層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロックを多量に、炭化粒子を微量含み、ローム風化土を混入する。しまり、粘性ともに有するがやや弱い。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含み、ローム風化土を斑点状に若干混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第4層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含み、黒褐色土を多量に混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第5層：明黒褐色土層（ローム粒子を少量均一に、炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第6層：暗茶褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第7層：暗灰褐色土層（ローム粒子を多量に、焼土粒子を微量含み、灰白色粘質土を多量に混入する。しまり、粘性ともに強い。）
- 第8層：茶褐色土層（ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、ローム風化土を若干混入する。しまり、粘性ともに有するが弱い。）
- 第9層：明茶褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロック・炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有するがやや弱い。）
- 第10層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子・ロームブロック・焼土粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第11層：暗黄褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含み、ローム風化土を斑点状に少量混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第12層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を少量、焼土粒子を極微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

- 第13層：明黒褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子を少量含む。しまり、粘性ともに有するがやや弱い。）
- 第14層：暗茶褐色土層（ローム粒子を多量に、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第15層：茶褐色土層（ローム粒子を少量含む、ローム風化土を多量に混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第16層：茶褐色土層（ローム粒子を多量に、炭化粒子・ローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第17層：明黒褐色土層（炭化物・ローム粒子を多量に、炭化粒子・焼土粒子・ロームブロックを少量含む。しまりを有するが、粘性は弱い。）
- 第18層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロックを少量、炭化粒子を微量含む、黒褐色土を斑点状に若干混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第19層：茶褐色土層（ローム粒子を少量、ロームブロックを微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第20層：暗黄褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む、ローム風化土を混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第21層：明黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を少量、ロームブロックを微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第22層：茶褐色土層（ローム粒子を少量、ロームブロック・炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第23層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む、黒褐色土を微量混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第24層：暗茶褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第25層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。良くしまっており、粘性を有する。）
- 第26層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む、黒褐色土を斑点状に混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第27層：明黒褐色土層（ローム粒子を微量含む、黒褐色土を混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第28層：暗茶褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロックを微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第29層：明黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む、ローム風化土を混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第30層：暗茶褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む、黒褐色土を若干混入する。しまり、粘性ともに有する。）

13	高 坏	A. 脚端部径 11.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 坏部外面ケズリ、内面ナデ。脚部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—淡橙褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
14	坏	A. 口縁部径 15.2、器高 5.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外—明茶褐色。F. 3/4。H. 床面直上。
15	坏	A. 口縁部径 14.2、器高 4.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外—淡茶褐色。F. 3/4。G. 内面斑点状剥落顕著。H. 覆土中。
16	坏	A. 口縁部径 13.4、器高 4.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—明茶褐色。F. 4/5。G. 器表面は荒れている。H. 覆土中。
17	坏	A. 口縁部径 12.6、器高 4.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡橙褐色。F. ほぼ完形。H. 床面付近。
18	坏	A. 口縁部径 12.6、器高 4.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—明橙褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
19	坏	A. 口縁部径 13.9、器高 4.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 外—淡褐色、内—暗褐色。F. 1/4。H. 覆土中。
20	坏	A. 口縁部径 9.7、器高 5.0、底部径 4.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ナデ。D. 白色粒。E. 内外—暗茶褐色。F. 2/3。H. 覆土中。
21	坏	A. 口縁部径 10.5、器高 4.6、底部径 4.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外—茶褐色、内—黒褐色。F. 4/5。G. 底部外面に糸切り様の擦痕。H. 覆土中。
22	坏	A. 口縁部径 10.4、器高 5.0、底部径 5.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—茶褐色。F. 3/4。G. 底部外面に木葉痕あり。H. 覆土中。
23	坏	A. 口縁部径 10.0、器高 4.4、底部径 5.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外—茶褐色、内—暗茶褐色。F. ほぼ完形。G. 底部外面に糸切り様の擦痕。H. 覆土中。
24	坏	A. 口縁部径 10.1、器高 4.8、底部径 5.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—暗茶褐色。F. 3/4。G. 底部外面に糸切り様の擦痕。H. 覆土中。
25	坏	A. 口縁部径 10.0、器高 5.1、底部径 4.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外—茶褐色。F. 1/2。G. 底部外面に糸切り様の擦痕。H. 覆土中。
26	坏	A. 口縁部径 9.4、器高 5.6、底部径 3.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。D. 白色粒。E. 外—茶褐色、内—黒褐色。F. 3/4。G. 底部外面に木葉痕あり。H. 覆土中。
27	坏	A. 口縁部径 9.2、器高 5.7、底部径 3.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外—茶褐色、内—黒褐色。F. 4/5。G. 底部外面に木葉痕あり。H. 覆土中。



第27图 第64号住居跡出土遺物 (1)



第28图 第64号住居跡出土遺物（2）

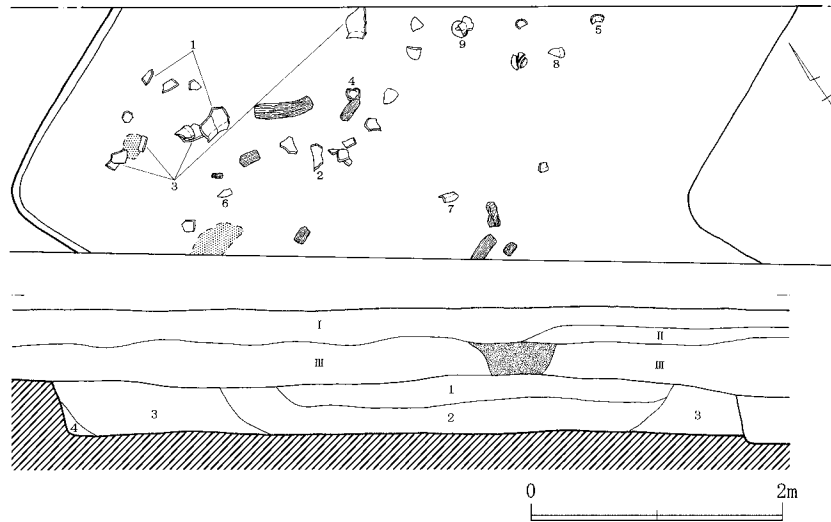
28	坏	A. 口縁部径 8.8、器高 4.7、底部径 5.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 3/4。G. 底部外面に糸切り様の擦痕。H. 覆土中。
29	坏	A. 口縁部径 9.4、器高 5.0、底部径 4.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 1/3。G. 底部外面に糸切り様の擦痕。H. 覆土中。
30	坏	A. 口縁部径 9.9、器高 5.0、底部径 4.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 4/5。G. 底部外面に糸切り様の擦痕。H. 覆土中。
31	坏	A. 口縁部径 9.6、器高 4.9、底部径 5.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. ほぼ完形。G. 底部外面に糸切り様の擦痕。H. 覆土中。
32	坏	A. 口縁部径 8.7、器高 5.0、底部径 4.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. ほぼ完形。G. 底部外面に糸切り様の擦痕。H. 覆土中。
33	坏	A. 口縁部径 9.5、器高 5.0、底部径 3.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 2/3。H. 覆土中。
34	坏	A. 口縁部径 9.6、器高 4.9、底部径 4.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ナデ。D. 白色粒。E. 外一内茶褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
35	坏	A. 口縁部径 8.4、器高 4.6、底部径 4.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面指ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 4/5。G. 底部外面に木葉痕あり。H. 覆土中。
36	坏	A. 口縁部径 9.7、器高 4.4、底部径 5.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一暗茶褐色。G. 外面に黒斑あり。F. 1/3。H. 覆土中。
37	坏	A. 口縁部径 9.7、器高 4.7、底部径 4.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一暗褐色、内一茶褐色。F. 2/3。G. 底部外面に糸切り様の擦痕。H. 覆土中。
38	須恵器 坏 蓋	A. 口縁部径 15.4、器高 3.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面回転ナデ。天井部外面回転篋ケズリ、内面回転ナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外一暗灰色。F. ほぼ完形。H. 床面付近。
39	須恵器 臙	A. 残存高 7.4。B. ロクロ成形。C. 胴部外面回転ナデの後上半櫛歯状工具によるカキメ・下半回転篋ケズリ、内面回転ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外一暗灰色。F. 胴部のみ。G. 底部内面に当道具痕を残す。胴部外面上半に降灰による自然釉がかかる。H. 覆土中。
40	支 脚	A. 長さ 11.1、最大幅 5.4。B. 手捏ね。C. 表面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡茶褐色。F. 完形。G. 表面に不規則な亀裂顕著。H. 覆土中。

第65号住居跡（第29図、図版6）

E3区の中央付近に位置し、重複する第68号住居跡に切られている。調査区内で検出されたのは住居跡の一部であるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、北西～南東方向は3.70mまで、南西～北東方向は2.50mまで測れる。住居の主軸方位は不明であるが、住居の北西側壁はN-68°-Eの方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で45cmある。調査区内で検出された各壁下には壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、調査区内ではほぼ平坦に作られている。調査区内で検出された部分には、住居内施設は何も見られない。

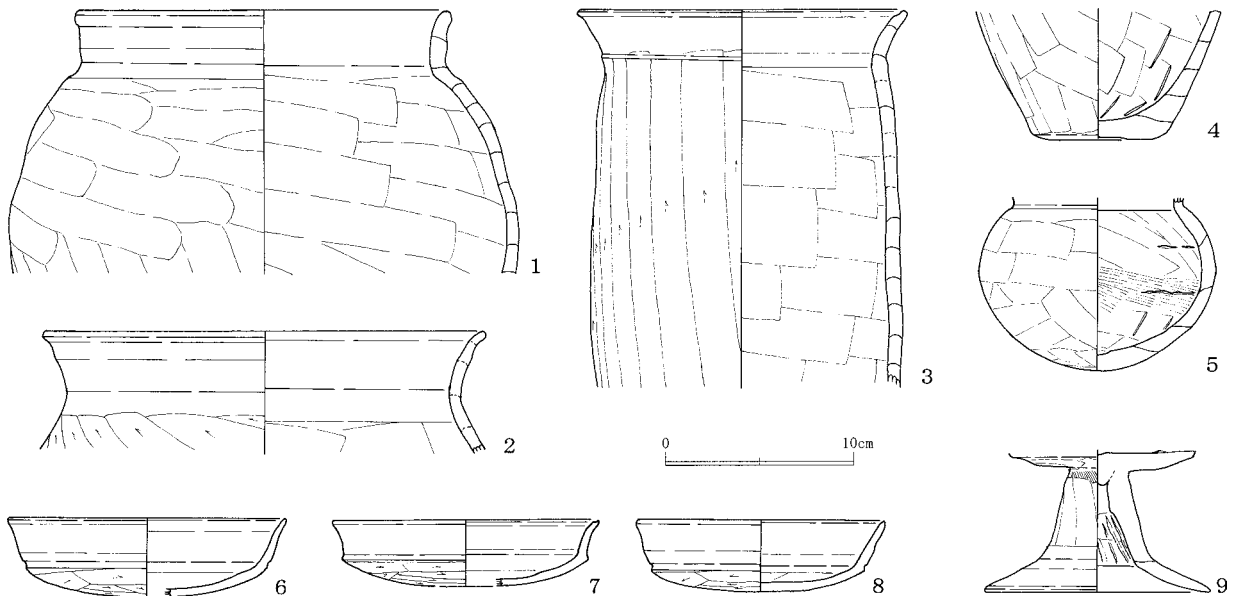
出土遺物は、住居の床面付近から、古墳時代後期の土器片が比較的多く出土している。これらの土器の中には、同一個体で接合する破片でありながら、破片相互の色調がまったく異なるものがいくつか見られる。土器以外では、床面上より炭化材や焼土が複数出土しており、本住居跡は火災によって焼失したものと考えられる。



第29図 第65号住居跡

第65号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（白色粒子を均一、ローム粒子をまばらに、炭化粒子、径1cmの炭化物ブロック、焼土粒子を少量含む。しまり強く、粘性弱い。）
- 第2層：灰褐色土層（ローム粒子を非常に多く、径3mmのローム小ブロック、炭化粒子を均一、径1.5cmのロームブロックをまばらに、径3cmのロームブロック、径5mmの炭化物ブロックをやや多く、径3mmの焼土小ブロックを微量含む。しまりは強いが、粘性は弱い。）
- 第3層：暗灰褐色土層（径3mmのローム小ブロック、炭化粒子を均一、径1.5cmのロームブロック、径1.5cmの炭化物ブロック、径1.5cmの焼土ブロックを少量、白色粒子をやや多く、焼土粒子を微量含む。しまりはやや弱いが、粘性はある。）
- 第4層：灰褐色土層（ローム粒子を多く、径3mmのローム小ブロックを均一、炭化粒子を少量、焼土粒子をまばらに含む。しまりはやや弱いが、粘性は強い。）



第30図 第65号住居跡出土遺物

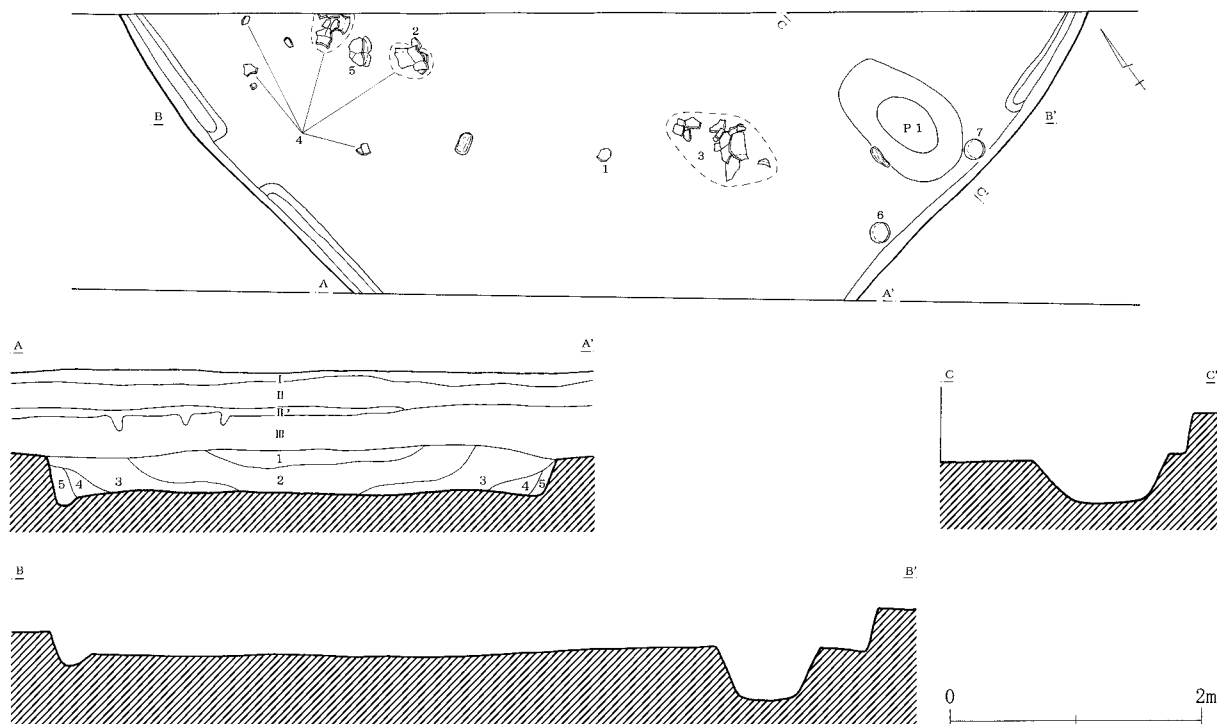
第65号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径 (20.0)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外一淡灰褐色。F. 1/3。G. 外面に黒斑あり。H. 床面付近。
2	甕	A. 残存高 (23.3)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗橙褐色。F. 1/4。H. 覆土中。
3	甕	A. 口縁部径 17.4、残存高 20.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一茶褐色、内一暗褐色。F. 2/3。G. 接合する破片同士で色調が異なるものが多い。H. 床面直上。
4	甕	A. 底部径 7.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗褐色。F. 底部のみ。H. 覆土中。
5	小形壺	A. 残存高 9.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗橙褐色。F. 2/3。G. 底部外面に黒斑あり。接合する破片同士で色調が異なるものが多い。H. 床面付近。
6	坏	A. 口縁部径 (14.6)、器高 4.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
7	坏	A. 口縁部径 (14.1)、器高 3.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
8	坏	A. 口縁部径 (13.1)、器高 3.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. 1/3。H. 床面直上。
9	高坏	A. 残存高 7.5、脚端部径 12.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 坏部外面篋ナデ、内面ナデ。脚部外面ハケの後ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 脚部 3/4。G. 脚部内面に絞り目を残す。H. 床面付近。

第66号住居跡 (第31図、図版6)

E 3 区の南東側に位置し、北西側には第68号住居跡が近接している。調査区内で検出されたのは住居跡の一部であるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、方形か長方形を呈するものと思われる。規



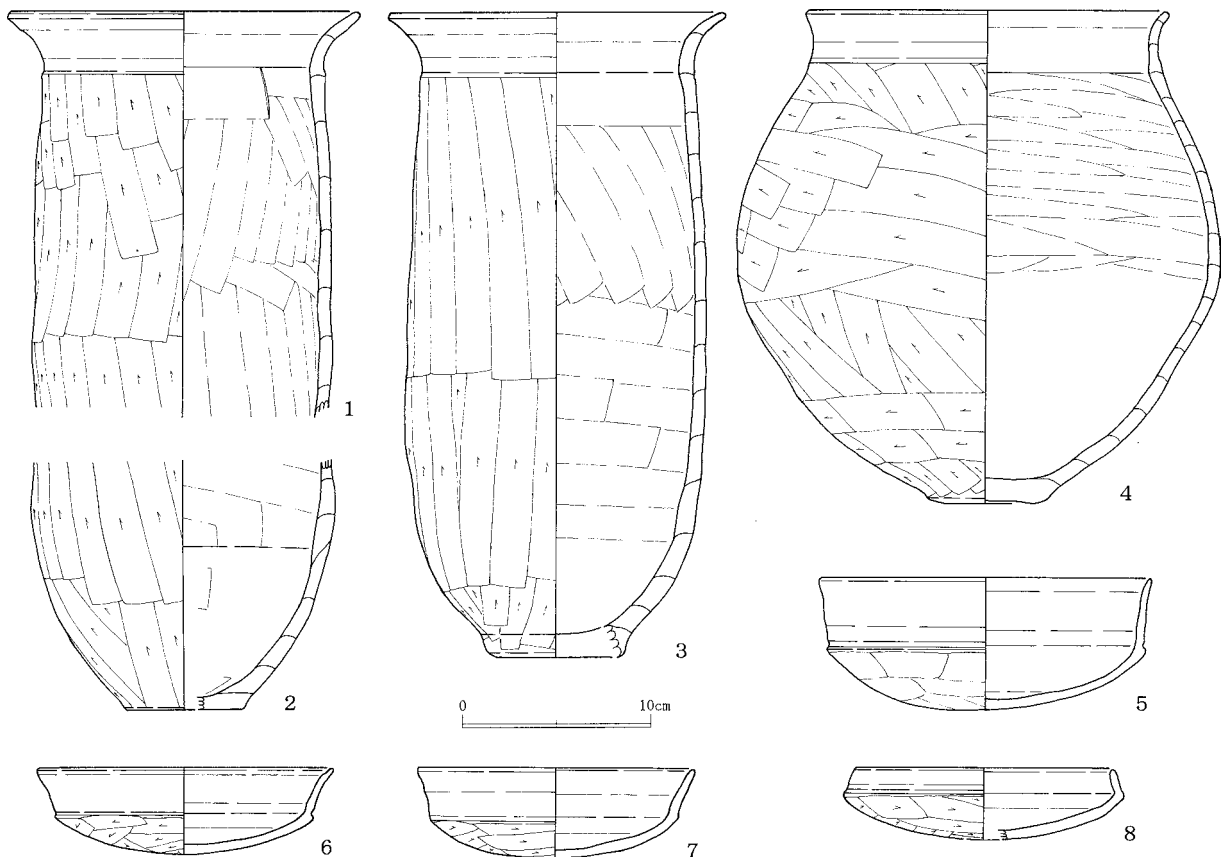
第31図 第66号住居跡

第66号住居跡土層説明

- 第1層：黒褐色土層（径3mmのローム小ブロックを均一、黒灰色土を多く、径5mmのロームブロックと炭化粒子を少量、径3mmの炭化物小ブロックをやや多く、焼土粒子及び径5mmの焼土ブロックを微量含む。しまり、粘性ともに強い。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多く、径5mmのローム小ブロックを均一、径1cmのロームブロック、炭化粒子、径5mmの炭化物ブロックを少量、焼土粒子を微量、径5mmの焼土小ブロックをまばらに含む。）
- 第3層：黒灰褐色土層（ローム粒子を多く、径5mmのローム小ブロックを均一、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。しまり、粘性ともに強い。）
- 第4層：灰褐色土層（ローム粒子を均一、径3cmのロームブロック、焼土粒子を少量、径1cmのロームブロックをやや多く、炭化粒子を微量含む。しまりはあるが、粘性はほとんどない。）
- 第5層：暗褐色土層（径5mmのローム小ブロックを均一、白色粒子を微量、炭化粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。）

模は、南北方向は3.50mまで、東西方向は3.46mまで測れる。住居の主軸方位は不明であるが、住居の南側壁はN-78°-Eの方向を向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で34cmある。調査区内で検出された各壁下には、上幅26cm・床面からの深さ8cmの比較的整った形態の壁溝が見られるが、各壁下の壁溝とも途切れている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、調査区内で検出された部分ではやや起伏が見られる。ピットは、住居跡内で1箇所検出されている。P1は、住居南側壁の壁際に位置している。111cm×68cmの楕円形ぎみの形態を呈し、床面からの深さは43cmある。

出土遺物は、住居の床面付近から古墳時代後期の土器片が出土している。



第32図 第66号住居跡出土遺物

第66号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径 (18.5)、残存高 21.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 1/4。H. 覆土中。
2	甕	A. 残存高 13.2、底部径 (6.2)。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一暗橙褐色、内一暗褐色。F. 1/3。H. 床面直上。
3	甕	A. 口縁部径 17.8、器高 34.2、底部径 (7.2)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 底部欠失。G. 胴部下半は二次焼成を受けて荒れている。H. 床面直上。
4	甕	A. 口縁部径 19.2、器高 26.2、底部径 6.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデの後上半指ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡褐色、内一明茶褐色。F. 1/2。G. 胴部下半～底部外面は二次焼成を受けて赤色化している。H. 床面直上。
5	坏	A. 口縁部径 (17.5)、器高 7.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. 2/3。G. 器表面は摩滅している。H. 床面付近。
6	坏	A. 口縁部径 15.7、器高 4.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 完形。H. 覆土中。
7	坏	A. 口縁部径 14.7、器高 4.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 完形。H. 床面直上。
8	坏	A. 口縁部径 (13.6)、器高 3.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 1/3。H. 覆土中。

第67号住居跡 (第25図、図版6)

E 2 区の北西端に位置し、重複する第62号住居跡に切られている。調査区内で検出されたのは住居の南側壁の一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

規模は、東西方向は2.92mまで、南北方向は1.60mまで測れる。住居の主軸方位は、N—154°—Wをとる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で36cmある。調査区内で検出された住居南側壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、調査区内では若干傾斜している。

カマドは、住居南側壁に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。住居の南側にカマドを付設する例は当地方では比較的珍しく、本遺跡では今のところ本住居跡だけである。調査区内で検出されたのは、左側袖の一部だけであるため、カマドの全容は不明である。燃烧部は、住居の壁を掘り込まず、燃烧面は住居の床面より5cm程度低く作られている。袖は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色粘土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されており、その痕跡は見られない。

出土遺物は、住居の覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。

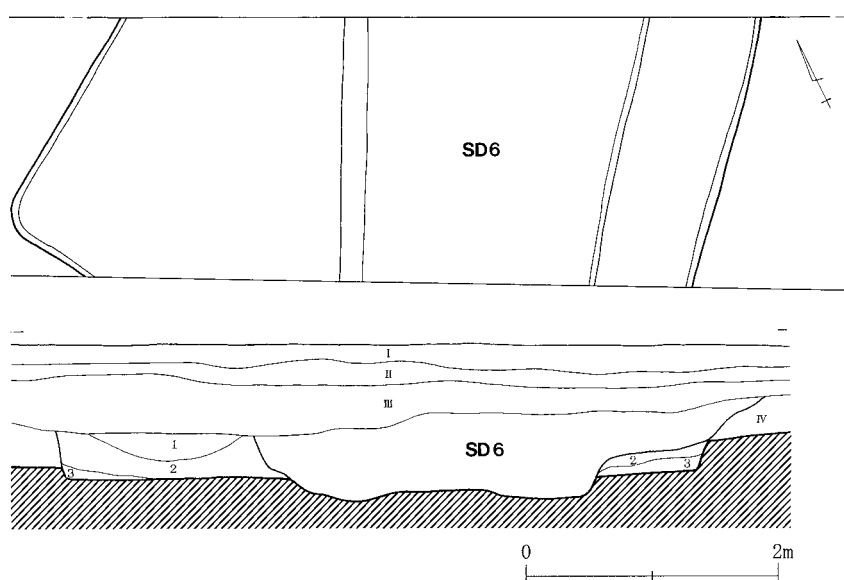
第68号住居跡 (第33図)

E 3 区の中央付近に位置し、重複する第65号住居跡を切り、第6号溝跡に切られている。調査区内で検出されたのは住居跡の一部であるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつやや不整の方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、北西～南東方向が4.95m、南西～北東方向は2.52mまで測れる。住居の主軸方位は不明であるが、住居の北西側壁はN—67°—Eの方向を向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で32cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、比較的平坦に作られている。調査区内で検出

された部分には、住居内施設は見られない。

出土遺物は、住居の覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。



第68号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（径5mmのローム小ブロックを均一、白色粒子をまばらに、径5mmの灰色シルト小ブロック、径1.5cmのシルトブロックを少量、灰色シルト粒子を多く含む。しまりは強いが、粘性はない。）

第2層：暗褐色土層（径1.5cmのロームブロックを主体とし、白色粒子をまばらに、ローム粒子を多く、褐色シルトを少量含む。しまりは強いが、粘性は弱い。）

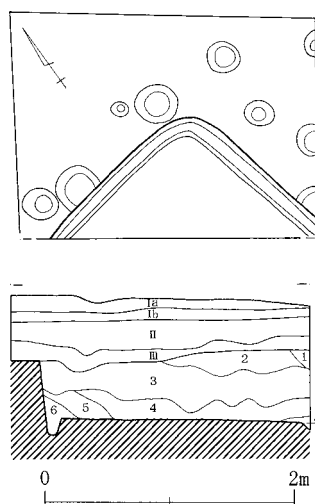
第3層：土層説明なし。

第33図 第68号住居跡

第69号住居跡（第34図、図版6）

E 5 区に位置し、東側にはC地点で検出された第34号住居跡と第35号住居跡が近接している。調査区内で検出されたのは、住居の北東側コーナー部付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、南北方向は1.40mまで、東西方向は1.34mまで測れる。住居の主軸方位は不明であるが、住居の北側壁はN-80°-Eの方向を向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で45cmある。壁溝は、上幅12cm・床面からの深さが13cm



第69号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（径1mm程度のローム微粒子を若干含む。しまり、粘性強い。）

第2層：暗褐色土層（径1～10mm程度のローム粒子をやや多く含む。しまり、粘性強い。）

第3層：暗褐色土層（第2層に類似するが、ローム粒子の含有量が多く、更に焼土粒も含む。）

第4層：暗褐色土層（径1～5mm程度のローム粒子を若干含む。しまり、粘性強い。）

第5層：暗褐色土層（第4層に類似するが、ローム含有量が少なく、色調がかなり暗い。）

第6層：暗褐色土層（径1mm程度のローム粒子を若干含む。しまり、粘性強い。）

第7層：暗褐色土層（焼土をやや多く含む。しまり、粘性強い。）

第34図 第69号住居跡

の比較的均一な形態で、調査区内で検出された部分では途切れずに全周している。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、ほぼ平坦に作られている。

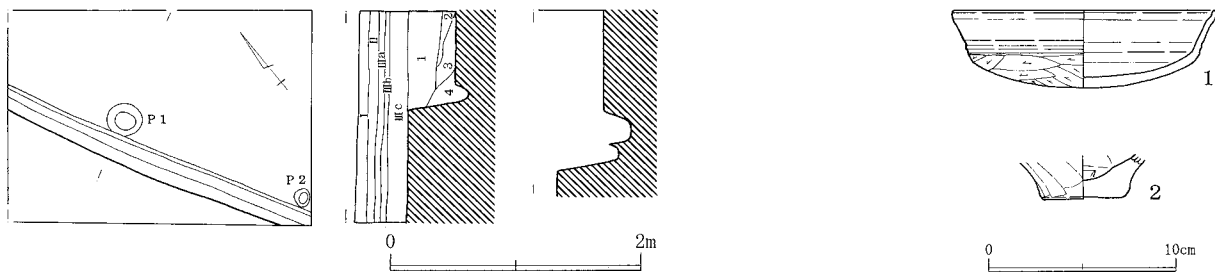
出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片がごく少量出土しただけである。

第70号住居跡（第35図、図版7）

E9区に位置する。調査区内で検出されたのは、住居の南西側壁際付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。南西側壁は、N-32°-Wの方向を向いている。

壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で38cmある。壁溝は、上幅14cmで床面からの深さが11cmの比較的整った形態である。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、ほぼ平坦に作られている。ピットは、2箇所あり、いずれも壁際から検出されている。P1は、直径27cmの円形を呈し、床面からの深さは14cmある。P2は、15cm×12cmの楕円形を呈し、床面からの深さは15cmある。

出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片がごく少量出土しただけである。



第35図 第70号住居跡及び出土遺物

第70号住居跡土層説明

- 第I層：明灰色土層（As-Aを多く含む。現代耕作土。しまり、粘性有する。）
- 第II層：暗灰褐色土層（As-Aは見られないが、色調は第I層に近い。しまり、粘性非常に強い。）
- 第IIIa層：暗灰褐色土層（径1～3mm程度の焼土粒子やマンガン・As-Bを含む。しまり、粘性非常に強い。）
- 第IIIb層：暗灰褐色土層（第IIIa層に類似するが、マンガン含有量が少なく、色調も更に暗い。）
- 第IIIc層：暗灰褐色土層（第IIIa層に類似するが、色調やや明るい。）
- 第1層：明黄褐色土層（径10～30mm程度のロームブロックを非常に多く含む。しまり、粘性若干有する。）
- 第2層：暗褐色土層（径1mm程度の焼土・ローム粒子を多く含み、若干の炭化物を含む。しまり、粘性若干有する。）
- 第3層：暗褐色土層（径1mm以下のローム微粒子を非常に多く含む。しまり、粘性若干有する。）
- 第4層：暗褐色土層（径1～3mm程度のローム粒子を若干含む。しまり、粘性若干有する。）

第70号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A. 口縁部径 (14.0)、器高 4.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 1/4。H. 覆土中。
2	小形鉢	A. 残存高 2.3、底部径 4.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部内外面籠ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 底部のみ。H. 覆土中。

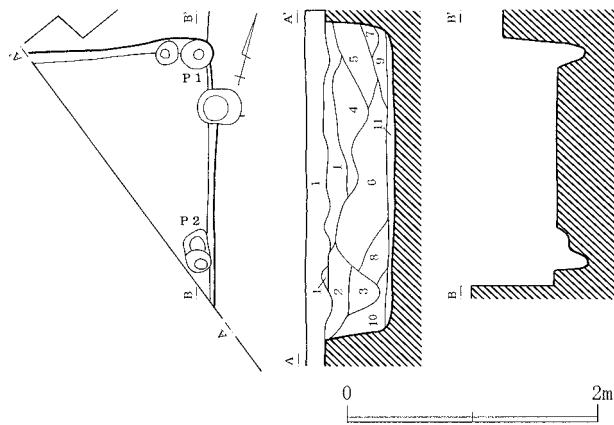
第71号住居跡(第36図、図版7)

E1区の西端に位置し、重複する第72号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは、遺構の北側コーナー部付近だけであるため、本遺構の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、北西～南東方向は1.98mまで、北東～南西方向は1.38mまで測れる。主軸方位は不明であるが、北西側壁はN-76°-Eをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で45cmある。床面は、地山ローム土を直接掘り窪めて整形した直床式で、調査区内で検出された部分では、ほぼ平坦に作られている。遺構に伴うと考えられるピットは、P1とP2の2箇所が検出されている。いずれも壁際のコーナー部(P1)と壁の中間あたり(P2)に位置し、近接する第72号住居跡や第73号住居跡と同じくその配置に規則性が窺え、壁柱穴の可能性が考えられる。形態は、いずれも直径24cm～30cm程度の円形を呈し、床面からの深さは21cmある。

出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。

本遺構は、調査時には住居跡として扱っているが、その構造や形態から見て、第72号住居跡や第73号住居跡と同じく、中世の方形堅穴状遺構の可能性が高いと考えられる。



第36図 第71号住居跡

第71号住居跡土層説明

- 第I層：明灰褐色土層（As-Aを多く含む。現代耕作土。しまり、粘性あり。）
- 第1層：暗茶褐色土層（明褐色土を斑状に含む。しまり、粘性あり。）
- 第2層：明褐色土層（径1～30mm程度のローム粒子を多量に含む。しまり、粘性あり。）
- 第3層：明褐色土層（第2層に類似するが、ローム粒子の含有量がやや少ない。しまり、粘性あり。）
- 第4層：明褐色土層（径1～10mm程度のローム粒子と炭化物粒子を若干含む。しまり、粘性あり。）
- 第5層：暗褐色土層（第4層に類似するが、色調が暗い。しまり、粘性あり。）
- 第6層：明褐色土層（径1～30mm程度のローム粒子を多量に含むが、第2層ほどではない。しまり、粘性あり。）

- 第7層：暗褐色土層（径1mm程度のローム粒子を若干含む。しまり、粘性あり。）
- 第8層：黒褐色土層（径1～10mm程度のローム粒子を若干含む。しまり、粘性あり。）
- 第9層：暗灰色土層（ハードローム下の粘質土であるが、貼り床として使用している。しまり、粘性非常に強い。）
- 第10層：暗褐色土層（径1～3mm程度のローム粒子を含む。しまり、粘性あり。）
- 第11層：明灰褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを若干含む。しまり、粘性あり。）

第72号住居跡(第37図、図版7)

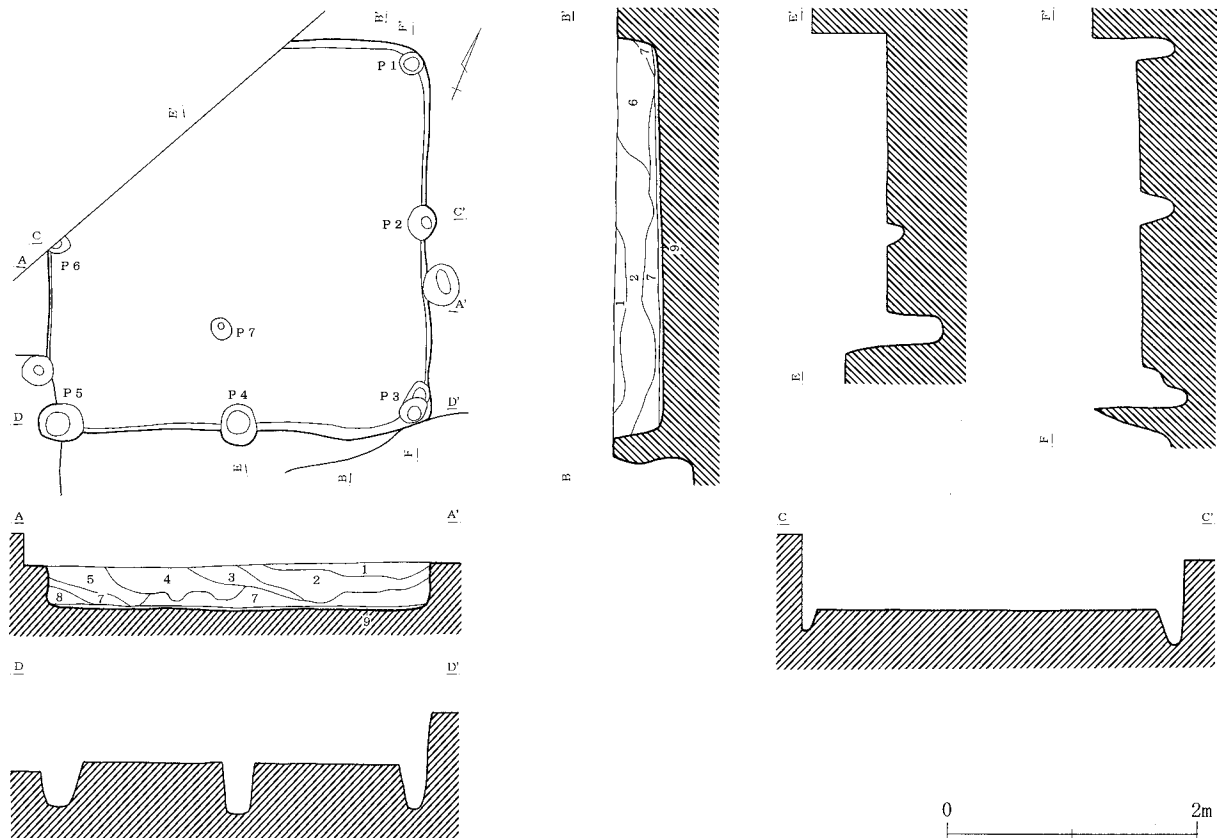
E1区の西側に位置し、重複する第71号住居跡に切られ、南側を第73号住居跡と接している。遺構の西側コーナー部は調査区外に位置するため、本遺構の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ比較的整った方形を呈するものと考えられる。規模は、北西～南東方向が3.20m、北東～南西方向が3.08mを測る。南東側壁は、N-77°-Eの方向を向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で41cmある。床面は、地山ローム土を直接掘り窪めて整形した直床式で、全体的に平坦に作られている。ピットは、遺構内からP1～P7の7箇所が検出されている。P1～P6は、壁柱穴と考えられるもので、壁際各コーナー部と各壁の中間に位置し、壁の中間のもの

は壁を切っている。いずれも直径20cm～35cm程度の円形を呈し、床面からの深さは30cmから40cmある。P 7は、遺構の南東側に位置する。直径17cm程度の円形を呈し、床面からの深さは11cmある。

出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量と、凝灰岩製の砥石の破片(第38図No 2)が1点出土しただけである。

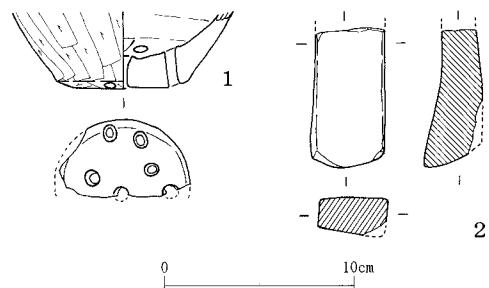
本遺構は、調査時には住居跡として扱っているが、その構造や形態から見て、第73号住居跡と同じく、中世の方形竪穴状遺構の可能性が高いと考えられる。



第37図 第72号住居跡

第72号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径1mm程度のローム粒子を若干含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第2層：暗褐色土層（径1～20mm程度のローム粒子を含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第3層：暗褐色土層（径1mm程度のローム粒子を若干含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第4層：明褐色土層（径1～10mm程度のローム粒子を含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第5層：明褐色土層（径1～10mm程度のローム粒子を多く含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第6層：明褐色土層（第5層に類似するが、色調がやや暗い。）
- 第7層：暗褐色土層（径1～10mm程度のローム粒子と茶褐色粘質土ブロックを多く含む。しまり、粘性強い。）
- 第8層：暗褐色土層（径1～3mm程度のローム粒子をやや多く含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第9層：明灰茶褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを若干含む。しまり、粘性あり。）



第38図 第72号住居跡出土遺物

第72号住居跡出土遺物観察表

1	小形甑	A. 底部径(7.0)。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡灰褐色。F. 底部1/2。H. 覆土中。
2	石製品 (砥石)	A. 残存長7.2、最大幅3.8、厚さ2.4。C. 各面とも良く擦れている。D. 凝灰岩。F. 1/2。H. 覆土中。

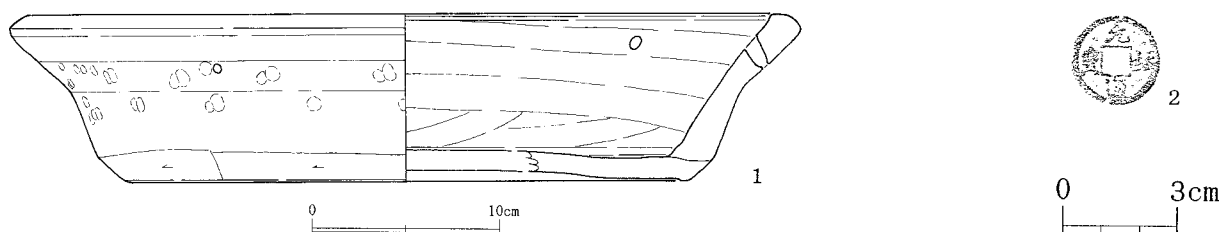
第73号住居跡(第40図、図版7)

E1区の西側に位置する。遺構の北西側を第72号住居跡と接し、西側には第71号住居跡、南側には第1号井戸跡が近接している。

平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ比較的整った方形を呈している。規模は、北西～南東方向が3.56m、北東～南西方向が3.82mを測る。北西側壁は、N-68°-Eの方向を向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で72cmある。床面は、地山ローム土を直接掘り窪めて整形した直床式で、全体的に平坦に作られている。遺構の中央付近の床面上には焼土が分布している箇所が見られ、炉か火鉢を使用した囲炉裏のような燃焼施設が存在した可能性も考えられる。ピットは、遺構内からP1～P10の10箇所が検出されている。このうちP1～P8は、壁際の各コーナー部と各壁の中間に配置された壁柱穴と考えられるものであるが、南西側壁のP2と北東側壁のP6は壁の中間からずれた位置に配置されている。いずれも概ね直径20cm～30cm程度の円形を呈し、床面からの深さは13cm～36cmある。P9とP10は、いずれも15cm～20cm程度の小規模なもので、北西側壁と南西側壁の壁際に位置している。床面からの深さは、それぞれ13cmと11cmである。

出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量と、中世の在地産火鉢の大形破片が出土している。土器以外では、住居北西側の床面付近に粘土塊が置かれたような状態で出土し、覆土中から北宋銭の元祐通寶(初鑄1086年)が1枚出土している。

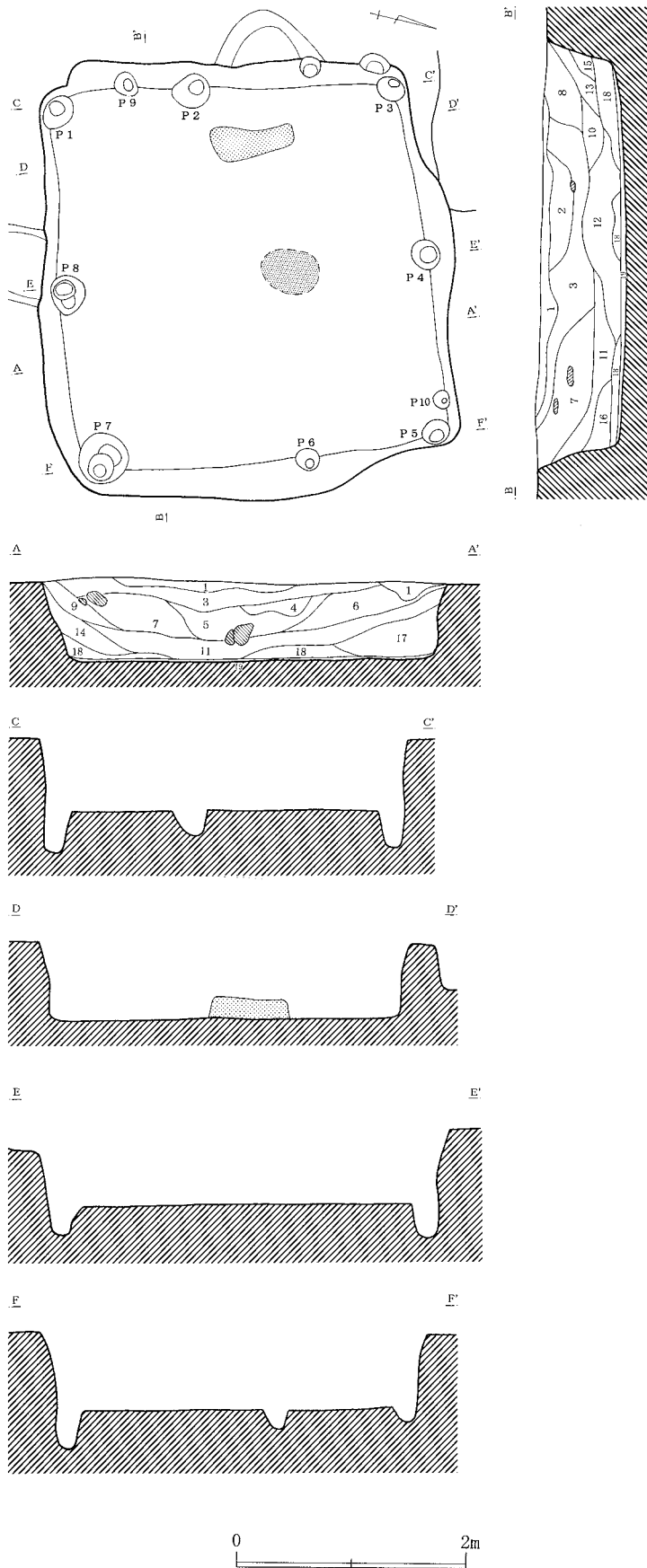
本遺構は、調査時には住居跡として扱っているが、その構造や形態及び出土遺物から見て、第72号住居跡と同じく、中世の方形竪穴状遺構と考えられる。



第39図 第73号住居跡出土遺物

第73号住居跡出土遺物観察表

1	火鉢	A. 口縁部径(42.0)、器高8.8、底部径(29.8)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下端ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、黒色粒。E. 内外—淡褐色。F. 1/3。G. 口縁部に6～7ヶ所ほぼ等間隔に円孔を施す。口縁部内外面に煤付着。口唇部の一部は二次焼成を受けて赤色化している。H. 覆土中。
2	古銭	A. 直径2.4。B. 鑄造。D. 銅製。F. 完形。G. 「元祐通寶」初鑄1086年。H. 覆土中。



第40図 第73号住居跡

第73号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径1～3mm程度のローム粒子を含む。しまり、粘性あり。）
- 第2層：暗褐色土層（径1～5mm程度のローム粒子を多く含む。しまり、粘性あり。）
- 第3層：明褐色土層（径1～3mm程度のローム粒子を非常に多く含む。しまり、粘性あり。）
- 第4層：暗褐色土層（径1～5mm程度のローム粒子を若干含む。しまり、粘性あり。）
- 第5層：明褐色土層（径1～5mm程度のローム粒子を非常に多く含む。しまり、粘性あり。）
- 第6層：暗褐色土層（径1～5mm程度のローム粒子を含む。しまり、粘性あり。）
- 第7層：明灰褐色礫層（径1～10cm程度の川床礫、砂利層である。しまり、粘性なし。）
- 第8層：暗褐色土層（径1～10mm程度のローム粒子を若干含む。しまり、粘性あり。）
- 第9層：暗褐色土層（径1～2mm程度のローム粒子を若干含む。しまり、粘性あり。）
- 第10層：暗褐色土層（径1～10mm程度のローム粒子を含む。しまり、粘性あり。）
- 第11層：暗褐色土層（径1～2mm程度のローム粒子を含む。しまり、粘性あり。）
- 第12層：暗褐色土層（径1～10mm程度のローム粒子を多く含む。しまり、粘性あり。）
- 第13層：黒褐色土層（径1mm程度のローム粒子を若干含む。しまり、粘性あり。）
- 第14層：明褐色土層（径1～3mm程度のローム粒子を非常に多く含む。しまり、粘性あり。）
- 第15層：黄褐色土層（ローム風化土。）
- 第16層：明褐色土層（径1～5mm程度のローム粒子と径1～5cm程度の川床礫を若干含む。しまり、粘性若干あり。）
- 第17層：暗褐色土層（径1～10mm程度のローム粒子を含む。しまり、粘性あり。）
- 第18層：暗褐色土層（ロームブロックと茶褐色粘質土ブロックを含む。しまり、粘性あり。）
- 第19層：明灰褐色土層（ロームブロックを若干含む。しまり、粘性あり。）

第74号住居跡(第41・42図、図版7・8)

E1区の北側に位置し、遺構上面を重複する第8号溝跡に切られ、第29号土坑を切っている。住居の西側コーナー部は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

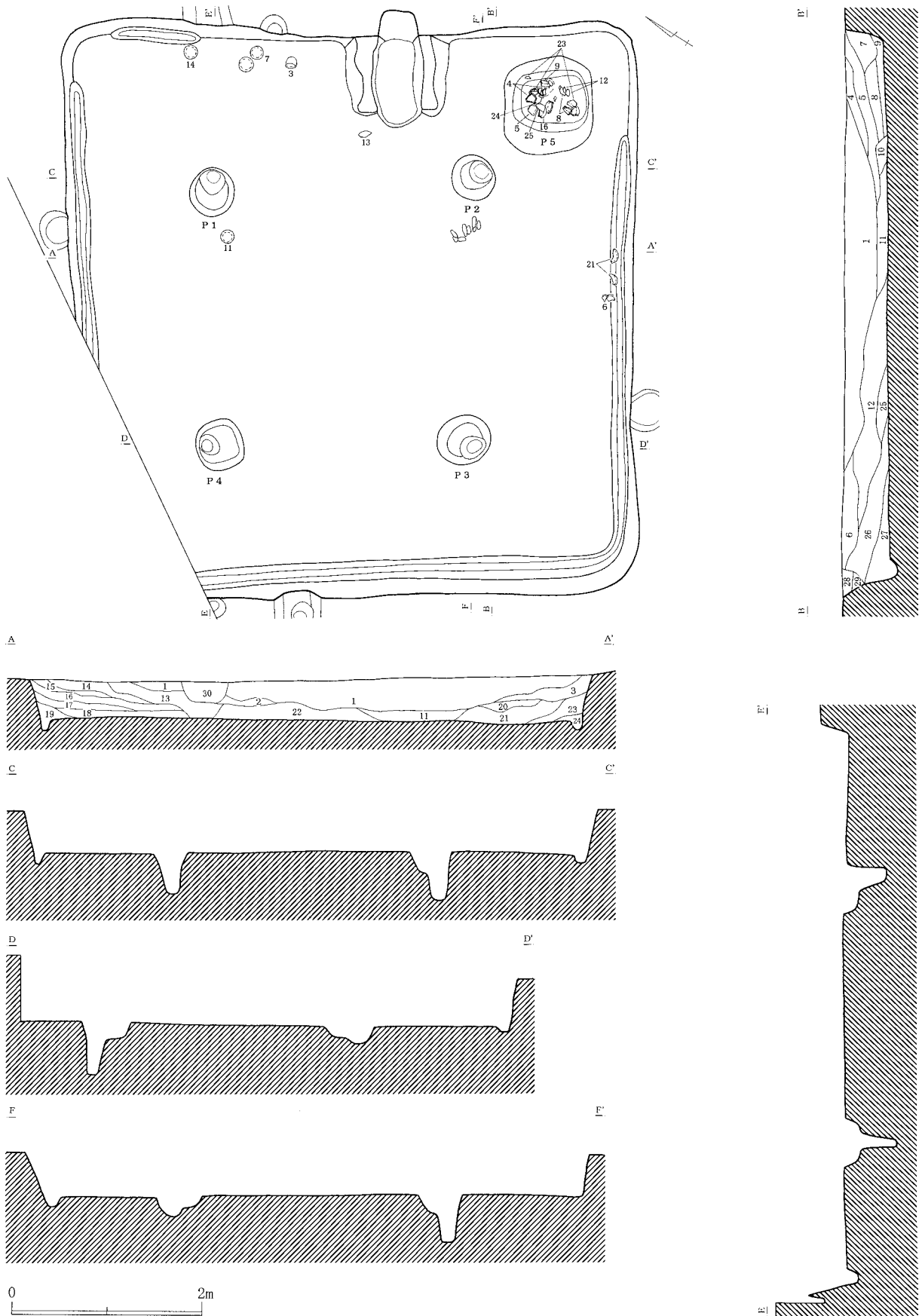
平面形は、コーナー部が丸みをもつ方形を呈している。規模は、北西～南東方向が6.06m、北東～南西方向が6.00mを測る。主軸方位は、N-59°-Eをとる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で53cmある。壁溝は、調査区内で検出された各壁下に見られるが、カマドが付設されている住居の北東側壁には、ごく一部しか見られない。上幅が15cm前後の比較的均一な形態で、床面からの深さは10cm前後ある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体的に平坦に作られている。ピットは、5箇所検出されている。P1～P4は、ほぼ住居の対角線上に位置しており、その配置から4本主柱を構成する支柱穴と考えられる。いずれも50cm前後の円形ぎみの形態を呈し、直径25cm程度の柱痕を伴う。床面からの深さは、P3が22cmと他に比べて極端に浅いほかは、いずれも50cm前後ある。P5は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居東側コーナー部に位置する。形態は、102cm×92cmのコーナー部の丸みが強い方形を呈し、床面からの深さは66cmある。壁は、上半は緩やかに傾斜し、下半は垂直ぎみに落ち込んでおり、底面は地山ローム層下の礫層に達している。P5内の底面付近からは、土師器の坏を主体とする土器が多く出土している。

カマドは、住居の北東側壁の中央やや南東側寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、残存長1.18m、最大幅1.07mを測る。燃焼部は、住居の壁をあまり掘り込まないで、ほぼ住居内にあり、内面は比較的良く焼けている。燃焼面(火床)は、住居の床面よりも若干低く、平坦である。支脚を据えていた痕跡は見られない。袖は、淡灰褐色粘土ブロックを住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されており、その痕跡は見られない。

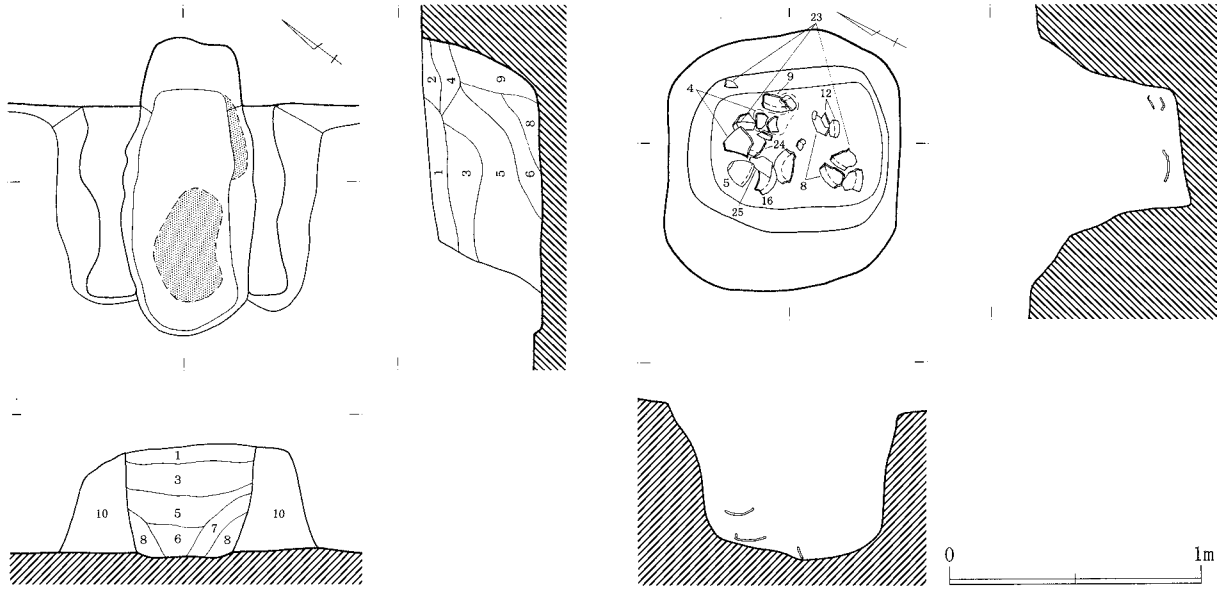
出土遺物は、P5の貯蔵穴内やカマド左側の北東側壁の壁際などから、坏などの完形に近い土器が比較的多く出土している。土器以外では、覆土中からNo27の土錘が1点出土しており、支柱穴P2の南西側の床面付近からは、長さ10cm程度の片岩を主体とする河床礫が8個体まとまって出土している。

第74号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径(21.6)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 1/4。H. 覆土中。
2	甕	A. 口縁部径(18.0)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 1/4。H. 覆土中。
3	小形甑 (転用)	A. 口縁部径13.0、器高13.0、底部径6.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一茶褐色、内一黒褐色。F. 完形。G. 底部穿孔は焼成後。H. 覆土中。
4	小形甕	A. 口縁部径11.4、器高11.6、底部径7.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一暗赤褐色、内一暗褐色。F. 4/5。G. 外面は二次焼成を受けて荒れている。H. P5(貯蔵穴)内。
5	小形鉢	A. 口縁部径11.2、器高8.5、底部径5.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面篋ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、小石。E. 外一淡茶褐色、内一茶褐色。F. 完形。G. 外面に黒斑あり。H. P5(貯蔵穴)内。
6	小形広口壺	A. 口縁部径(12.0)、器高(8.8)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡茶褐色、内一明茶褐色。F. 1/3。G. 外面に黒斑あり。体部内面に斑点状剥落顕著。H. 床面直上。



第41图 第74号住居跡



第42図 第74号住居跡カマド・貯蔵穴

第74号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、炭化粒子を極微量含む。最上部に一部黒色土がかぶさる。しまり、粘性ともに有する。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・炭化粒子を少量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロックを微量含む、黒褐色土を若干混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第4層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロック・炭化粒子を微量含む、ローム風化土を混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第5層：暗茶褐色土層（ローム粒子を少量、ロームブロック・炭化粒子・焼土粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第6層：明黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを少量含む、ローム風化土を混入する。しまり、粘性ともに有するが弱い。）
- 第7層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む、黒褐色土を斑点状に若干混入する。しまりを有するが、粘性は弱い。）
- 第8層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、炭化粒子・焼土粒子・ローム小ブロックを微量含む、ローム風化土を混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第9層：暗褐色土層（焼土粒子・焼土ブロック・ロームブロックを少量、炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともにやや強い。）
- 第10層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・炭化粒子を含み、ローム風化土を多量に混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第11層：明黒褐色土層（炭化粒子を多量に、ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第12層：暗黄褐色土層（ローム風化土を主体とし、ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。しまりを有するが、粘性はやや弱い。）
- 第13層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量に、炭化粒子を少量含む、ローム風化土を混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第14層：褐色土層（ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を極微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第15層：明褐色土層（褐色粘質土を主体とし、ローム粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。）
- 第16層：暗茶褐色土層（ローム粒子を少量、炭化粒子・ローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第17層：明黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第18層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量に、炭化粒子・焼土粒子を微量含む、ローム風化土を多量に混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第19層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含む。しまりはやや弱く、粘性を有する。）
- 第20層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを少量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第21層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを少量、炭化粒子を微量含む、ローム風化土を多量に混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第22層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第23層：明黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量、焼土粒子を極微量含む。しまりを有するが、粘性はやや弱い。）
- 第24層：暗褐色土層（ロームブロック・炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第25層：明褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む、ローム風化土を多量に混入する。しまり、粘性ともに有するがやや

弱い。)

第26層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを少量、炭化粒子を極微量含み、ローム風化土を混入する。しまり、粘性ともに有する。）

第27層：明黒褐色土層（ローム粒子を少量、ロームブロック・炭化粒子を微量含む。しまりはやや弱く、粘性を有する。）

第28層：暗褐色土層（ローム粒子を微量、ローム小ブロックを極微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第29層：暗茶褐色土層（ローム粒子を少量含み、ローム風化土を若干混入する。しまりを有するが、粘性はやや弱い。）

第30層：黒褐色土層（ローム小ブロックを微量含み、下層にローム風化土を若干混入する。しまり、粘性ともに有する。）

第74号住居跡カマド土層説明

第1層：明茶褐色土層（ローム粒子を均一、径3mmのローム小ブロックをやや少量、径5mmのロームブロックを少量、焼土粒子と炭化粒子を微量含む。しまりやや弱く、粘性はほとんどない。）

第2層：明褐色土層（粘土層。炭化粒子を極微量、ローム粒子を微量含む。しまりは非常に強いが、粘性はほとんどない。）

第3層：明茶褐色土層（ローム粒子を均一、径3mmのローム小ブロックをまばらに、径3mmの炭化物小ブロックを微量含む。）

第4層：褐色土層（粘土層。径3mmのローム小ブロックを均一、炭化粒子を少量含む。しまりはやや弱い、粘性はある。）

第5層：明褐色土層（ローム粒子を均一、径3～5mmの炭化物小ブロックをまばら、径5mmの焼土ブロック、径3mmの焼土小ブロックを極微量、焼土粒子をやや少量、白色粒子を少量含む。しまり、粘性ともやや弱い。）

第6層：灰褐色土層（ローム粒子と炭化粒子を少量、径3mmの炭化物小ブロックをまばらに含む。しまり、粘性ともにやや弱い。）

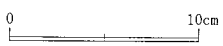
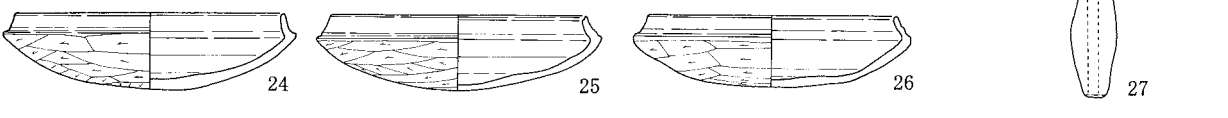
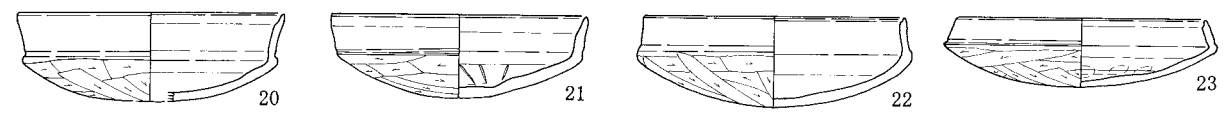
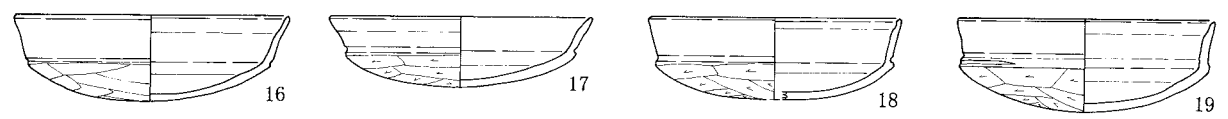
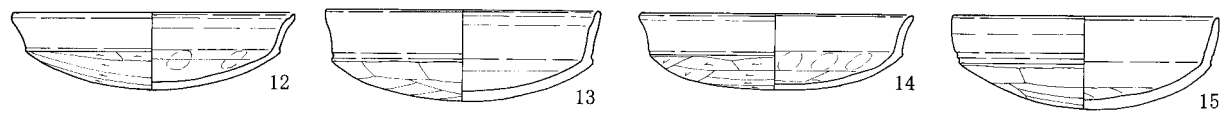
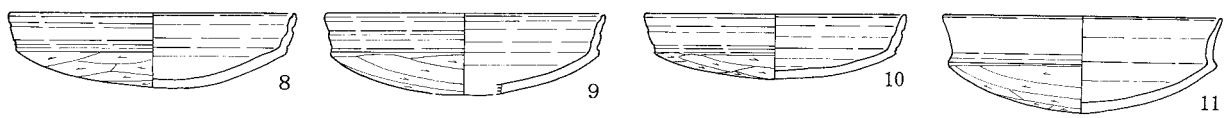
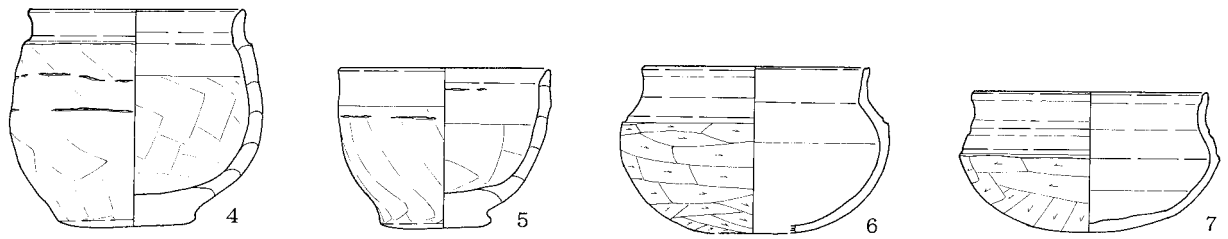
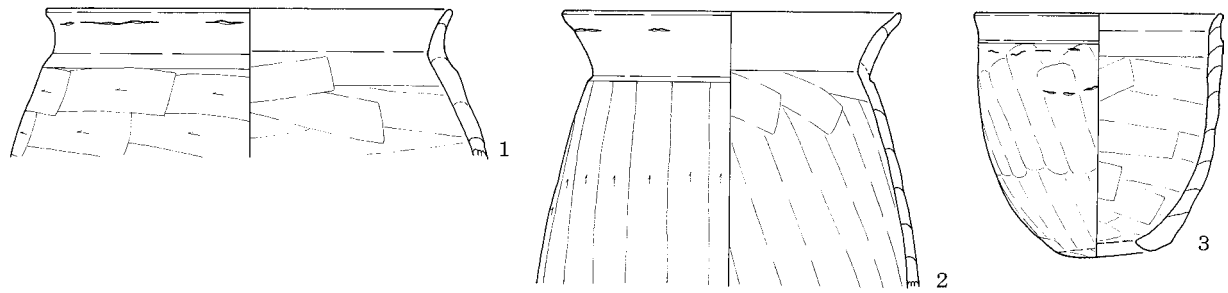
第7層：明褐色土層（径5cmの灰白色焼土ブロック、径5mmのロームブロック及び炭化粒子、径3mmの焼土小ブロックを少量含む。しまりやや弱く、粘性はほとんどない。）

第8層：明褐色土層（径1cmの焼土ブロック、径3mmのローム小ブロックを少量、焼土粒子を多量、炭化粒子を極微量含む。しまり、粘性ほとんどない。）

第9層：灰褐色土層（ローム粒子・径5mmのロームブロックを少量、炭化粒子を極微量含む。しまりは弱い、粘性はやや強い。）

第10層：淡灰褐色土層（淡灰褐色粘土ブロックを均一に、ロームブロックを少量含む。しまり、粘性ともやや強い。）

7	坏	A. 口縁部径 12.4、器高 7.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 完形。G. 外面に黒斑あり。口縁部内外面に煤付着。H. 床面付近。
8	坏	A. 口縁部径 15.2、器高 4.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 2/3。H. P5(貯蔵穴)内。
9	坏	A. 口縁部径 (14.9)、器高 4.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一黒褐色。F. 1/3。H. P5(貯蔵穴)内。
10	坏	A. 口縁部径 (13.9)、器高 3.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一黒褐色、内一暗茶褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
11	坏	A. 口縁部径 14.8、器高 5.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
12	坏	A. 口縁部径 14.8、器高 4.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 3/4。H. P5(貯蔵穴)内。
13	坏	A. 口縁部径 (14.6)、器高 4.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. 1/2。H. P5(貯蔵穴)内。
14	坏	A. 口縁部径 14.6、器高 4.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 完形。H. 覆土中。
15	坏	A. 口縁部径 (14.0)、器高 4.9。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
16	坏	A. 口縁部径 14.5、器高 4.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. ほぼ完形。H. P5(貯蔵穴)内。
17	坏	A. 口縁部径 (14.0)、器高 3.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
18	坏	A. 口縁部径 (13.4)、器高 4.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. 1/4。H. 覆土中。
19	坏	A. 口縁部径 (13.6)、器高 5.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一橙褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
20	坏	A. 口縁部径 (14.0)、器高 4.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
21	坏	A. 口縁部径 13.5、器高 4.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面窪ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 完形。H. 覆土中。
22	坏	A. 口縁部径 (13.9)、器高 4.9。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 1/3。H. 覆土中。



第43図 第74号住居跡出土遺物

23	坏	A. 口縁部径 (13.6)、器高 3.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 1/2。H. P5(貯蔵穴)内。
24	坏	A. 口縁部径 14.2、器高 4.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗褐色。F. 2/3。H. P5(貯蔵穴)内。
25	坏	A. 口縁部径 13.5、器高 4.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 完形。H. P5(貯蔵穴)内。
26	坏	A. 口縁部径 13.1、器高 3.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一暗茶褐色、内一黒褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
27	土 鉢	A. 残存長 4.9、最大幅 1.8。B. 手捏ね。C. 表面ナデ。D. 白色粒。E. 外一茶褐色。F. 上端部欠損。H. 覆土中。

第75号住居跡 (第44・45図、図版8)

E1区の中央付近に位置し、東側には第64号住居跡、北側には第74号住居跡、西側には第73号住居跡(中世の方形竪穴状遺構)が近接している。

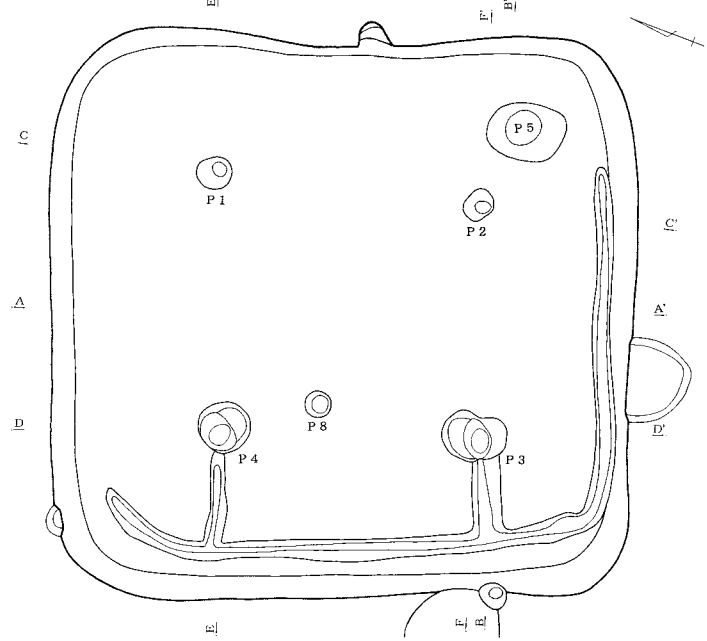
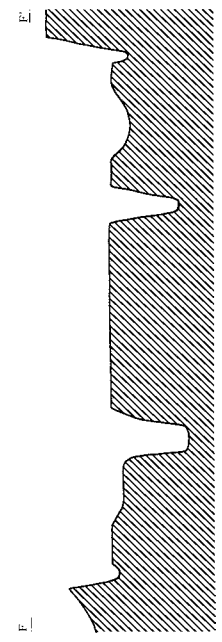
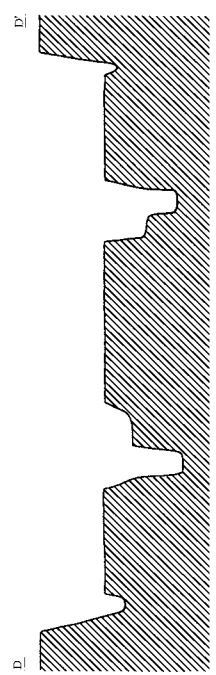
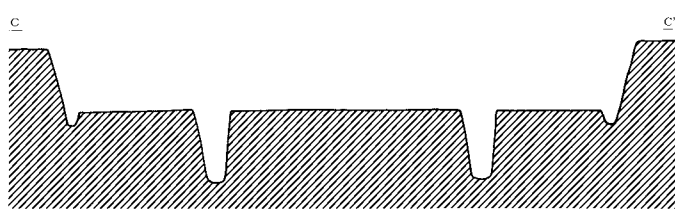
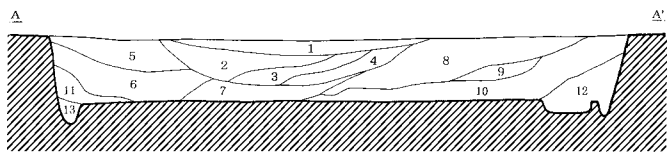
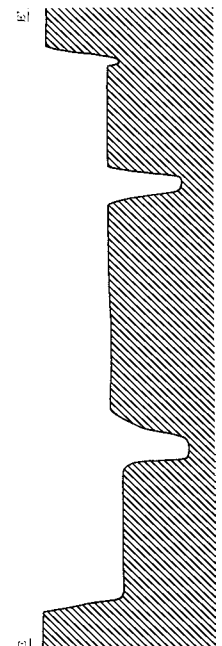
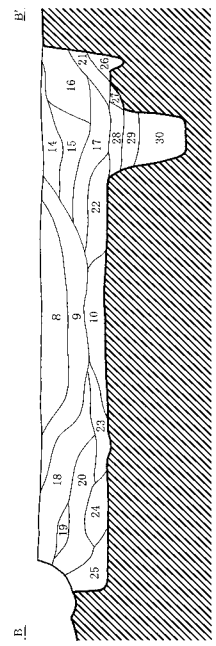
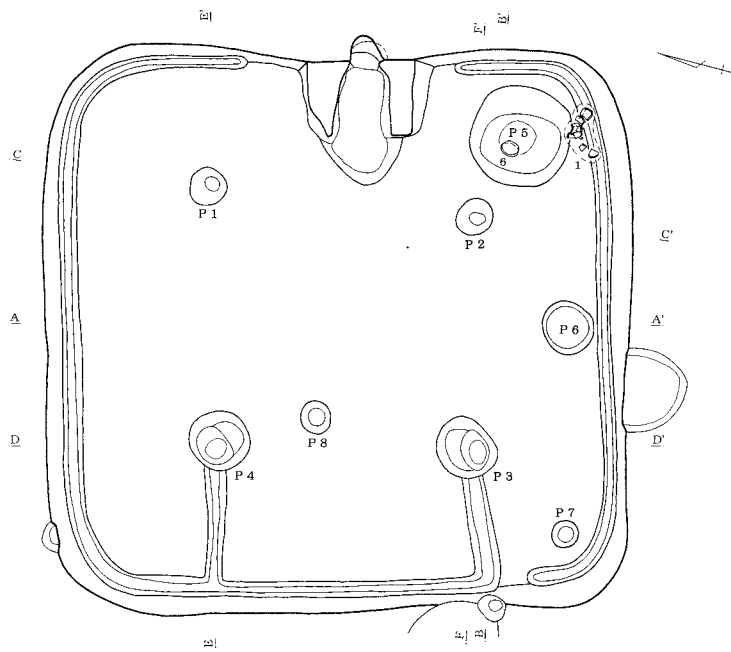
平面形は、コーナー部の丸みが強い方形を呈している。規模は、北東～南西方向4.54m、北西～南東方向4.70mを測る。主軸方位は、N-82°-Eをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で66cmある。壁溝は、各壁の壁下に見られ、カマドの両側と南西側壁の一部で途切れる他は、ほぼ全周する。上幅16cm、床面からの深さ10cm～16cmの比較的均一な形態で、住居の南西側壁下と支柱穴P3・P4との間には、壁溝と類似した形態の直線的な溝が、それぞれ間仕切り状に繋がっている。また、住居の南西側壁下の床下からは、内側に壁溝と同様の溝が検出されており、南西側壁が拡張されたことが解かる。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体的に平坦に作られている。ピットは、住居内より8箇所検出されている。P1～P4が4本支柱の支柱穴で、ほぼ住居の対角線上に配置されている。P1・P2は直径30cm程度の円形を呈し、P3・P4は直径40cm～50cmの円形を呈している。床面からの深さは、いずれも60cm前後ある。P5は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居東側コーナー部にある。平面形は、コーナー部の丸みが強い方形ぎみの形態で、規模は80cm×78cm、床面からの深さは62cmある。中からは、No1の鉢とNo6の完形の坏が出土している。P6は、南東側壁際の中央付近に位置する。直径40cmの円形を呈し、床面からの深さは8cmある。P7は、南側コーナー部に位置する。直径22cmの円形を呈し、床面からの深さは18cmある。P8は、支柱穴P3とP4の間に位置する。直径25cmの円形を呈し、床面からの深さは25cmある。

カマドは、住居北東側壁の中央付近に位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、残存長125cm、最大幅113cmを測る。燃焼部は、住居の壁を掘り込まないで住居内に位置する。燃焼面(火床)は、住居の床面よりも5cm程度低くほぼ平坦である。支脚を据えた痕跡は見られない。袖は、地山ローム土を掘り残して芯とし、その上に淡灰白色粘土ブロックを盛って構築している。煙道部は、すでに削平されており、その痕跡は見られない。

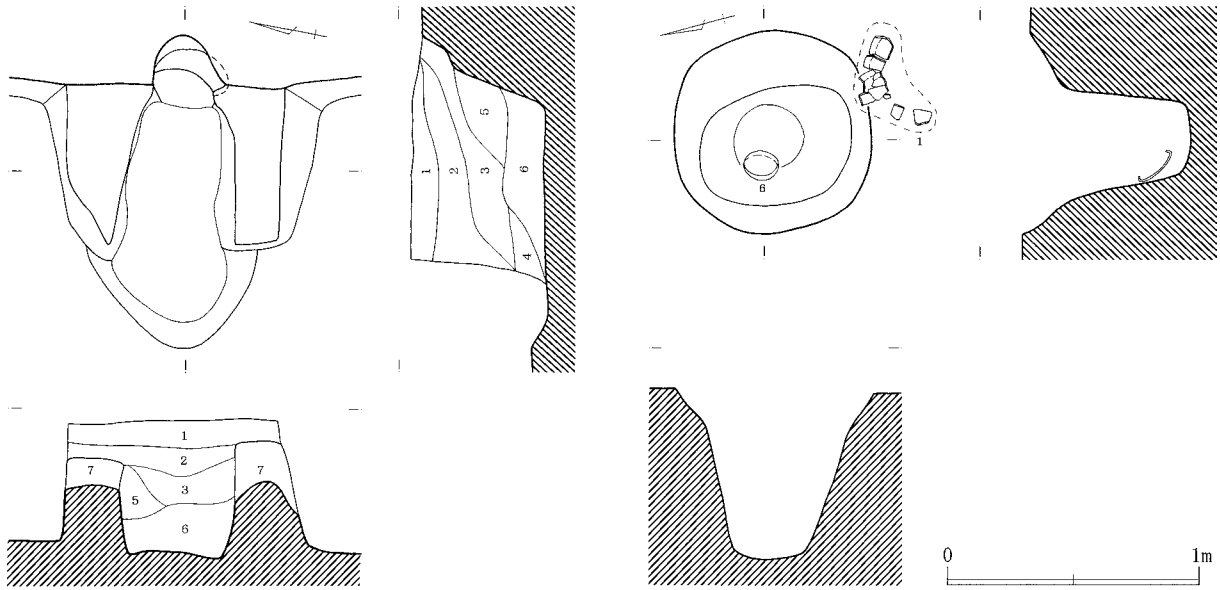
出土遺物は、貯蔵穴内や覆土中から古墳時代後期の土器が出土している。

第75号住居跡出土遺物観察表

1	鉢	A. 口縁部径 (17.8)、残存高 9.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。胴部外面ナデの後雑なケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒、小石。E. 外一茶褐色、内一黒褐色。F. 4/5。H. 貯蔵穴内。
2	小形甕	A. 口縁部径 (12.2)、残存高 12.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一暗橙褐色、内一明茶褐色。F. 1/4。G. 外面は二次焼成を受けて荒れている。H. 覆土中。



第44图 第75号住居跡



第45図 第75号住居跡カマド・貯蔵穴

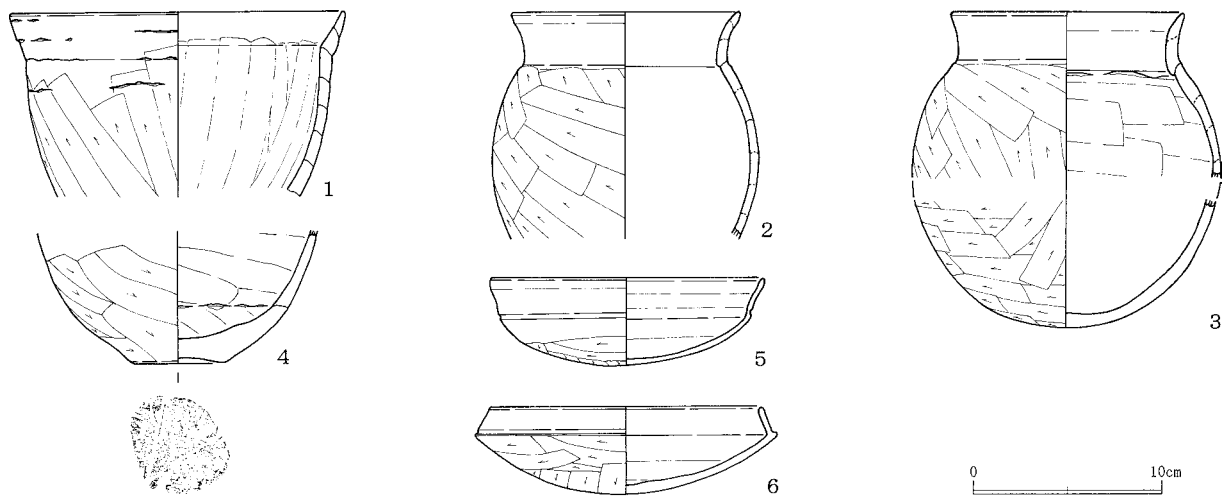
第75号住居跡土層説明

- 第1層：黒色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。しまり、粘性ともに有するが弱い。）
- 第2層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含み、ローム風化土を混入する。しまりを有するが、粘性は弱い。）
- 第3層：明黒褐色土層（ローム粒子を少量、ロームブロックを微量含み、ローム風化土を若干混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第4層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを少量含み、ローム風化土を多量に混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第5層：明黒褐色土層（ローム粒子を少量均一に、ロームブロック・小礫を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第6層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを少量含み、ローム風化土を少量、黒色土を斑点状に微量混入する。しまり強く、粘性を有する。）
- 第7層：明黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に、炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第8層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを少量、炭化粒子を微量含み、ローム風化土を若干混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第9層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含み、ローム風化土を混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第10層：暗黄褐色土層（ローム粒子と大型のロームブロックを多量に含み、ローム風化土を大目に混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第11層：黒褐色土層（ローム粒子を少量含み、ローム風化土を若干混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第12層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含み、黒色土を若干混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第13層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第14層：暗黄褐色土層（ローム粒子を少量、ロームブロックを微量含み、ローム風化土を若干混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第15層：暗黄褐色土層（ローム粒子と大型のロームブロックを含み、ローム風化土を若干混入する。しまりは弱く、粘性を有する。）
- 第16層：暗褐色土層（ローム粒子を少量含み、ローム風化土を微量混入する。しまりは有するが、粘性は弱い。）
- 第17層：明黒褐色土層（ロームブロックを少量、ローム粒子を微量含み、ローム風化土を若干混入する。しまり弱く、粘性を有する。）
- 第18層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを少量含み、ローム風化土を多量に混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第19層：黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量含む。しまりは有するが、粘性は弱い。）
- 第20層：暗黄褐色土層（ローム風化土が全体を占め、ロームブロックを少量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第21層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
- 第22層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロックを少量含み、ローム風化土を若干混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第23層：暗茶褐色土層（組成は第22層と類似するが、含有量が少なく、黒色土を斑点状に若干混入する。）
- 第24層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含み、ローム風化土を少量混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第25層：明黒褐色土層（ローム粒子を微量含み、ローム風化土を混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第26層：明黒褐色土層（ローム粒子を微量含み、ローム風化土をブロック状に混入する。しまり、粘性ともに有する。）
- 第27層：黒色土層（ローム粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

- 第28層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量に、炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）
 第29層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を少量含む。しまり、粘性ともに有する。）
 第30層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、焼土ブロックを微量含み、砂粒を若干混入する。しまり、粘性ともに有する。）

第75号住居跡カマド土層説明

- 第1層：明褐色土層（径1～2mmのローム粒子をやや多く含む。しまり、粘性あり。）
 第2層：明褐色土層（径1～10mm程度のローム粒子を若干含む。しまり、粘性あり。）
 第3層：明褐色土層（径1～10mm程度のローム・明灰色粘質土粒をやや多く含む。しまり、粘性あり。）
 第4層：明灰色粘質土層（明灰色粘質土と焼土を多量に含む。しまり、粘性あり。）
 第5層：明赤褐色粘質土層（焼土・粘質土ブロックを多量に含む。しまり、粘性あり。）
 第6層：黒褐色土層（径1～10mm程度の焼土粒子をやや多く含む。しまり、粘性あり。）
 第7層：淡灰白色土層（淡灰白色粘土ブロックを多量に含む。しまり、粘性あり。）



第46図 第75号住居跡出土遺物

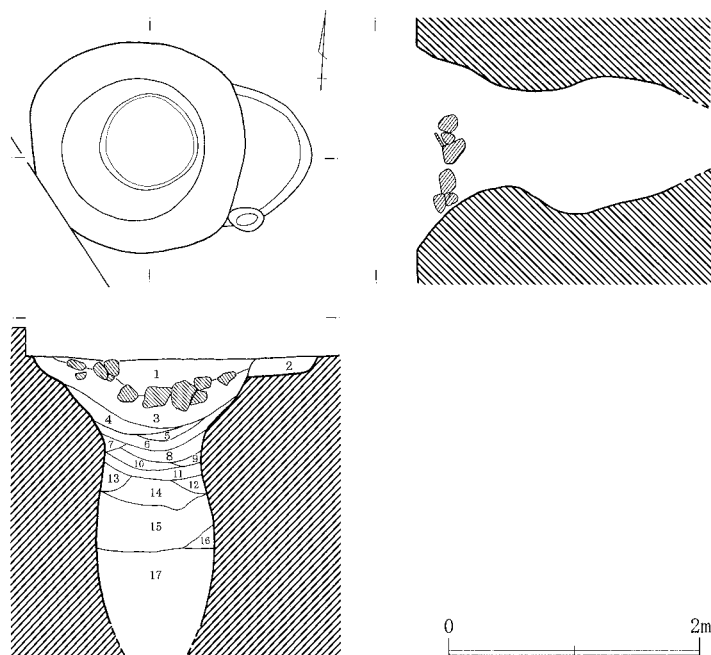
3	小形甕	A. 口縁部径 12.4、推定高 (16.8)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-暗橙褐色、内-明茶褐色。F. 1/2。G. 内外面は二次焼成を受けて荒れている。H. 覆土中。
4	鉢	A. 底部径 5.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ナデの後ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-暗茶褐色、内-淡茶褐色。F. 胴部下半のみ。G. 底部外面に木葉痕あり。H. カマド内。
5	坏	A. 口縁部径 14.6、器高 4.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒、小石。E. 外-淡茶褐色、内-明茶褐色。F. 4/5。H. 覆土中。
6	坏	A. 口縁部径 14.4、器高 4.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 完形。G. 体部内面上半に斑点状剥落顕著。H. 貯蔵穴内。

第2節 井戸跡

第1号井戸跡（第47図、図版8）

E1区の南西端に位置し、重複する第16号土坑を切っている。北側には中世の方形竪穴状遺構と考えられる第71～73号住居跡が近接している。井戸掘り方の平面形は、若干四方に角を持つような円形ぎみの形態である。規模は、南北方向1.62m、東西方向1.74mを測る。確認面からの深さは、2m以上ある。断面は、いわゆる漏斗状の形態で、上半は壁が緩やかに傾斜して落ち込み、中位から筒状に深くなるが、下半は壁がオーバーハングしている。掘り方内からは井筒施設の痕跡は見られなかったが、上半部分からは井戸に蓋をするように比較的大きな円礫が多数出土しており、あるいはそれらの礫を使用した石組みが地上部分に存在した可能性もある。

出土遺物は、比較的少量であるが、覆土中から在地産片口鉢や鉄器の破片などが少量出土している。



第47図 第1号井戸跡

第1号井戸跡土層説明

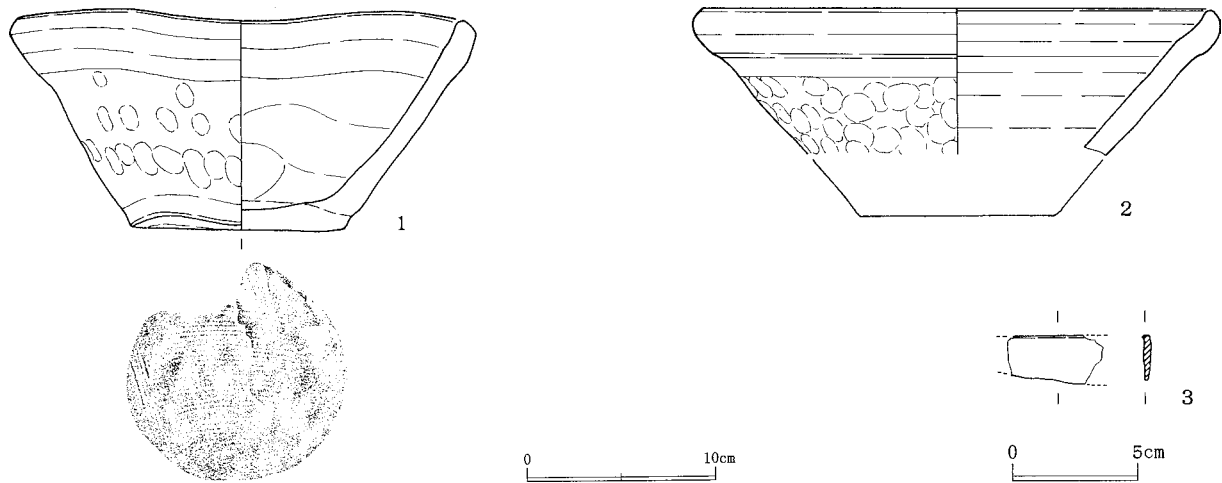
- 第1層：黒褐色土層（径1～5mm程度のローム粒子と径1～5cm程度の河床砂利を含む。しまり、粘性あり。）
 第2層：黒褐色土層（径1～3mm程度のローム粒子を多く含む。しまり、粘性あり。）
 第3層：黒褐色土層（径1～3mm程度のローム粒子を若干含む。しまり、粘性あり。）
 第4層：暗褐色土層（径1～30mm程度のローム粒子を若干、厚さ1～5mm程度のロームを板状に含む。しまり、粘性あり。）
 第5層：明褐色土層（径1～30mm程度のローム粒子を非常に多く含む。しまり、粘性あり。）
 第6層：暗褐色土層（第5層に類似するが、ロームの含有量が少ない。しまり、粘性あり。）
 第7層：暗褐色土層（径1～5mm程度のローム粒子を若干含む。しまり、粘性あり。）
 第8層：明褐色土層（径3～10cm程度のロームブロックを非常に多く含む。しまり、粘性強い。）
 第9層：黒褐色土層（径1～3mm程度のローム粒子を若干含む。しまり、粘性あり。）
 第10層：黒褐色土層（きめの細かいやや硬質の層

であり、下層に厚さ5mm程度のローム層をはさむ。しまり、粘性強い。）

- 第11層：黒褐色土層（径1～3mm程度のローム粒子を含む。しまり、粘性強い。）
 第12層：黒褐色土層（径1～20mm程度のローム粒子を若干含む。しまり、粘性強い。）
 第13層：黒褐色土層（径1～5mm程度のローム粒子をやや多く含む。しまり、粘性強い。）
 第14層：黒褐色砂礫層（径3cm程度の砂利が主体である。しまり、粘性弱い。）
 第15層：黒褐色土層（径1～5cm程度のロームブロックを多量に含む。しまり、粘性強い。）
 第16層：明褐色土層（ロームブロック主体の層。しまり、粘性強い。）
 第17層：黒褐色砂礫層（径3cm程度の砂利が主体である。しまり、粘性弱い。）

第1号井戸跡出土遺物観察表

1	在地産片口鉢	A. 口縁部径(24.8)、器高11.6、底部径11.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。底部外面静止糸切り。D. 白色粒。E. 内外一暗灰色、肉一暗茶褐色。F. 1/2。G. 器形は焼き歪みによりかなり歪んでいる。H. 覆土中。
2	在地産片口鉢	A. 口縁部径(28.0)、残存高7.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面指頭圧痕顕著、内面回転ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡灰色、肉一淡灰褐色。F. 2/3。G. 内面は良く摺れている。H. 覆土中。
3	鉄器	A. 残存長(3.8)、幅2.0、厚さ2mm。D. 鉄製。F. 破片。G. 刀子の破片か？H. 覆土中。



第48図 第1号井戸跡出土遺物

第3節 土 坑

第15号土坑 (第50図)

E 6 区の北西側に位置し、南東側には第61号住居跡が近接している。遺構の南西側半分は調査区外にあるため、本土坑の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、やや不整ぎみの円形か楕円形を呈するものと思われる。規模は、北西～南東方向80cm、北東～南西方向は34cmまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で10cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

第16号土坑 (第50図)

E 1 区の南西端に位置し、重複する第1号井戸跡に切られている。平面形は、遺構の残存する部分から推測すると、円形か楕円形を呈していたものと思われる。規模は、南北方向1.06m、東西方向は72cmまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で15cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

第17号土坑 (第50図、図版9)

E 2 区の中央付近に位置する。遺構の南西側は調査区外にあるため、本土坑の全容は不明である。平面形は、遺構の残存する部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い長方形ぎみの形態を呈していたものと思われる。規模は、南北方向1.04m、東西方向は2.50mまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で27cmある。底面は、広くやや丸みをもっている。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。本土坑の時期は、覆土中に浅間山系A軽石を含んでいることから、近世後半以降の所産と考えられる。

第18号土坑 (第50図)

E 2 区の中央付近に位置する。遺構の南西側半分は調査区外にあるため、本土坑の全容は不明であ

る。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、円形か楕円形を呈するものと思われる。規模は、北西～南東方向は80cmまで、北東～南西方向は24cmまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で8cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土師器甕の破片と須恵器甕の破片が1片ずつ出土しただけである。本土坑の時期は、覆土中に浅間山系A軽石を均一に含んでいることから、近世後半以降の所産と考えられる。

第19号土坑（第50図、図版9）

E1区の南西側に位置する。平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形か楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向52cm、東西方向98cmを測る。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で24cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

第20号土坑（第50図、図版9）

E2区の中央付近に位置し、重複する第5号溝跡に切られている。遺構の大半は調査区外にあるため、本土坑の全容は不明である。平面形は、遺構の残存する部分から推測すると、円形か楕円形ぎみの形態を呈していたものと思われる。規模は、北東～南西方向は12cmまで、北西～南東方向は1.20mまで測れる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で34cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期と奈良・平安時代の土器片が少量出土しただけである。本土坑の時期は、覆土中に浅間山系A軽石を含んでいることから、近世後半以降の所産と考えられる。

第21号土坑（第50図、図版9）

E8区の北端に位置する。平面形は、比較的整った円形を呈している。規模は、北東～南西方向1.52m、北西～南東方向1.44mを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で19cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

第22号土坑（第50図、図版9）

E1区の中央やや西側寄りに位置する。東側には古墳時代後期の第75号住居跡が、西側には中世の方形竪穴状遺構である第73号住居跡が近接している。平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向1.50m、東西方向88cmを測る。土坑の長軸方位は、N-75°-Eをとる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で15cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

第23号土坑（第50図）

E1区の西側に位置し、中世の方形竪穴状遺構である第72・73号住居跡が近接している。平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形ぎみの形態を呈している。規模は、東西方向58cm、南西方向70cmを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で30cmある。底面は、広くやや丸みをもつ。遺物は、何も出土しなかった。

第24号土坑（第50図、図版9）

E1区の中央やや南側寄りに位置する。平面形は、比較的整った円形を呈している。規模は、北東～南西方向94cm、北西～南東方向91cmを測る。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で26cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、古墳時代後期と平安時代頃の土器片が少量出土しただけである。

第25号土坑（第50図）

E1区の中央やや南側寄りに位置し、重複する第26号土坑を切っている。平面形は、やや不整の楕円形を呈している。規模は、南北方向80cm、東西方向62cmを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で10cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から土器片が1片出土しただけである。

第26号土坑（第50図）

E1区の中央やや南側寄りに位置し、重複する第25号土坑に切られている。平面形は、不整形を呈している。規模は、南北方向85cm、東西方向55cmを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で7cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から土器片が1片出土しただけである。

第27号土坑（第50図、図版9）

E1区の中央やや東側寄りに位置する。平面形は、不整形を呈している。規模は、南北方向92cm、東西方向1.03mを測る。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で22cmある。底面は、広く平坦で、南西側に深さ12cmの小ピットを伴う。遺物は、何も出土しなかった。本土坑の時期は、覆土中に浅間山系A軽石を含んでいることから、近世後半以降の所産と考えられる。

第28号土坑（第50図、図版9）

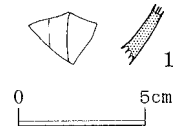
E1区の東端付近に位置する。平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ隅丸長方形を呈している。規模は、北東～南西方向90cm、北西～南東方向50cmを測る。土坑の長軸方位は、N—35°—Eをとる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で20cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。

第29号土坑（第50図、図版10）

E1区の北側寄りに位置し、重複する第74号住居跡に切られている。平面形は、楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、北東～南西方向51cm、北西～南東方向70cmを測る。土坑の長軸方位は、N—30°—Wをとる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で14cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

第30号土坑（第50図、図版10）

E 1 区の北東端に位置する。遺構の北東側半分は調査区外のため、本土坑の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ長方形を呈するものと思われる。規模は、北西～南東方向1.84m、北東～南西方向は60cmまで測れる。土坑の長軸方位は、N-55°-Wをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で70cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期～平安時代の土師器や須恵器の破片が少量と、龍泉窯系の鎬蓮弁文青磁碗の破片(第49図No 1)が1片出土しただけである。



第49図 第30号土坑
出土遺物

第30号土坑出土遺物観察表

1	龍泉窯系青磁碗	B. ロクロ成形。C. 内外面ナデの後施釉。外面鎬蓮弁文。D. 白色粒。E. 内外-淡緑灰色、肉-淡灰色。F. 破片。H. 覆土中。
---	---------	--

第31号土坑（第50図、図版10）

E 1 区の南西側に位置する。平面形は、コーナー部が丸みをもつ長方形を呈している。規模は、北東～南西方向1.10m、北西～南東方向は63cmを測る。土坑の長軸方位は、N-34°-Eをとる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で24cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

第32号土坑（第50図、図版10）

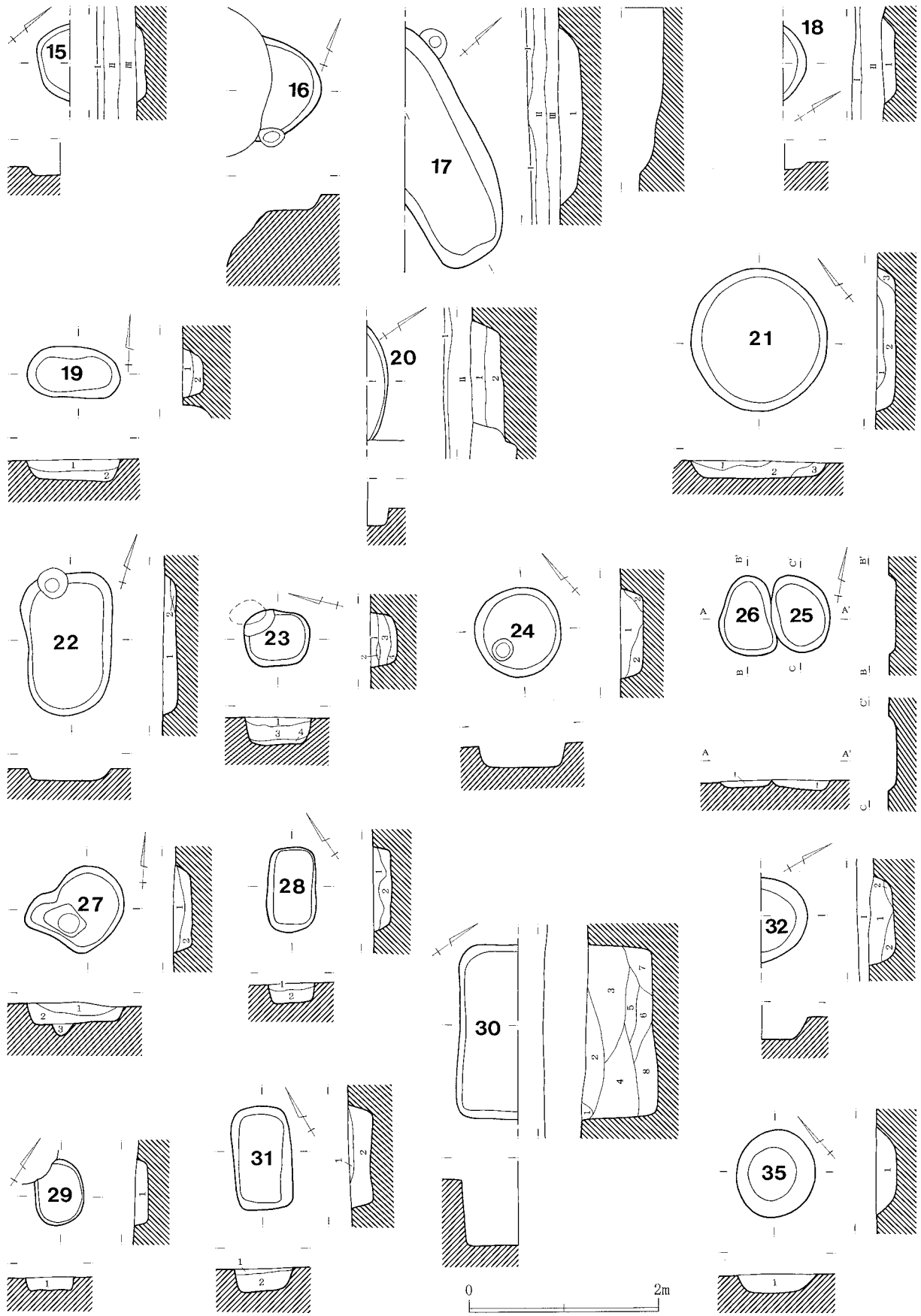
E 1 区の南西端に位置する。遺構の南西側半分は調査区外のため、本土坑の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、円形か楕円形ぎみの形態を呈するものと思われる。規模は、北西～南東方向90cm、北東～南西方向は50cmまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で24cmある。底面は、広く平坦であるが、やや傾斜している。遺物は、何も出土しなかった。本土坑の時期は、覆土中に浅間山系A軽石を含んでいることから、近世後半以降の所産と考えられる。

第33号土坑（第51図、図版10）

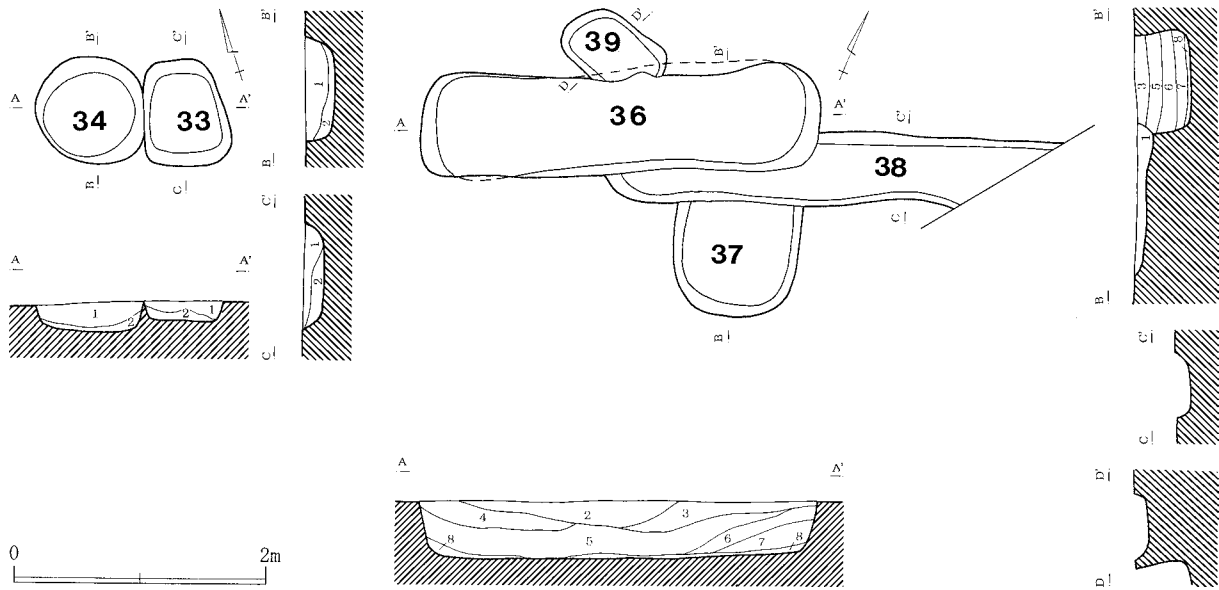
E 1 区の南側に位置し、第34号土坑と隣接している。平面形は、やや不整で台形のような形態の四角形を呈している。規模は、南北方向85cm、東西方向66cmを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で16cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が数片出土しただけである。

第34号土坑（第51図、図版10）

E 1 区の南側に位置し、第33号土坑と隣接している。平面形は、円形を呈している。規模は、北西～南東方向86cm、北東～南西方向85cmを測る。壁は、やや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で24cmある。底面は、広く平坦であるが、やや丸みをもつ。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が数片出土しただけである。



第50图 土坑(1)



第51図 土坑(2)

第17号土坑土層説明

第1層：茶褐色土層（径5mmの褐色小ブロックを均一、白色粒子をまばらに、径3～5mmのロームブロック・礫片を少量、As-Aをごく少量含む。しまり、粘性ともやや弱い。）

第18号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（As-Aを均一、径5mmの褐色ブロックをまばらに、径3mmの焼土小ブロック・焼土粒子をごく微量含む。しまりは有するが、粘性は弱い。）

第19号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。少々軟らかく、しまり、粘性ともに有する。）

第2層：明黒褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロックを微量、炭化粒子を極微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第20号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（As-Aを少量、径5mmのローム小ブロックを均一、褐色粒子をやや多く含む。しまりは有するが、粘性は弱い。）

第2層：暗灰褐色土層（ローム粒子を多量、径1cmのロームブロックを均一、径3mmのローム小ブロックをやや多く、炭化粒子を微量含む。しまり弱く、粘性なし。）

第21号土坑土層説明

第1層：黒褐色土層（径1～3mm程度のローム粒子を多く含む。しまり、粘性若干あり。）

第2層：黒褐色土層（径1mm程度のローム粒子を若干含む。しまり、粘性若干あり。）

第3層：黒褐色土層（径1mm以下のローム粒子をやや多く含む。しまり、粘性若干あり。）

第22号土坑土層説明

第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量に、炭化粒子を微量含み、黒色土を混入する。しまり、粘性ともに有するが弱い。）

第2層：暗黄褐色土層（ローム風化土を主体とし、ローム粒子を若干含む。しまり、粘性ともに有するが弱い。）

第23号土坑土層説明

第1層：黒褐色土層（ローム粒子を少量含み、ローム風化土を若干混入する。しまりを有するが、粘性は弱い。）

第2層：黄褐色土層（ロームのブロックを主体とする。しまり、粘性ともに有する。）

第3層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有するがやや弱い。）

第4層：明黒褐色土層（ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含む。しまり弱く、粘性を有する。）

第24号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロックを少量均一に含む。しまり、粘性ともに有する。）

第2層：明黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを少量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第25・26号土坑土層説明

第1層：明黒褐色土層（ローム粒子を微量、炭化粒子を極微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第27号土坑土層説明

第1層：明黒褐色土層（ローム粒子・As-Aを少量、炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロックを少量、As-Aを微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第3層：茶褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロックを少量、炭化粒子を微量含む。しまりはやや弱く、粘性を有する。）

第28号土坑土層説明

第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロックを少量、炭化粒子を極微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第29号土坑土層説明

第1層：黒褐色土層（径1mm程度のローム粒子、肌色粒子を多く含む。しまり、粘性あり。）

第30号土坑土層説明

第1層：茶褐色土層（基本層の崩壊土。）

第2層：明黒褐色土層

第3層：暗黄褐色土層

第4層：暗黄褐色土層

第5層：暗黄褐色土層

第6層：暗黄褐色土層

第7層：暗黄褐色土層

第8層：明黒褐色土層

第31号土坑土層説明

第1層：明黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロックを多量に、炭化粒子を極微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第32号土坑土層説明

第1層：黒褐色土層（ローム粒子・As-A・ロームブロックを微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第2層：黒色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第33号土坑土層説明

第1層：明褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロックを多量に含む。しまり、粘性ともに有する。）

第2層：黄褐色土層（ローム風化土主体の層。黒色土を若干混入する。しまり、粘性ともに有するが弱い。）

第34号土坑土層説明

第1層：明黒褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロックを均一に、炭化粒子を微量含む。しまりを有するが、粘性はやや弱い。）

第2層：黒褐色土層（ローム粒子・ローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第35号土坑土層説明

第1層：明黒褐色土層（ローム粒子を少量、ロームブロックを微量含み、ローム風化土を少量混入する。しまり、粘性ともに有する。）

第36・37号土坑土層説明

〈第37号土坑〉

第1層：黒色土層（ローム粒子・ローム小ブロックを微量含む。しまりを有するが、粘性は弱い。）

〈第36号土坑〉

第2層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量に、炭化粒子を少量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第3層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロック主体の層で、黒褐色土を斑点状に若干混入する。しまり、粘性ともに有する。）

第4層：暗黄褐色土層（ロームブロックを主体とし、ローム粒子を多量に含み、黒色土を帯状に混入する。しまり、粘性ともに有する。）

第5層：明黒褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロックを少量、炭化粒子を微量含む。しまり、粘性ともに有する。）

第6層：黄褐色土層（ロームブロック主体の層。炭化粒子を微量含む、黒色土を斑状に混入する。しまりを有するが、粘性は弱い。）

第7層：明黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。しまり、粘性ともに有するが弱い。）

第8層：黒色土層（ローム粒子を極微量含む他は含有物はない。しまりを有するが、粘性はない。）

第35号土坑（第50図、図版10）

E1区の南端に位置する。平面形は、円形を呈している。規模は、北東～南西方向92cm、北西～南東方向83cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で20cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。

第36号土坑（第51図、図版10）

E1区の南側に位置し、重複する第38・39号土坑を切り、第37号土坑に切られている。平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸長方形を呈している。規模は、北東～南西方向3.15m、北西～南東方向86cmを測る。土坑の長軸方位は、N-65°-Eをとる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で44cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が数片出土しただけである。

第37号土坑（第51図、図版10）

E1区の南東端に位置し、重複する第36・38号土坑を切っている。平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形を呈している。規模は、北東～南西方向1.00m、北西～南東方向1.22mを測る。土坑の長軸方位は、N-17°-Wをとる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で6cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が数片出土しただけである。

第38号土坑（第51図、図版10）

E1区の南東端に位置し、重複する第36・37号土坑に切られている。平面形は、コーナー部の丸みが強く細長い隅丸長方形を呈している。規模は、南北方向54cm、東西方向は3.40mまで測れる。土坑の長軸方位は、N-68°-Eをとる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で9cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が1片出土しただけである。

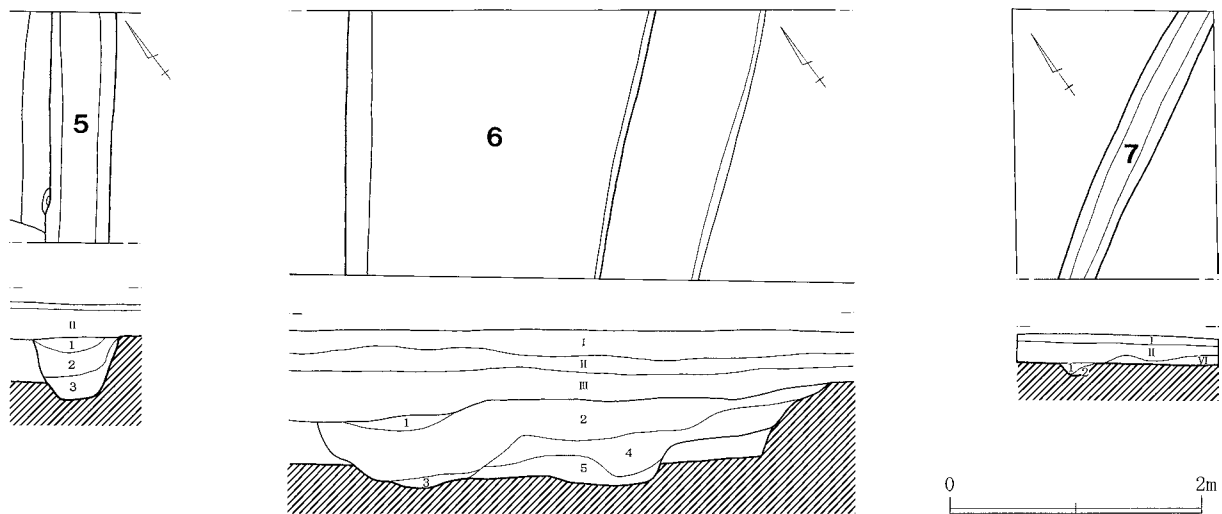
第39号土坑（第51図、図版10）

E1区の南東側に位置し、重複する第36号土坑に切られている。平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は、東西方向77cm、南北方向51cmを測る。土坑の長軸方位は、N-105°-Eをとる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で10cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土器片が数片出土しただけである。

第4節 溝 跡

第5号溝跡（第52図）

E 2 区の中央付近に位置し、重複する第20号土坑を切っている。調査区内では南西から北東方向に向いて直線的な流路をとっており、E 2 区の北東側約 3 m に位置する D 地点でも、本溝跡の延長部分が検出されている。規模は、溝の上幅が 50cm～70cm 程度、下幅が 30cm 程度の比較的均一な幅である。断面の形態は、逆台形の箱堀に近く、壁は直線的に傾斜し、確認面からの深さは 50cm ある。底面は、平坦である。遺物は、何も出土しなかった。本溝跡の時期は、覆土中に浅間山系 A 軽石を含むことから、近世後半以降と考えられる。



第52図 第5・6・7号溝跡

第5号溝土層説明

- 第1層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子・径3mmの灰褐色小ブロックを少量含む。しまり、粘性ともに強い。）
第2層：褐色土層（ローム粒子をまばらに、白色粒子を均一、径3mmのローム小ブロックをやや多く、As-Aを含む。しまり、粘性ともに弱い。）
第3層：黒褐色土層（白色粒子を均一、ローム粒子をまばらに、炭化粒子・褐色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。）

第6号溝土層説明

- 第1層：暗褐色土層（白色粒子を均一、径3mmの灰褐色小ブロックを多く、径3mmのローム小ブロック、焼土粒子、径3mmの焼土小ブロック、小石を極微量含む。しまり、粘性ともに強い。）
第2層：暗灰褐色土層（白色粒子を均一、ローム粒子をまばら、径3mmのローム小ブロック、径5mmのロームブロック、径3mmの灰褐色小ブロック、小石を少量含む。しまり、粘性ともに強い。）
第3層：暗灰褐色土層（褐色土を多く、白色粒子を均一、ローム粒子を少量、炭化粒子を微量、小石を極微量含む。しまり、粘性ともに強い。）
第4層：灰褐色土層（径2cmの黒灰色土ブロックを均一、白色粒子・砂粒をまばらに、マンガン粒子をやや多く、焼土粒子を微量含む。しまり、粘性ともに強い。）
第5層：灰褐色砂層（灰褐色土粒子、径3mmのローム小ブロック、砂礫を少量、径3mmの黒灰色小ブロックを極微量含む。しまりはあるが、粘性は弱い。）

第7号溝土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム風化土を若干含む。しまり、粘性若干あり。）
第2層：暗黄褐色土層（ローム風化土を多く含む。しまり、粘性若干あり。）

第6号溝跡（第52図、図版10）

E 3 区の中央やや南東側寄りに位置し、重複する第68号住居跡を切っている。調査区内では、南西から北東方向に向いた流路をとっている。規模は、溝の上幅が2.03m～2.44m、下幅が1.80m2.20mと比較的規模の大きな溝であるが、土層断面や底面の形状から見ると、おそらく3回の掘り返しによる結果であり、単一時期ではもっと規模の小さな溝であったようである。壁は、各時期とも緩やかに立ち上がるようであり、確認面からの深さは最高で86cmある。底面は、掘削当初は広く平坦であったようであるが、最終的な溝(第1～3層)はやや丸みをもっていたようである。遺物は、何も出土しなかった。

第7号溝跡（第52図）

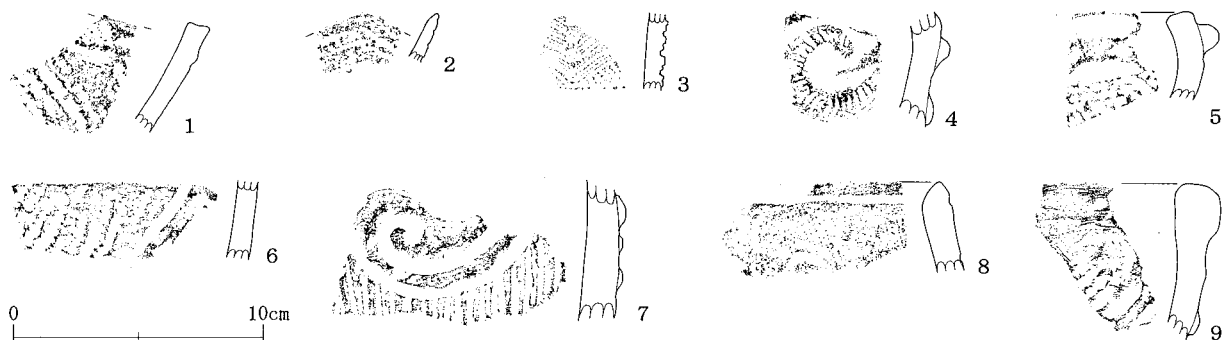
E 10 区に位置する。調査区内では、南西から北東方向に向いて直線的な流路をとっている。形態は、溝の上幅が28cm～36cm、下幅が11cm～16cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは最高で10cmある。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

第8号溝跡

E 1 区とE 8 区の北端に位置し、重複する第74号住居跡を切っている。調査区内では、南西から北東方向に向いてやや蛇行ぎみの流路をとっている。形態は、溝の上幅が50cm、下幅が27cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは20cmある。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

第5節 その他の遺物

E 地点の調査では、遺構が検出された古墳時代と中世の遺物以外に、調査区内から縄文時代の前期と中期の土器片が少量出土している(第53図、図版21)。前期の土器片は、有尾式(No 1・2)と諸磯 a 式(No 3)があり、本遺跡が立地する女堀川中流域の本庄台地東縁部ではあまり出土例がなく、比較的珍しい時期のものである。中期の土器片は、勝坂式から加曾利 E III 式頃(No 4～9)までのもので、中期後半の大集落で本遺跡の北側に隣接する古井戸遺跡・将監塚遺跡や南側に隣接する新宮遺跡と関連するものであろう。



第53図 E 地点出土の縄文土器

E地点出土縄文土器観察表

1	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 口唇部内外面ナデ。外面の文様は単節縄文(RL)。内面ナデ。D. 白色粒、繊維。E. 外-黄褐色、内-淡茶褐色、肉-黒褐色。F. 破片。G. 前期有尾式系。H. 表採。
2	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 口唇部内外面ナデ。外面の文様は竹管状工具による平行沈線文を施し、沈線文内には同一工具による連続爪形文を充填している。D. 白色粒、繊維。E. 内外肉-黒褐色。F. 破片。G. 前期有尾式系。H. 表採。
3	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外面の文様は地文にRLの単節縄文を施し、その上に竹管状工具による連続爪形文を充填した平行沈線文の横位区画を施し、縦列に配した円形押印文の間を、肋骨文によって繋いでいる。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 破片。G. 前期諸磯a式。H. 表採。
4	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外面の文様は連続爪形文を施した貼り付け隆帯による渦巻き文を施す。D. 黒色粒、白色粒。E. 外-茶褐色、内-黒褐色。F. 破片。G. 中期勝坂式。H. 第70号住居跡覆土中。
5	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外面の文様は貼り付け隆帯による区画文の中に縄文を施す。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 破片。G. 中期加曽利EⅠ式。H. 表採。
6	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外面の文様は単節縄文(LR)の地文の上に、篋描2本線による連弧文風の沈線文を施す。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外-暗褐色。F. 破片。G. 中期連弧文系。H. 表採。
7	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外面の文様は貼り付け隆帯による渦巻き文とその外側の地文に竹管状工具による太い平行条線を施す。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外-暗黄褐色、内-淡灰褐色。F. 破片。G. 中期唐草文系。H. 第74号住居跡覆土中。
8	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外面の文様は地文の櫛歯状工具による細い平行条線の上に篋描沈線文を施す。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-淡黄褐色。F. 破片。G. 中期加曽利EⅢ式。H. 第64号住居跡覆土中。
9	深鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 外面の文様は貼り付け隆帯による区画文の中に単節縄文(LR)を施す。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-暗茶褐色、内-淡茶褐色。F. 破片。G. 中期加曽利EⅢ式。H. 第74号住居跡覆土中。

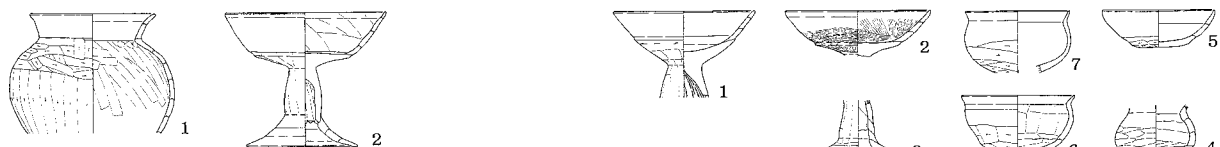


第V章 ま と め

第1節 E地点出土の古墳時代土器の時期区分と様相

本報告のE地点から出土した古墳時代の土器は、中期の5世紀前半から後期の7世紀前半にわたるもので、概ね中期が第Ⅰ期と第Ⅱ期の2時期、後期が第Ⅲ期～第Ⅴ期の3時期に分けられる。このE地点から出土した古墳時代の土器では、第Ⅰ期と第Ⅱ期の間、第Ⅱ期と第Ⅲ期の間、及び第Ⅲ期と第Ⅳ期の間にそれぞれ時間的な断絶期間が認められるが、このE地点出土土器に見られる時間的な様相と本遺跡の古墳時代集落の経営期間との関係は、集落全体からすると未だ調査面積が狭いため、明確ではない。ちなみに、先に報告したE地点の南西側に隣接するF地点(恋河内2008)の第77号住居跡や第79号住居跡の出土土器などは、E地点のこの第Ⅲ期から第Ⅳ期への漸移的变化の段階として、おそらくこの間に位置付けられるものであろう。

<第Ⅰ期> 第61号住居跡出土土器が該当する(第54図)。出土量は非常に少ないが、器種は甕と高坏が見られる。甕(No1)は、頸部が「く」の字に外反し、胴部が球形に強く張る前期の甕と類似した形態のもので、あるいは台が付く可能性もある。胴部外面の調整は、ケズリのままである。高坏(No2)は、中期の一般的な柱状高坏の脚部の形態とはやや異なる脚部の中位がやや張った形態のもので、脚端部の屈曲位置が高く古い特徴を残すものである。類似した脚部の形態を持つ高坏は、本庄市(旧児玉町)後張遺跡第136号住居跡(立石他1982)や第203号住居跡(恋河内2005)などに見られるが、当地方では客体的な存在である。この第61号住居跡出土土器は、いずれも器形の一部に前期的な古い特徴を残すもので、おそらく当地域の住居にカマドが出現する以前にあたる中期(5世紀)前半でも比較的古い段階のものと考えられる。

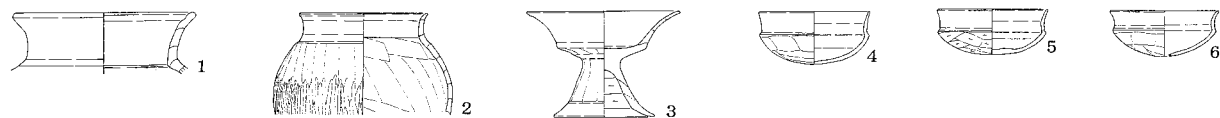


第61号住居跡

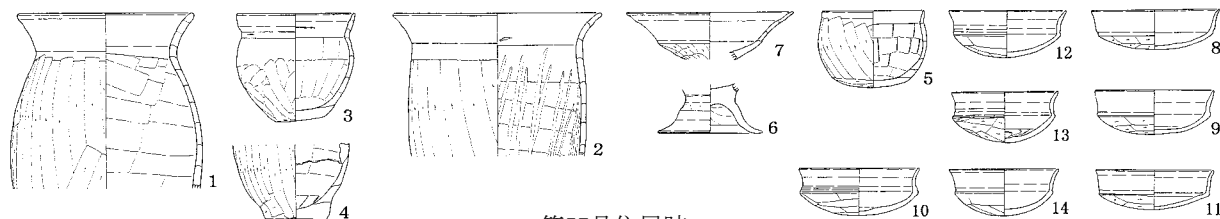
第58号住居跡

第54図 第Ⅰ期の土器

第55図 第Ⅱ期の土器



第60号住居跡



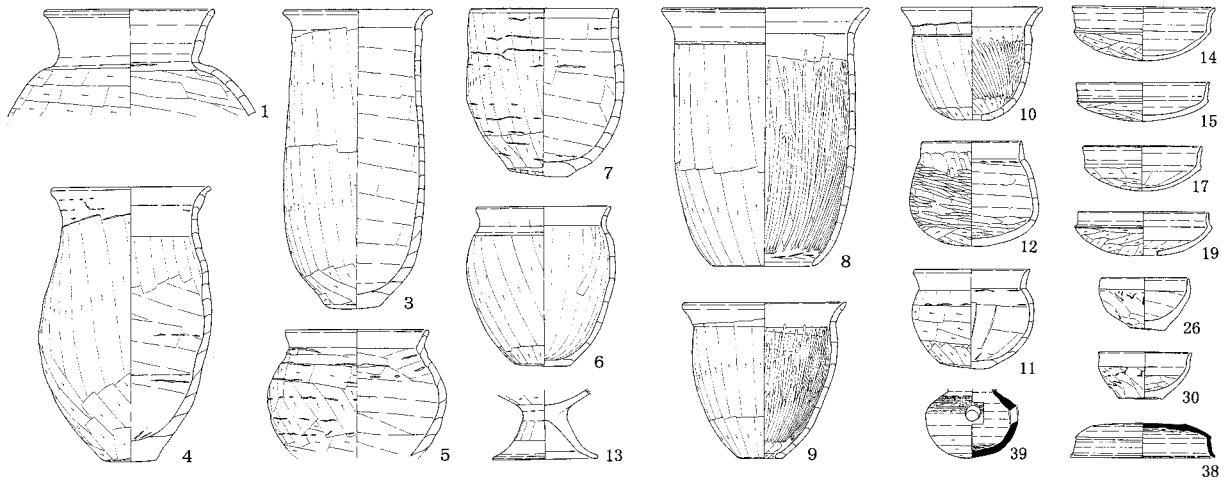
第57号住居跡

第56図 第Ⅲ期の土器

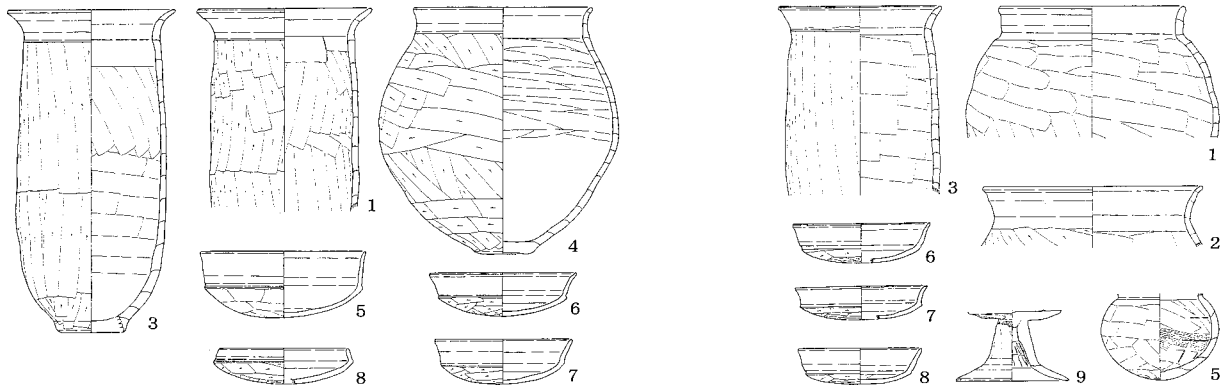
＜第Ⅱ期＞ 第58号住居跡出土土器が該当する(第55図)。該期の土器も比較的少ないが、器種は高坏・坏(埴)・小形丸底壺に類似した形態の小形壺が見られる。高坏(No 1～3)は、やや小型化したものが主体で、坏部内外面はヨコナデ、脚部外面はナデ調整が主流である。坏(埴)は、口縁部が短く外反するいわゆる和泉型の坏(埴)(No 6・7)と源初坏風の浅い平底の坏(No 5)がある。和泉型坏(埴)は、体部がまだやや深めで、頸部の収縮が強く、口縁部の外傾が若干弱い形態のものであるが、底部は丸底化している。小形壺(No 4)は、中期前半の小形丸底壺の系譜を引く可能性があるものであるが、胴部は扁平化し、底部は平底ぎみの歪な形態で、量的には少量化した段階のものである。おそらく該期は、当地域の住居にカマドが普及する中期(5世紀)の後半段階に位置するものと考えられる。

＜第Ⅲ期＞ 第57号住居跡と第60号住居跡の出土土器が該当する(第56図)。器種は、壺・甕・小形甕・甑・高坏・小形鉢・坏などが見られる。壺(60住No 1)は、口縁部が短い広口壺で、おそらく扁平ぎみの強く張った胴部が付く形態のものと思われる。甕(57住No 1)は、口縁部がやや長めで緩やかに外反し、胴部の中位に最大径を持つもので、小形甕(57住No 4)の底部のように突出底を呈すると思われる長胴ぎみの形態である。甑は、57住No 2の大形甑だけである。胴部の張りが弱く口縁部に最大径をもつ形態で、胴部内面に縦方向の雑なミガキを施す特徴的な調整が見られる。高坏は、和泉型高坏からの系譜を引くもの(60住No 3)と、坏部が模倣坏と思われる鬼高型高坏(57住No 6)がある。坏は、いわゆる坏蓋型模倣坏である(57住No 8～14、60住No 4～6)。口縁部径が11cm代～12cm代の体部がやや深く、器高がまだ高いものが主体であるが(57住No 12～14、60住No 4～6)、口縁部はいずれも外反化が進行し、口唇部は面をもたず尖っている。また、57住No 8やNo 11のような次期に主体になると考えられる体部がやや浅い形態の模倣坏も少量ながら出土している。該期は、おそらく後期(6世紀)前半でもやや新しい段階に位置付けられよう。

＜第Ⅳ期＞ 第64号住居跡・第65号住居跡・第66号住居跡・第74号住居跡・第75号住居跡出土土器が該当する(第57図)。相対的には、第64号住居跡出土土器が他に比べてやや古相である。器種は、土師器の壺・小形壺・小形広口壺・甕・小形甕・甑・小形鉢・高坏・坏・小形坏と、須恵器の坏蓋・甕が見られる。壺(64住No 1)は、第Ⅲ期と同じく口縁部が短い広口壺である。小形壺(65住No 5)は、丸底を呈するもので、該期にはあまり見られないものである。小形広口壺(74住No 6)は、須恵器短頸壺の模倣型で、法量がやや大きめのものである。甕は、長胴甕と胴張甕がある。長胴甕は、口縁部が短めで外反が弱く、胴部がほとんど張らない底部がやや突出ぎみの形態のもの(64住No 3、65住No 3、66住No 1・3)が主体であるが、前段階までの胴部がやや張る形態のもの(64住No 4、74住No 2)も若干残存している。胴張甕は、口縁部が短くあまり外反しないもので、胴部は強く張った球胴ぎみの形態が主体である(66住No 4、65住No 1、74住No 1)。甑は、大形甑と小形甑がある。大形甑(64住No 8)は、あまり該期に一般的な形態のものではなく、その調整技法にも第Ⅲ期の大形甑と同様の胴部内面に縦方向の雑なミガキを施す古い技法が見られ、同じ第64号住居跡から出土した小形甑(64住No 9・10)にも、同様の古い内面ミガキ技法が施されている。この甑に見られる内面ミガキ技法は、当地域では該期にはすでに施されないものが一般的で、この第64号住居跡出土の大形甑と小形甑はやや特異である。また、第74号住居跡出土No 3の小形甑は、焼成後に底部穿孔を施した転用甑である。小形鉢は、頸部が収縮して屈曲するものと頸部が収縮しないで開くものがあり、形態にバラエティーが見られる。高坏は、第64号住居跡の覆土中から鬼高型高坏の脚部破片(64住No 13)と、第65号住居跡から和泉型高坏

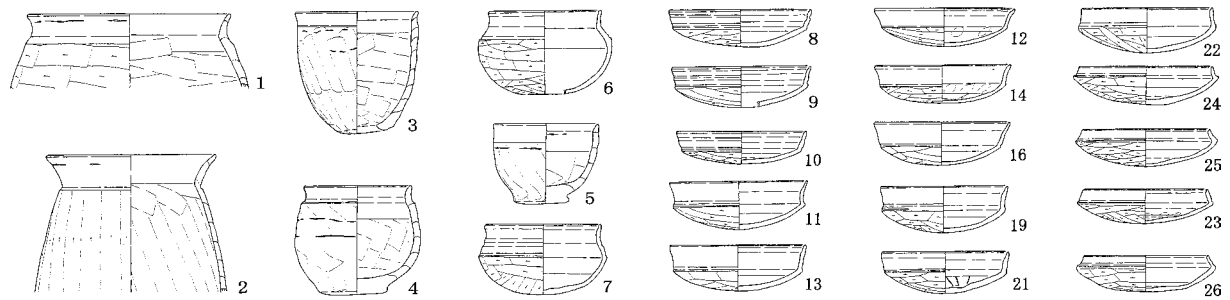


第64号住居跡

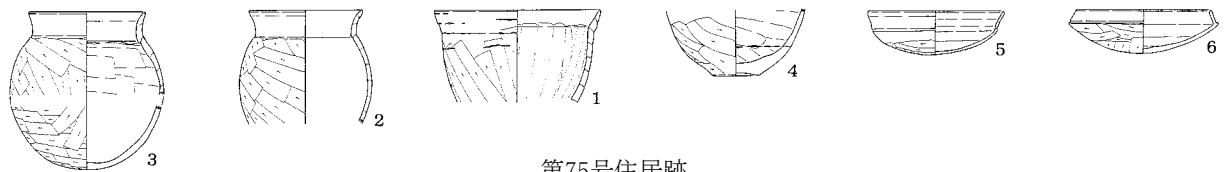


第66号住居跡

第65号住居跡



第74号住居跡



第75号住居跡

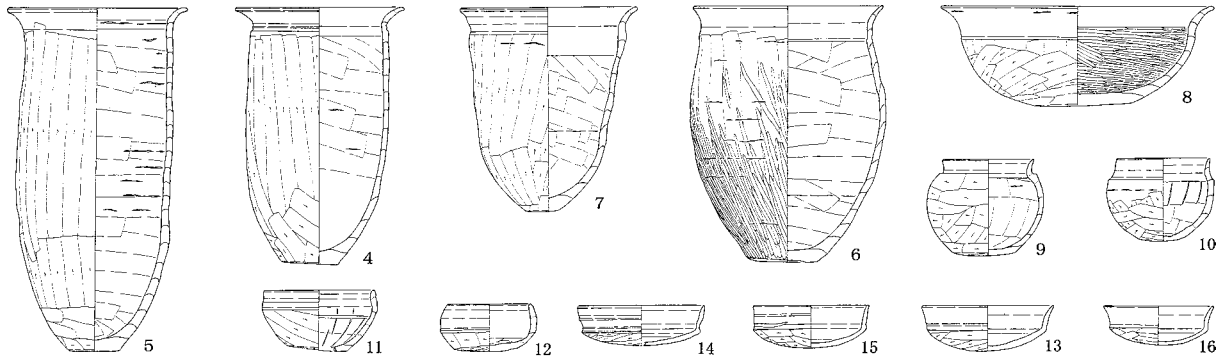
第57図 第Ⅳ期の土器

の系譜を引くと思われる脚部の破片(65住No9)が出土しているだけであるが、いずれも該期まで残存するものか明確ではない。当地域では、該期にはこれまでの和泉型・鬼高型の高坏はほとんど衰退し、群馬県地方に分布の中心をもつ長脚系高坏が小数ながら見られるようになる程度である。坏は、模倣坏が主体で、坏蓋型模倣坏と坏身型模倣坏がある。坏蓋型模倣坏は、有段口縁坏と単純口縁坏が見られる。坏蓋型有段口縁坏(74住No8～10)は、口縁部径が14cm～15cm程度の大ぶりで、体部が浅く器高の低い形態で、口縁部外面の段は1段のものが主体である。坏蓋型単純口縁坏も、口縁部径が14cm前後の大ぶりで、体部が浅く器高の低い形態で、口縁部の外反が強いものが主体である。坏身型模倣坏も、有段口縁坏と単純口縁坏がある。坏身型有段口縁坏(74住No7)は、体部が深く器高の高い形態のもので、口縁部は伸長して外面中位の段を境に上半は外反している。坏身型単純口縁坏も、口縁部径が14cm前後の大ぶりのものが主体で、口縁部は短く内傾し、体部はやや浅めの形態である。小形坏は、第64号住居跡の覆土中から、類似した形態のものが18個体以上出土している(64住No20～37)。形態は、口縁部径が10cm程度、器高が5cm程度の平底の坏で、口縁部が内湾ぎみに開くものが主体であるが、若干外反するものも少数ある(64住No30)。いずれも口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ整形であるが、底部外面には木葉痕を残すものと糸切り風の切り離し痕をもつものが見られる。これらは、同一形態の小形坏が特定遺構からまとまって出土した当地域の女池遺跡A地点(恋河内2004)の様相と類似しており、ほぼ同一時期の女池遺跡第1号堅穴状遺構から出土した小形坏D類の底部を削り落とさない形態のものに類似している。

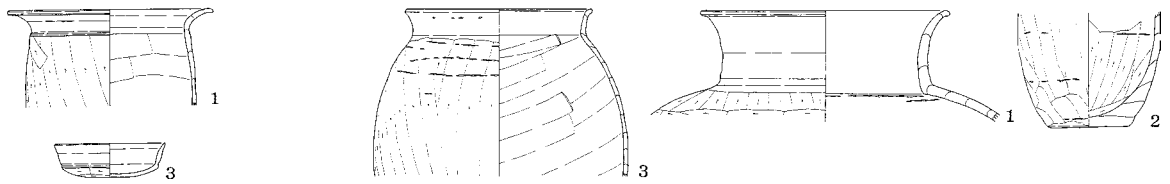
須恵器の坏蓋(64住No38)は、口縁部径が15.4cmのやや大ぶりで、天井部が浅く器高の低い形態である。口縁部が外反して「ハ」の字状に開く特徴的な形態のもので、「関東型」在地产須恵器(酒井1991)の中で、「須恵器坏蓋の模倣として成立した土師器坏(鬼高式土器)の再模倣」と考えられる「上野に特有の須恵器坏蓋」とされるものであろう(渡辺2005)。

該期は、胴部の張りがなく長胴甕や口縁部径が大きくなった模倣坏などの特徴的な器種が主体となる時期で、後期(6世紀)後半の段階に位置付けられよう。

<第V期> 第4号住居跡・第52号住居跡・第62号住居跡出土土器が該当する(第58図)。この中で第4号住居跡出土土器は、直接対比できる器種がないものの、他の住居跡出土土器に比べて新しい可能性もあり、あるいは次期に下るかもしれない。器種は、土師器の大形壺・甕・大形鉢・小形鉢・坏などが見られる。大形壺(4住No1)は、口縁部がやや短めで外傾の弱い広口壺で、覆土中から出土した破片であるため該期に伴うものか明確ではないが、おそらく須恵器の大甕を意識して作られたものであろう。このような土師器の大形壺は、水辺の祭祀などに供献される場合が多く、堅穴式住居から出土することは比較的少ない。甕は、長胴甕と胴張甕がある。長胴甕は、前段階と同じく胴部が張らない形態で、前段階のものに比べて口縁部の外反が強く、胴部下半の張りがなく胴部中位から底部に向かってスマートに移行する形態になっている。法量差があり、概ね大(62住No1～3・5)・中(62住No4)・小(62住No7)の3タイプに分かれる。胴張甕は、口縁部が緩やかに外反し、胴部の張りがやや弱い胴長の形態のものが主体で、外面の調整がケズリのもの(4住No3)とナデの後雑なミガキを施すもの(62住No6)がある。大形鉢(62住No8)は、扁平化して器高がかなり浅くなった形態のもので、内面にミガキ調整を施して黒色処理された可能性がある。小形鉢は、頸部が括れて口縁部がやや外反するもの(62住No9・10)と、口縁部がやや屈曲する平底のもの(62住No11)がある。坏は、坏蓋型模倣



第62号住居跡



第52号住居跡

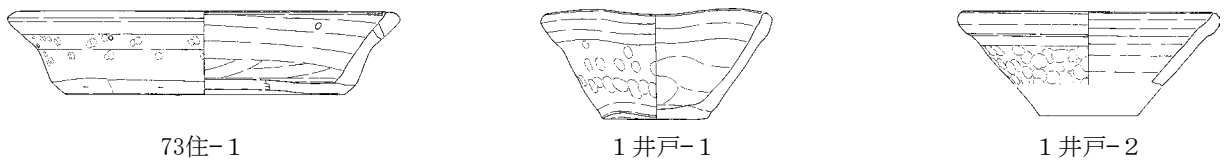
第4号住居跡

第58図 第V期の土器

杯が主体で、前段階に比べてやや小ぶりのものが主体になっている。形態は、有段口縁杯と単純口縁杯がある。有段口縁杯(62住No14・15)は、口縁部径が13cm~14cm代のやや小ぶりで、体部が浅い形態のもので、口縁部外面の段は1段である。単純口縁杯(62住No13・16)は、口縁部が緩やかに外反し、体部が浅い形態のものであるが、口縁部径が11cm代の小ぶりのもの(52住No3、62住No16)も見られるようになる。該期は、先に述べたように第4号住居跡出土土器が次期に下る可能性があり、それを考慮すると後期後半の6世紀末~7世紀前半に位置付けられよう。

第2節 E地点出土の中世在地産土器の様相

E地点の調査で検出された中世の遺構は、E1区の方型竪穴状遺構3基と井戸跡1基で、それらからは少量ながら中世の陶磁器や在地産土器が出土している。陶磁器は、E1区の第30号土坑の覆土中から龍泉窯系青磁碗の小破片(第49図No1)が1片出土しただけである。この龍泉窯系青磁碗は、外面に鎬蓮弁文を施すI-5b類(横田・森田1978)と思われ、13世紀中頃を中心とする時期のものであろう(山本1995)。在地産の土器は、火鉢と片口鉢が出土している。火鉢は、第73号住居跡とした方型竪穴状遺構から1点出土している(73住No1)。形態は、口縁部がやや外反ぎみに開き、口唇部がやや丸みを持った逆台形を呈するもので、類似した形態のものは、本遺跡の周辺では本庄市(旧児玉町)老丁



73住-1

1井戸-1

1井戸-2

第59図 E地点出土の中世の土器

田遺跡第4号井戸跡(恋河内1998)や東本庄遺跡第6号溝跡(町田他2004)でも出土している。おそらく、河野眞知郎氏のI B類に該当すると思われる、13世紀中葉から14世紀前葉に位置付けられている(河野1993)。片口鉢は、第1号井戸跡の覆土中から出土しただけで、いずれも在地産のものである(1井戸No1・2)。形態は、口縁部断面の形状が半月状に肥厚して内面がくぼむもの(No2)と、口唇部がやや丸みをもった平坦ぎみの角口縁状のもの(No1)で、後者は底部外面に静止糸切り痕を残している。時期は、いずれも荒川正夫氏によって13世紀後半に位置付けられている(荒川1998)。

以上のように、E地点から出土した中世の土器類は、少量ながらいずれも13世紀後半頃を中心とすると思われるもので、あまり時期差はないようである。本遺跡と隣接する新宮遺跡や南共和遺跡の調査(恋河内1995)では、明確な中世の遺構が検出されていないことから、本遺跡の中世遺構群は、比較的小規模で短期間に営まれた可能性が高いと思われる。

<参考文献>

- 荒川 正夫 (1998) 「中世前期の館跡と出土遺物」 『大久保山VI』 早稲田大学本庄校地文化財調査報告6 早稲田大学
- 立石 聖詞 他 (1982) 『後張I』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集
(1983) 『後張II』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集
- 河野眞知郎 (1993) 「中世鎌倉火鉢考」 『考古論叢神奈河』 第2号 神奈川県考古学会
(1995) 『中世都市鎌倉』 講談社選書メチエ49
- 恋河内昭彦 (1995) 『南共和・新宮遺跡』 児玉町遺跡調査会報告書第6・7集
(1996) 『辻堂遺跡I』 児玉町文化財調査報告書第19集
(1998) 『向田A・向田B・老丁田遺跡』 児玉町文化財調査報告書第27集
(2004) 『女池遺跡II (A地点の調査)』 児玉町遺跡調査会報告書第16集
(2005) 『後張遺跡III - C地点の調査 -』 児玉町遺跡調査会報告書第20集
(2008) 『塚島遺跡II - F地点の調査 -』 本庄市遺跡調査会報告書第22集
- 酒井 清治 (1991) 「須恵器の編年 関東」 『古墳時代の研究』 6 須恵器と土師器 雄山閣出版
- 坂本 和俊 (1984) 「埼玉県」 『古墳時代土器の研究』 古墳時代土器研究会
- 鈴木 徳雄 他 (1991) 『辻ノ内・中下田・塚島・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第15集
- 中村 倉司 (1979) 「児玉郡における鬼高式土器の編年について」 『宇佐久保遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告書第38集
- 町田奈緒子 他 (2004) 『東本庄』 本庄市埋蔵文化財調査報告第29集
- 山本 信夫 (1995) 「中世前期の貿易陶磁器」 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 横田賢次郎・森田 勉 (1978) 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」 『九州歴史資料館研究論集』 4
- 渡辺 一 (2005) 「東国の須恵器」の成立と展開 『古代東国の考古学』 大金宣亮氏追悼論文集 慶友社

写 真 图 版



E 1 地点調査区全景（北から）



E 1 地点調査区全景（南東から）



E 2・3 調査区全景



E 6～8 調査区全景



E 7 調査区全景



E 8 調査区全景

図版 4



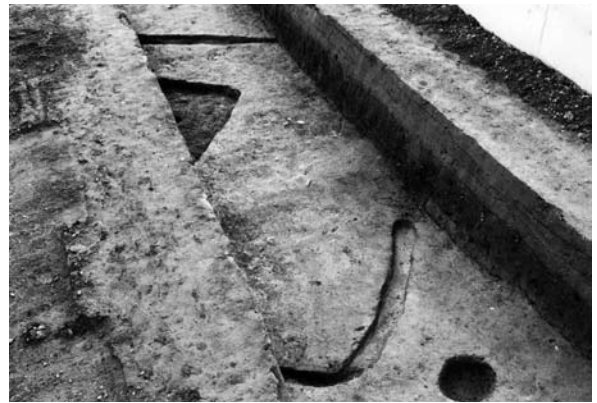
第4号住居跡



第37号住居跡



第52号住居跡



第55・56号住居跡



第57号住居跡



第57号住居跡カマド



第58号住居跡



第58号住居跡遺物出土状態



第59号住居跡



第60号住居跡



第60号住居跡カマド



第61号住居跡



第62号住居跡



第62号住居跡遺物出土状態



第62号住居跡カマド



第63号住居跡



第64号住居跡



第64号住居跡遺物出土状態



第65号住居跡



第65号住居跡遺物出土状態



第66号住居跡



第66号住居跡遺物出土状態



第67号住居跡



第69号住居跡

図版 7



第70号住居跡



第71号住居跡



第72号住居跡



第73号住居跡



第71～73号住居跡（北より）



第71～73号住居跡（東より）



第74号住居跡



第74号住居跡遺物出土状態



第74号住居跡カマド



第74号住居跡貯蔵穴



第75号住居跡



第75号住居跡カマド



第75号住居跡貯蔵穴



E地点調査区東側



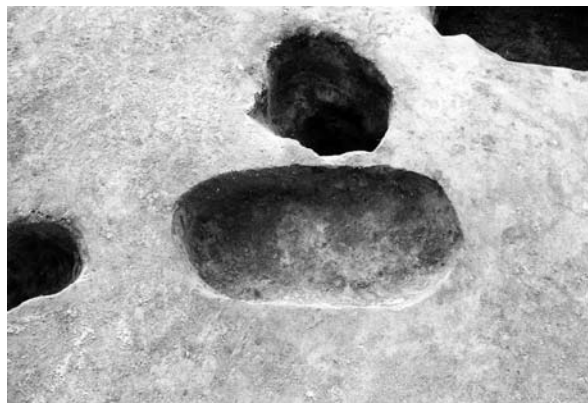
第1号井戸跡



第1号井戸跡石出土状態



第17号土坑



第19号土坑



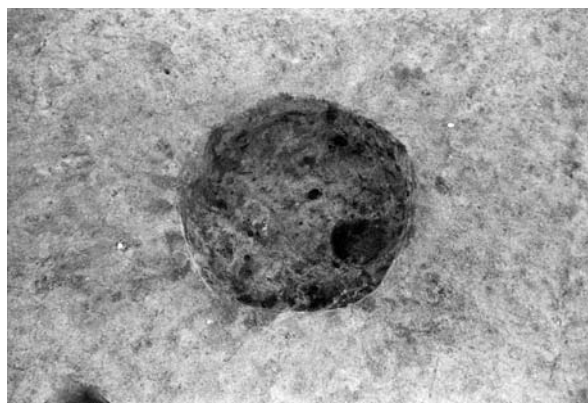
第20号土坑



第21号土坑



第22号土坑



第24号土坑



第27号土坑



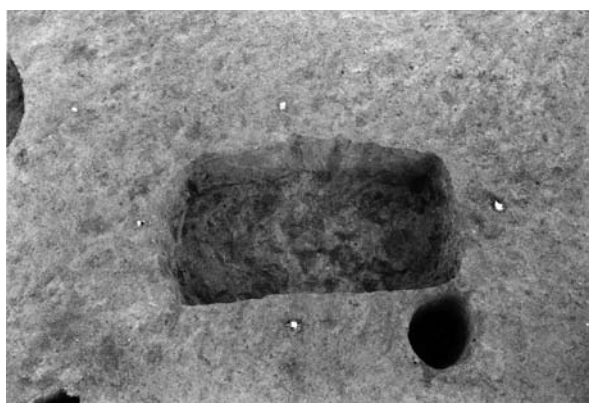
第28号土坑



第29号土坑



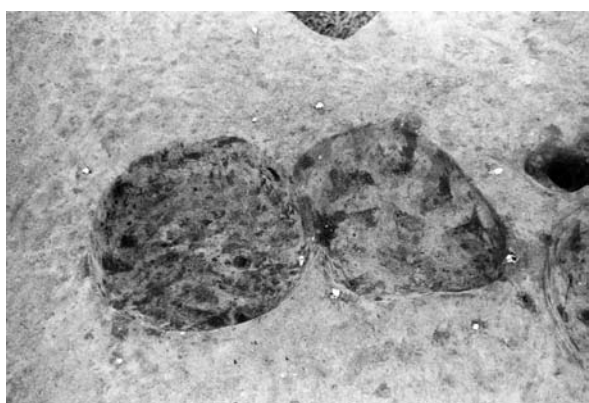
第30号土坑



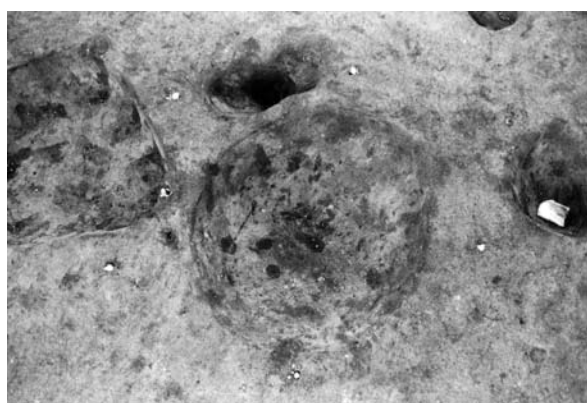
第31号土坑



第32号土坑



第33·34号土坑



第35号土坑



第36~39号土坑



第6号沟迹



4住-1



|



|



4住-3



4住-4



4住-5



52住-3



56住-1



37住-4



57住-1



57住-3



57住-4



57住-5



57住-6



57住-7



57住-8



57住-9



57住-10



57住-11



57住-12



57住-13



57住-14



58住-1



58住-3



58住-4



58住-5



58住-6



60住-1



60住-3



60住-4



60住-5



61住-1



61住-2



62住-9



62住-1



62住-2



62住-3



62住-4



62住-5



62住-6



62住-7



62住-10



62住-8



62住-11



62住-12



62住-13



62住-14



62住-15



62住-16



64住-1



64住-3



64住-4



64住-2



64住-6



64住-7



64住-8



64住-11



64住-10



64住-9



64住-12



64住-13



64住-14



64住-15



64住-21



64住-22



64住-23



64住-24



64住-25



64住-26



64住-27

64住-28

64住-29



64住-30

64住-31

64住-32



64住-20

64住-33

64住-34



64住-38



64住-35



64住-37



64住-16



64住-17



64住-18



64住-19



64住-38



64住-39



65住-1



65住-2



65住-3



65住-4



65住-5



65住-6



65住-7



65住-8



65住-9



66住-1



66住-3



66住-4



66住-2



66住-5



66住-6



66住-7



66住-8



72住-1



73住-1



70住-1



74住-8



74住-9



74住-10



74住-3



74住-4



74住-5



74住-7



74住-6



74住-11



74住-12



74住-13



74住-14



74住-15



74住-16



74住-17



74住-18



74住-19



74住-20



74住-21



74住-22



74住-23



74住-24



74住-25



74住-26



75住-5



75住-1



75住-3



1井戸-1



75住-6



1井戸-2



30土坑-1



1井戸-3



73住-1



64住-40



74住-27



72住-2



64住-凹石

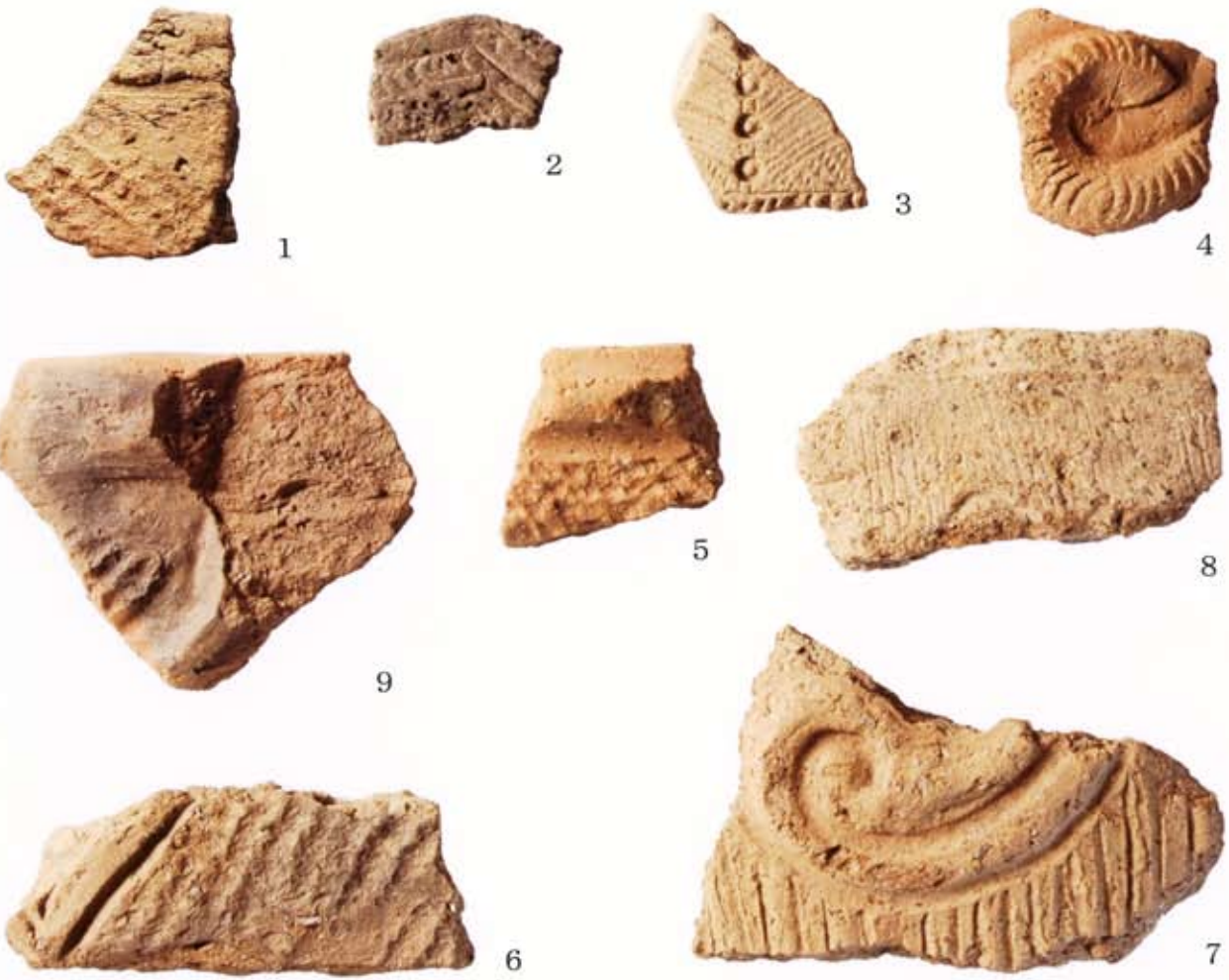


64住-磨石



64住-磨石

図版21



報 告 書 抄 録

フリガナ	ツカバタケイセキⅢ						
書名	塚畠遺跡Ⅲ						
副書名	E地点の調査						
シリーズ	本庄市遺跡調査会報告書	巻次	第23集				
編著者	恋河内昭彦						
編集機関	本庄市遺跡調査会						
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 TEL 0495-25-1185						
発行日	西暦2008年(平成20年)8月8日						
フリガナ	フリガナ	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡	(°'")	(°'")		
塚畠遺跡 (E地点)	ほんじょうしこだまちょう 本庄市児玉町 共栄288-1 他	112119	53-028	36°12'50"	139°08'13"	20031030 ~20031226	578 m ² 倉庫 建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
塚畠遺跡 (E地点)		縄文時代 前・中期		土器片(有尾式、諸磯a式、 勝坂式、加曾利EⅠ~Ⅲ式)			
	集落	古墳時代 後期	竪穴住居21	土師器、須恵器、土錘、磨 石			
	屋敷	中世	方形竪穴状遺構3、井戸 1	龍泉窯系青磁碗、在地産片 口鉢、火鉢、古銭(元祐通 寶)、砥石			
		近世後半 以降	土坑5、溝1				

本庄市遺跡調査会報告書第23集

塚 畠 遺 跡 Ⅲ

-E地点の調査-

平成20年8月1日 印刷

平成20年8月8日 発行

発行／本庄市遺跡調査会

埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号
(本庄市教育委員会文化財保護課内)

印刷／山進社印刷株式会社